

家

(下)

島崎藤村

青空文庫



## 一

橋本の正太は、叔父を訪ねようとして、両側に樹木の多い郊外の道路へ出た。

叔父の家は広い植木屋の地内で、金目垣かなめがき一つ隔てて、直にその道路へ接したような位置にある。垣根の側わきには、細い乾いた溝みぞがある。人通りの少い、真空のよう静かな初夏の昼過で、荷車の音もしなかつた。垣根に近い窓のところからは、叔母のお雪が顔を出して、格子に取り繩とりすがりながら屋外そとの方を眺ながめていた。

正太は窓の下に立つた。丁度その家の前に、五歳ばかりに成る児こが余念もなく遊んでいた。

「叔母さん、菊ちゃんのお友達？」

心易やすい調子で、正太はそこに立つたままお雪に尋ねてみた。子供は、知らない大人に見られることを羞はじるという風であつたが、馳出かけだそうともしなかつた。

短い着物に細帯を巻付けたこの娘の様子は、同じ年頃のお菊のことを思出させた。

お雪が夫と一緒に、三人の娘を引連れ、遠く山の上から都会の方へ移つた時は、新しい

家の樂みを想像して來たものであつた。引越の混雜ごたごたの後で、三番目のお繁——まだ誕生を済ましたばかりのが亡くなつた。丁度それから一年過ぎた。復た二番目のお菊が亡くなつた。あのお菊が小さな下駄はを穿いて、好きな唱歌を歌つて歩くような姿は、最早家の周囲まわりに見られなかつた。

姉のお房とは違ひ、お菊の方は遊友達も少なかつた。「菊ちゃん、お遊びなさいな」と言つて、よく誘いに來たのはこの近所の娘である。

道路には日があたつていた。新緑の反射は人の頭脳の内部あたまなかまでも入つて來た。明るい光と、悲哀かなしみとで、お雪はすこし逆上のぼせるような眼付をした。

「まあ、正太さん、お上んなすつて下さい」

こう叔母に言われて、正太は垣根越しに家の内うちなかを覗いて見た。

「叔父さんは？」

「一寸歩いて來るなんて、大屋さんの裏の方へ出て行きました」

「じゃ、私も、お裏の方から廻つて参りましよう」

正太はその足で、植木屋の庭の方へ叔父を見つけに行くことにした。

この地内には、叔父が借りて住むと同じ型の平屋ひやがまだ外ほかにも二軒あつて、その板屋根

が庭の樹木を隔てて、高い草葺の母屋と相対していた。植木屋の人達は新茶を造るに忙しい時であつた。縁えんにちむけ 日向の花を仕立てる畠の尽きたところまで行くと、そこに木戸がある。その木戸の外に、茶畠、野菜畠などが続いている。畠の間の小径のところで正太は叔父の三吉と一緒に成つた。

新開地らしい光景は二人の眼前めのまえに展けていた。ところどころの樹木の間には、新しい家屋が光つて見える。青々とした煙も立ち登りつつある。

三吉は眺め入つて、

「どうです、正太さん、一年ばかりの間に、随分この辺は変りましたろう」

と弟か友達にでも話すような調子で言つて、茶畠の横手に養鶏所の出来たことなどまで正太に話し聞せた。

何となく正太は元気が無かつた。彼の上京は、叔父が長い仕事を持つて山を下りたよりも早かつた。一頃は本所辺に小さな家を借りて、細君の豊世と一緒に仮の世帯を持つたが、間もなくそこも畳んで了い、細君は郷くにへ帰し、それから単独に成つて事業の手蔓を

探した。彼の氣質は普通の平坦な道を歩かせなかつた。乏しい旅費を懐にしながら、彼は遠く北海道から樺太まで渡り、空しくコルサコフを引揚げて来て、青森の旅舎で酷く煩つたこともあつた。もとより資本あつての商法では無い。磐城炭の売込を計劃したことも有つたし、南清地方へ出掛けようとして、会話の稽古までしてみたことも有つた。未だ彼はこれという事業に取付かなかつた。唯、焦心つた。

そればかりでは無い。叔父という叔父は、いづれも東京へ集つて来ている。長いこと家に居なかつた実叔父は、壯健で帰つて来ている。森彦叔父は山林事件の始末をつけて、更に別方面へ動こうとしている。三吉叔父も、漸く山から持つて來た仕事を纏めた。早く東京で家を持つようにならう、この考えは正太の胸の中を往来していた。

動き光る若葉のかげで、三吉、正太の二人はしばらく時を移した。やがて庭の方へ引返して行つた。葱を仕立てる場所について、植木室の側を折れ曲ると、そこには盆栽棚が造り並べてある。香の無い、とは言え誘惑するように美しい弁の花が盛んに咲乱れている。植木屋の娘達は、いずれも素足に尻端折で、威勢よく井戸の水を汲んでいるのもあれば、如露で花に灑いでいるのもあつた。三吉は自分の子供に逢つた。

「房ちゃん」

と正太も見つけて呼んだ。

お房は、耳のあたりへ垂下する厚い髪の毛を煩う。そうにして、うつとりとした眼付で二の方を見た。何處か氣分のすぐれないこの子供の様子は、余計にその容貌を娘らしく見せた。

「叔父さん、まだ房ちゃんは全然快くなりませんかネ」

「どうも、君、熱が出たり退いたりして困る。二人ばかり医者にも診て貰いましたがネ。大して悪くもなさそうですが、快くも成らない——なんでも医者の言うには腸から来ている熱なんだそうです。」

こんな話をしながら、二人はお房を連れて、庭づたいに井戸のある方へ廻った。

「でも、房ちゃんは余程姉さんらしく成りましたネ」

と正太は木犀の樹の側を通る時に言つた。

この木犀は可成の古い幹で、細長い枝が四方へ延びていた。それを境に、疎な竹の垣を繞らして、三吉の家の庭が形ばかりに区別してある。

「お雪、房ちゃんに薬を服ましたかい」

と三吉は庭から尋ねてみた。正太も縁側のところへ腰掛けた。

「どういうものが、房ちゃんはあんな風なんですよ」とお雪はそこへ来て、娘の方を眺めながら言つた。「すこし屋外そとへ遊びに出たかと思うと、直に帰つて来て、ゴロゴロします。今も、父さん達のところへ行つて見ていらつしやいツて、私が無理に勧めて遣つたんですよ」

長い労作の後で、三吉も疲れていた。不思議にも彼は休息することが出来なかつた。唯だ疲れに抵抗するような眼付をしながら、甥おいと一緒に庭へ向いた部屋へ上つた。

「正太さん、大屋さんから新茶を貰いました——一つ召上つてみて下さい」

こう言つてお雪が持運んで來た。三吉は、その若葉の香を嗅ぐようなやつを、甥にも勧め、自分でも啜すすつて、仕事の上の話を始めた。彼の話はある露西亞人ロシアのこととに移つて行つた。その人のことを書いた本の中に、細君すぢちが酸乳ヨーグルトというものを製えて、著作で勞れた夫に飲ませたというところが有つた。それを言出した。

「ああいう強壯な体格そなを具えた異人ですらもそうかナア、と思いましたよ。なにしろ、僕などは随分無理な道を通つて来ましたからネ。仕事が済んで、いよいよそこへ筆を投出し

た時は——その心こころ地もちは、君、何とも言えませんでした。部屋中ゴロゴロころ転ころがつて歩いたいような気がしました」

正太は笑わずにいられなかつた。

三吉は言葉を繼いで、「自分の行けるところまで行つてみよう——それより外に僕は何な事ことも考かんえていなかつたんですね。一方へ向むかいては艱かん難なんとも戦わねばならずサ。それに子供は多いと来てましようう。ホラ、あのお繁の亡くなつた時には、山から書籍ほんを詰めて持つて來た茶箱けいばくを削くずり直して貰うつて、それを子供の棺にして、大屋おおやさんと二人で寺まで持つて行きました。そういう勢ぜいでしたサ。お繁が死んでくれて、反かえつて難あら有あかつたなんて、串くしじ談とうだん半分にも僕はそんなことをお雪に話しましたよ……ところが君、今度は家のやつが鳥目などに成るサ……」

「そうそう」と正太も思出したように、「あの時はエラかつた。私も新宿まで鶏肉とりを買い」

に行つたことが有りました

「そんな思をして骨を折つて、漸くまあ何か一つ為した、と思つたらどうでしょうう。復おたお菊きくが亡しまくなつた。僕は君、悲しいなんていうところを通とおり越こして、呆氣あつけに取られて了しまいさらした——まるで暴風ぬ暴風にでも、自分の子供を浚さくらつて持つて行かれたような——」

思わず三吉はこんなことを言出した。この郊外へ引移つてから、彼の家では初めての男の児が生れていた。たねお種夫と言つた。その乳呑児ちのみごを年若な下婢おんなに渡して置いて、やがてお雪も二人の話を聞きに来た。

「どんなにか叔母さんも御力落しでしよう」と正太はお雪の方へ向いて、慰め顔に、「郷くに里の母からも、その事を手紙に書いてよこ寄しました」

「菊ちゃんが死んじやつたんでは、ほんと眞実にツマリません」とお雪が答える。

「此こないだ頃は君、大変な婦人おんなが僕の家へ舞込んで来ました」と三吉が言つてみた。「——切下げ髪にして、黒い袴はかまを穿いてね。突然いきなり入つて来たかと思うと、説教を始めました。恐しい権けん幕まくでお雪を責めて行きましたツけ」

「大屋さんの御親類」とお雪も引取つて、「その人が言うには、なんでも私の信心が足りないんですツて——ですから私の家には、こんなに不幸ばかり続くんですツて——この辺は、貴方あなた、それは信心深い処なんですよ」こう正太に話し聞かせた。

不安な眼付をしながら、三吉は家の中を眺め廻した。中の部屋の柱のところには、お房がリボンの箱などを取出して、遊びに紛れていた。三吉は思付いたように、お房の方へ立つて行つた。ちよつと一寸、子供の額へ手を宛あててみて、復た正太の前に戻つた。

その時、表の格子戸の外へ来て、何かゴトゴト言わせているものが有つた。

「菊ちゃんのお友達が来た」

と言つて、お雪は玄関の方へ行つてみた。しばらく彼女は上り端の障子のところから離れなかつた。

「オイ、菓子でもくれて遣りナ」

と夫に言われて、お雪は中の部屋にある仏壇の扉を開けた。そして、新しい位牌に供えてあつた物を取出した。近所の子供が礼を言つて、馳出して行つた後でも、まだお雪は耳を澄まして、小さな下駄の音に聞入つた。

女学生風の袴を着けた娘がそこへ帰つて來た。お延<sup>のぶ</sup>と言つて、郷里<sup>くに</sup>から修行に出て來た森彦の総領——三吉が二番目の兄の娘である。この娘は叔父の家から電車で学校へ通つていた。

「兄さん、被<sup>いらつ</sup>入<sup>いり</sup>しやい」

とお延は正太に挨拶<sup>あいさつ</sup>した。従兄妹同志の間ではあるが日頃正太のことを「兄さん、兄

さん」と呼んでいた。

毎日のようにお雪は子供の方へ出掛けるので――尤も、寺も近かつたから――その日もお延を連れて行くことにした。後に残つた三吉と正太とは、互に足を投出したり、寝転んだりして話した。

その時まで、正太は父の達雄のことに就いて、何事も話さなかつた。遽かに、彼は坐り直した。

「まだ叔父さんにも御話しませんでしたが、漸く吾家の阿父の行衛も分りました」

こんなことを言出した。久しく居所さえも不明であつた達雄のことを聞いて、三吉も身を起した。

「先日、Uさんが神戸の方から出て来まして、私に逢いたいということですから――」と  
言つて、正太は声を低くして、「その時Uさんの話にも、阿父も彼方あちらで教員おきんしてゐるそ  
うです。まあ食うだけのことには困らん……それにもしても、あんなに家を滅茶滅茶めちゃめちゃにして出  
行つた位ですから、もうすこし阿父も何か為すするかと思ひましたよ」

「あの若い芸者はどうしましたろう――達雄さんが身受をして連れて行つたという少婦が  
有るじやありませんか」

「あんなものは、最早疾とつくにどうか成つて了いましたあね」

「そつかナア」

「で、叔父さん、Uさんが言うには、考えて見れば橋本さんも御氣の毒ですし、ああして唯孤独ひとりで置いてもどうかと思うからして、せめて家族の人と手紙の遣取やりとり位はさせて進あげたいのですツて」

「では、何かネ、君は父親おとうさんと通信おとつを始める積りかネ」と三吉が尋ねた。

「否いいえ」正太の眼は輝いた。「勿論もちろん——私が書くべき場合でもなし、阿父にしたところが書けもしなからうと思ひます。そりやあもう、阿父が店のものに對しては、面向かおむけの出来ないようなことをして行きましたからネ。唯、母が可哀そうです……それを思うと、母だけには内証でも通信させて遣りたい。Uさんが間に立つてくれるとも言いますから」

こういう甥の話は、三吉の心を木曾川きそがわの音のする方へ連れて行つた。旧い橋本の家は、曾遊そうゆうの時のままで、未だ彼の眼にあつた。

「変れば変るものさネ。君の家の姉さんのこと、豊世さんのこと、君のこと——何な事も達雄さんは知るまいが。ホラ、僕が君の家へ遊びに行つた時分は、達雄さんも非常に勤勉な人で、君のことなぞを酷く心配していたのですがナア。あの広い表座敷で、君と

僕と、よく種々な話をしましたツけ。あの時分、君が言つたことを、僕はまだ覚えてい  
ますよ」

「あの時分は、全然私は夢中でした」と正太は打消すように笑つて、「しかし、叔父さん、  
私の家を御覧なさい——不思議なことには、代々若い時に家を飛出していますよ。第一、  
祖父さんがそうですし——阿父がそうです——」

「へえ、君の父親さんの若い時も、やはり許諾を得ないで修業に飛出した方がねえ」

「私だつてもそうでしょう——放縱な血が流れているんですね」

と正太は言つてみたが、祖父の変死、父の行衛などに想い倒つた時は、妙に笑えなかつ  
た。

やがて庭にある木犀の若葉が輝き始めた。お雪は姪と連立つて、急いで帰つて來た。彼  
女の袂の中には、娘の好きそうなものが入れてあつた。買物のついでに、ある雑貨店から  
求めて來た毛糸だ。それをお房にくれた。

「今し方まで菊ちゃんのお墓に居たものですから、こんなに遅くなりました——延ちゃん  
と二人でさんざん泣いて來ました」

「お雪は夫に言つて、いそいそと台所の方へ行つて働いた。

正太がこの郊外へ訪ねて来る度に、いつも叔父は仕事々々でいそがしがつていて、その日のようにユツクリ相手に成つたことはめずらしかつた。夕飯の仕度が出来るまで、二人は表の方の小さな部屋へ行つてみた。畠から鍬くわを昇かついで来た農夫、町から戻つて来た植木屋の職人——そういう人達は、いずれも一日の労働を終つて窓の外を通過たゞぎる。

三吉は窓のところに立つて、ションボリと往来の方を眺めながら、

「どうかすると、こういう夕方には寂しくて堪たまえられないようなことが有るね——それが、君、何の理由も無しに」

「私の今日の境涯こんじやでは猶なおさら更ますそうです——しかし、叔父さん、そういう感じのする時が、一番心は軟かですネ」

こう正太が答えた。次第に暮れかかつて來た。その部屋の隅すみには、薄暗い壁の上に、別に小窓が切つてあつて、そこから空氣を導くようになつてゐる。青白い、疲れた光線は、人知れずその小障子のところへ映つてゐた。正太はそれを夢のよう眺めた。

夕飯はお雪の手づくりのもので、客と主人とだけ先に済ました。未だ正太は言いたいことがあるつて、それを言い得ないでいるという風であつたが、到頭三吉に向つてこう切出した。

「実は——今日は叔父さんに御願いが有つて参りました」

他事ほかでも無かつた。すこし金を用立ててくれろというので有つた。これまでよく叔父のところへ、五円貸せ、十円貸せ、と言つて来て、樺太からふと行の旅費まで心配させたものであつた。

「そんなに君は困るんですか」と三吉は正太の顔を見た。「郷里くにの方からでも、すこし兵ひ糧ようろうを取寄せたら可いじや有りませんか」

「そこです」と正太は切ないという容子ようすをして、「なるべく郷里へは言つて遣りたくない……あして、店は店で、若い者が堅めていてくれるんですからネ」

萎しおれた正太を見ると、何とかして三吉の方ではこの甥の銷沈しょうちんした意氣を引立たせたく思つた。彼はいくらかを正太の前に置いた。それがどういう遣つかい道の金であるとも、深く鑿ほつて聞かなかつた。

やがて正太は自分の下宿を指して帰つて行つた。後で、お雪は台所の方を済まして出て来て、夫と一緒に釣洋燈つりランプの前に立つた。

「正太さんは、未だ、何事も為すつていらッしやらないんでしようか」

「どうも思わしい仕事が無さそうだ。石炭をやつてみたいとか、何とか、来る度に話が変

つてゐる。何卒して早く手足を延ばすようにして遣りたいものだネ——あの人も、橋本の若  
旦那かだんなとして置けば、立派なものだが——

こういう言葉を交換とりかわして置いて、夫婦は同じようにお房の様子を見に行つた。

お房の発熱は幾日となく続いた。庭に向いた部屋へ子供の寝床を敷いて、その枕まくら頭もと  
へお雪は薬の罐びんを運んだ。鞠まりだの、キシャゴだの、毛糸の巾きん着ちやくだの、それから娘の好  
きな人形なども、運んで行つた。お房は静止じつとしていなかつた。臥ねたり起きたりした。

ある日、三吉は町から買物して、子供の方へ戻つて來た。父の帰りと聞いて、お房は寝ね  
衣まきのまま、床の上に起直つた。そして、家の周囲まわりに元気よく遊んでいる近所の娘達を羨うらや  
ような様子して、子供らしい眼付で父の方を見た。

「房ちゃん、御土産おみやが有るぜ」

と三吉は美しい色のリボンをそこへ取出した。彼は、食のすすまない子供の為ためにと思つ  
て、ミルク・フツドなども買求めて來た。

「へえ、こんな好いのをお父さんに買つて頂いたの」

とお雪もそこへ来て言つて、そのリボンを子供に結んでみせた。

「房ちゃんは何か食べたかネ」と三吉は妻に尋ねた。

「お昼飯に、お粥をホンのぼつちり——牛乳は厭だつて飲みませんし——眞實に、何物も食べたがらないのが一番心配です」

「ねえ、房ちゃん、御医者様の言うことを聞いて、早く快く成ろうねえ。そうすると、父さんが房ちゃんに好く似合うような袴を買つてくれるよ」

こう父に言われて、お房は唯黙頭いた。やがて復た横に成つた。

「ああ、父さんも疲れた」と三吉は子供の側へ身体を投出すようにした。「菊ちゃんが居なくなつて、急に家の内が寂しく成つたネ。ホラ、父さんが仕事をしてゐる時、机の前に二人並べて置いて、『父さんが好きか、母さんが好きか』と聞くと、房ちゃんは直に『父さん』と言うし——菊ちゃんの方は暫時考えていて、『父さんと母さんと両方』だトサー——あれで、菊ちゃんも、ナカナ力外交家だつたネ」「何方が外交家だか知れやしない」とお雪は軽く笑つた。

病児を慰めようとして、三吉は種々なことを持出した。山に居る頃はお房もよく歌つた兎の歌のことや、それからあの山の上の家で、居睡してはよく叱られた下婢が蛙の話を

したことなどを言出した。七年の長い田舎生活の間、あの石垣の多い傾斜の方で、毎年のように旅の思をさせた蛙の声は、まだ三吉の耳にあつた。それを子供に真似て聞かせた。

「ヒヨイヒヨイヒヨイヒヨイヒヨイ……グツグツ……グツグツ……」

「いやあな父さん」

とお房は寝ながら父の方を見て言つた。自然と出て来た微笑は僅かにその口唇に上つた。

「房ちゃん、母さんが好い物を造<sup>こしら</sup>えて来ましたよ——すこし飲んでみておくれな」

とお雪は夫が買つて来たミルク・フツドを茶碗<sup>ちゃわん</sup>に溶かして、匙<sup>さじ</sup>を添えて持つて来た。子供は香ばしそうな飲<sup>のみもの</sup>料を一寸味<sup>あじわ</sup>つたばかりで、余は口を着けようともしなかつた。その晩から、お房は一層激しい発熱の状態<sup>ありさま</sup>に陥つた。何となくこの児の身体には異状が起つて來た。

「眞實に、<sup>ほんと</sup>串<sup>じょうだん</sup>談<sup>だん</sup>じや無いぜ」

と三吉は物に襲われるような眼付をして、いかにしてもお房ばかりは救いたいといふことを妻に話した。不思議な恐怖は三吉の身体を通過ぎた。お雪も碌<sup>ろく</sup>に眠られなかつた。

翌々日、お房は病院の方へ送られることに成つた。病み震えている娘を抱起すようにし

て、母は汚れた寝衣を脱がせた。そして、山を下りる時に着せて連れて来たヨソイキの着物の筒袖つつそでへ、お房の手を通させた。

「まあ、こんなに熱いんですよ」

とお雪が言うので、三吉はコワゴワ子供に触さわつてみた。お房の身体は火のようにな熱かつた。

「病院へ行つて御医者様に診て頂くんだよ——シツカリしておいでよ」と三吉は娘を励ました。

「母さん……前髪をとつて頂ちようだい戴戴な」

熱があつても、お房はこんなことを願つて、リボンで髪を束ねて貰つた。

頼んで置いた車が来た。先ずお雪が乗つた。娘は、父に抱かれながら門の外へ出て、母の手に渡された。下婢おんなは乳呑児の種夫を連れて、これも車でその後に随したがつた。

「延、叔父さんもこれから行つて見て来るからネ、お前に留守居を頼むよ」

こう三吉は姪に言い置いて、電車で病院の方へ廻ることにした。あわただ慌しそうに彼は家を出て行つた。

留守には、親類の人達、近く郊外に住む友人などが、かわるがわる見舞に来た。「延ちやん、お淋しいでしようねえ」と庭伝いに来て言つて、娘を慰める小学校の女教師もあつた。子供の病が重いと聞いて、お雪は言うに及ばず、三吉まで病院を離れないようになつてからは、二番目の兄の森彦が泊りに来た。森彦は夕方に来て、朝自分の旅舎へ帰つた。

相變らず家の内はシンカンとしていた。道路を隔てて、向側の農家の方で鳴く鶏の声は、午後の空気に響き渡つた。強い、充実した、肥つた体躯に羽織袴を着け、紳士風の帽子をかぶつた人が、門の前に立つた。この人が森彦だ——お延の父だ。その日は、お房が入院してから一週間余に成るので、森彦も病院へ見舞に寄つて、例刻よりは早く自分の娘の方へ來た。

「阿父さん」

とお延は出て迎えた。

郷里を出て長いこと旅舎生活<sup>やどやざまい</sup>をする森彦の身には、こうして娘と一緒に成るのがめずらしくも有つた。傍へ呼んで、病院の方の噂<sup>うわさ</sup>などをする娘の話振を聞いてみた。田舎から来てまだ間も無いお延が、都會の娘のように話せないのも無理はない、などと思つた。

「どうだね、お前の頭脳の具合は——此頃もこの叔父さんが、どうも延は具合が悪い  
ようだから、暫時学校を休ませてみるなんて言つた——そんな勇氣の無いこつちや、ダ  
チカン」

思わず森彦は郷里の方の言葉を出した。そして、旧家の家長らしい威厳を帶びた調子で、  
博愛、忍耐、節儉などの人としての美德であることを語り聞かせた。久しく森彦の傍に居  
なかつたお延は、何となく父を憚るはばかという風で、唯黙つて聞いていた。

「や、菓子をくれるのを忘れた」

と森彦は思付いたように笑つて、袂の内から紙の包を取り出した。やがて、家の内を眺め  
廻しながら、

「どうもこここの家は空氣の流通が好くない。此頃から俺はそう思つていた。それに、こ  
この叔父さんのようにああ煙草たばこをポカポカふか燃したんじや……俺なぞは、毎晩休む時に、旅  
舎の二階を一度明けて、すつかり悪い空氣を追出してから寝る。すこしでも煙草の煙が籠こも  
つていようものなら、もう俺は寝られんよ」

こうお延に話した。彼は娘から小刀を借りて、部屋々々の障子の上の部分をすこしづつ  
切り透すかした。

「延——それじや俺はこれで帰るがねえ」

「あれ、阿父さんは最早御帰りに成るかなし」

「今日は叔父さんも一寸帰つて来るそうだし——そうすれば俺は居なくても済む。丁度好い都合だつた。これからもう一軒寄つて行くところが有る。復た泊りに来ます」

家の方を案じて、三吉は夕方に病院から戻つた。留守中、訪ねて来てくれた人達のこと

を姪から聞取つた。

「只ただいま今」

と三吉は縁側のところへ出て呼んだ。

「オヤ、小泉さん、お帰りで御座いましたか」

庭を隔てて対い合つている裏の家からは、女教師の答える声が聞えた。

女教師は自分の家の格子戸をガタガタ言わせて出た。井戸の側から、竹の垣を廻つて、庭伝いに三吉の居る方へやつて來た。中学へ通う位の子息のある年配で、ハツキリハツキりと丁寧に物なぞも言う人である。

「房子さんは奈何いかがでいらっしゃいますか。先日ちよつと一寸御見舞に伺いました時も、大層御悪いような御様子ようじょでしたが——眞實ほんとに、私は御氣の毒で、房子さんの苦しむところを見て、られませんでしたよ」

こう女教師は庭に立つて、何處か國くに訛なまりのある調子で言つた。その時三吉は、簡単にお房の病氣の経過を話して、到底助かる見込は無いらしいと歎息した。お延も縁側に出て、二人の話に耳を傾けた。

「もし万一のことでも有りそうでしたら、病院から電報を打つ……医者がそう言つてくれるものですから、私もよく頼んで置いて、一寸用達ようたしにやつて参りました」と三吉は附添つけたした。

「まあ、貴方のところでは、どうしてこんなに御子さん達が……必と御越きつに成る方角でも悪かつたんでしょうって、大屋さんの祖母ばあさんがそう申しますんですよ。そんなことも御座いますまいけれど……でも、僅か一年ばかりの間に、皆さんが皆さん——どう考えましても私なぞには解りません」と言つて、女教師は思いやるように、「あのまあ房子さんが、病院中へ響けるような声を御出しなすつて、『母さん——母さん——』と呼んでいらつしやいましたが、母さんの身に成つたらどんなで御座いましょう……そう申して、御噂おうわさを

しておりますんですよ」

「一週間、ああして呼び続けに呼んでいました——最早あの声も弱つて来ました」と三吉は答えた。

女教師が帰つて行く頃は、植木屋の草屋根と暗い松の葉との間を通して、遠く黃に輝く空が映つた。三吉は庭に出た。子供のことを案じながら、あちこちと歩いてみた。

夕飯の後、三吉は姪に向つて、

「延、叔父さんはこの一週間ばかり碌に眠らないんだからネ……今夜は叔父さんを休ませておくれ。お前も、頭脳あたまの具合が悪いようなら、早く御休み」

こう言つて置いて、その晩は早く寝床に就いた。

何時電報が掛つて来るか知れないという心配は、容易に三吉を眠らせなかつた。身体に附いて離れないような病院特別な匂いが、ブーンと彼の鼻の先へ香におつて來た。その匂いは、何時の間にか、彼の心をお房の方へ連れて行つた。電燈ねだいがある。寝台ねだいがある。子供の枕まくら頭もとへは黒い布きれを掛けて、光の刺激を避けるようにしてある。その側には、妻が居る。附添の女が居る。種夫や下婢おんなも居る。白い制服を着た看護婦は病室を出たり入つたりしていり。未だお房は、子供ながらに出せるだけの精力を出して、小さな頭脳あたまの内部なかが破壊こわれる。

すまでは休めないかのよう<sup>や</sup>に叫んでいる——思い疲れているうちに、三吉は深いところへ陥入るよう<sup>や</sup>に眠つた。

翌<sup>あくるひ</sup>日は、午前に三吉が留守居をして、午後からお延が留守居をした。

「叔母さん達のよう<sup>に</sup>に、ああして子供の側に附いていられると可いけれど——叔父さんは、お前、お金の心配もしなけりや成らん」

こんなことを言つて出て行つた三吉は、やがて用達から戻つて来て、復<sup>ま</sup>た部屋に倒れた。何時の間にか、彼は死んだ人<sup>の</sup>よう<sup>に</sup>成つた。

「母さん——」

こういう呼声に気が付いて、三吉が我に返つた頃は、遅かつた。彼は夕飯後、しばらく姪と病院の方の噂をして、その晩も早く寝床に入つたが、自分で何時間ほど眠つたかとい<sup>う</sup>ことは知らなかつた。次の部屋には、姪がよく寝入つてゐる。身体を動かさずにいると、可恐しい子供の呼声が耳の底の方で聞える。「母さん、母さん、母さん——母さんちゃん——ちゃん——ちゃん——ちゃん」宛然<sup>まるで</sup>、気が狂つたような声だ……それは三吉の耳について了つて、何処に居ても頭脳<sup>あたま</sup>へ響けるように聞えた。

夢のよう<sup>に</sup>、門を叩く音がした。

「小泉さん、電報！」

むつぐと三吉は跳起きた。<sup>はねお</sup>表の戸を開けて、受取つて見ると、病院から打つて寄したもので、「ミヤクハゲシ、スグコイ」とある。お延を起す為に、三吉は姪の寝ている方へ行つた。この娘は一度「ハイ」と返事をして、復た寝て了つた。

「オイ、オイ、病院から電報が來たよ」

「あれ、<sup>ほんと</sup>真実かなし」とお延は田舎訛<sup>いながなまり</sup>で言つて、床の上に起直つた。「私は夢でも見えたかと思つた」

「叔父さんは直に仕度をして出掛る。氣の毒だが、お前、車屋まで行つて来ておくれ」と叔父に言われて、お延は眼を擦り擦り出て行つた。

三吉が家の外に出て、車を待つ頃は、まだ電車は有るらしかつた。<sup>いなりまつり</sup>稻荷祭の晩で、新宿の方の空は明るい。遠く犬の吠<sup>ほ</sup>える声も聞える。そのうちに車が来た。三吉は新宿まで乗つて、それから電車で行くことにした。

「延、お前は<sup>ひと</sup>独りで大丈夫かネ」

と三吉は留守を頼んで置いて出掛けた。お延は戸を閉めて入つた。冷い寝床へ潜り込んでからも、種々なことを小さな胸に想像してみた時は、この娘もぶるぶる震えた。叔父が

新宿あたりへ行き着いたかと思われる頃には、ポツポツ板屋根の上へ雨の来る音がした。

復た家の内は寂寥<sup>せきりょう</sup>に返つた。

車が門の前で停つた。正太はそれから飛降りて、閉めてあつた扉<sup>と</sup>を押した。「延ちゃん、皆な帰つて来ましたよ」正太が入口の格子戸を開けて呼んだ。それを聞きつけて、お延は周章<sup>あわ</sup>てて出た。丁度森彦も来合せていて、そこへ顔を顕<sup>あら</sup>わした。

「到頭房もいけなかつたかい」

「ええ、今朝……<sup>あけがた</sup>払曉<sup>ぬけがた</sup>に息を引取つたそうです……皆な、今、そこへ来ます」

森彦と正太とは、こう言合つて、互に顔を見合せた。

間もなく三台の車が停つた。お雪は乳<sup>ちのみ</sup>呑<sup>の</sup>児<sup>こ</sup>を抱いて二週間目で自分の家へ帰つて來た。下婢<sup>おんな</sup>も荷物と一緒に車を降りた。つづいて、三吉が一番年長<sup>うえ</sup>の兄の娘、お俊も、降りた。

三吉の車は一番後に成つた。日の映<sup>あた</sup>つた往来には、お房の遊友達が立留つて、ささやき合つたり、眺めたりしていた。黒い幌<sup>ほろ</sup>を掛けて静かに引いて來た車は、その娘達の見ている前で停つた。

「叔父さん、手伝いましょうか」

と正太が車の側へ寄つた。

お房は茶色の肩掛けに包まれたまま、父の手に抱かれて來た。グタリとした子供の死体を、三吉は車から抱だきおろして、門の内へ運んだ。

仏壇のある中の部屋の隅には、人々が集つて、お房の為に床を用意した。そこへ冷くなつた子供を寝かした。顔は白い布でほかおお掩うた。

「ホウ、こうして見ると、思いの外大きなものだ……どうだネ、膝はひざ曲げて遣らなくとも好かろうか」と森彦が注意した。

「子供のことですから、このままで棺に納まりましょう」と正太を眺めた。

「でも、すこし曲げて置いた方が好いかも知れません」

こう三吉は言つてみて、娘の膝を立てるようにさせた。氷のようなお房の足は最早自由に成らなかつた。それを無理に折曲げた。お俊やお延は、水だの花だのを枕まくらもと頭へ運んだ。丁度、お雪が二番目の妹のお愛も、学校の寄宿舎から訪ねて來た。この娘は姉の傍へ寄つて、一緒に成つて泣いた。

午後には、裏の女教師が勝手口から上つて、子供の死顔を見に來た。

「**ほんと**に、何とも申上げようが御座いません……小泉さんは、まだそれでも男だから宜う御座んすが、こちらの叔母さんが可哀そうです」と女教師は言つた。

お房が病んだ熱は、腸から來たもので無くて、實際は脳膜炎の為であつた。それをお雪は女教師に話し聞かせた。白痴児として生き残るよりは、あるいはこの方が勝かも知れない、と人々は言合つた。

黄色く日中に燃る蠅<sup>とほ</sup>燭<sup>ろうそく</sup>の火を眺めながら、三吉は窓に近い壁のところに倚凭つていた。

「叔父さん、お疲れでしよう」と正太は三吉の前に立つた。

「なにしろ、君、**はな**初の一週間は助けたい助けたいで夜も碌に眠らないでしよう。後の二週間は、子供の側に居るのもこれぎりか、なんと思つて復た起きてる……**しまい**には、半分眠りながら看護をしていましたよ。すこし身体を横にしようものなら、直にもう死んだようになつて了つて……」

「私なども、どうかすると豊世に子供でも有つたら、とそう思うことも有りますが、しかし叔父さんや叔母さんの苦むところを見て、いますと、無い方が好いかとも思いますね」「正太さん、煙草を持ちませんか。有るなら一本くれ給えな」

正太は袂たもとを探つた。三吉は甥がくれた巻煙草に火を点けて、それをウマそうに燻してみた。葬式の準備やら、弔辭くやみを言いに来る人が有るやらで、家の内は混雜ごたごたした。三吉は器械のよう起つたり坐つたりした。

葬式の日は、親類一同、小さな棺の周囲まわりに集つた。三吉が往時書生をしていた家の直樹むかしも來た。この子息は疾むすこに中学を卒業して、最早少壯としかわな会社員であつた。

お俊も來た。

「叔父さん、今日は吾家の阿父うおさんも伺う筈はずなんですが……伺いませんからツて、私が名代ようだいに参りました」とお俊は三吉に向つて、父の実が謹慎中の身の上であることを、それとなく言つた。

その日は、お愛も長い紫の袴はかまを着けて來た。こうして東京に居る近い親類を見渡したところ、実を除いての年長者は、さしあたり森彦だ。森彦は、若い人達の発達に驚くという風で、今では学校の高等科に居るお俊や、優美な服装をしたお愛などに、自分の娘を見比べた。

正太は花を買い集めて來た。眠るようなお房の顔の周囲まわりはその花で飾られた。「お雪、房ちゃんの玩具おもちゃは一緒に入れて遣ろうじゃないか」と三吉が言えば、「そうです、有る

と反つて思出して不可いけないと正太も言つて、毬まりだの巾きん着ちやくだのを棺の隅すみ々すみすみへ入れた。

「余程毛糸が気に入つたものと見えて、眼まなこが見えなく成つても、未だ毛糸のことを言つていました」とお雪は、病院に居る間、子供に買つてくれた物を取出した。

「それも入れて遣れ」

一切が葬られた。やがてお房は二人の妹の墓の方へ送られた。お雪は門の外へ出て、小さな棺の分らなくなるまでも見送つた。「最早お房は居ない」こう思つて、若葉の延びた金目垣かなめがきの側に立つた時は、母らしい涙が流れて來た。お雪は家の内へ入つて、泣いた。

山から持つて來た三吉の仕事は意外な反響を世間に伝えた。彼の家では、急に客が殖えだ。訪ねて來る友達も多かつた。しかし、主人あるじは居るか居ないか分らないほどヒツソリとして、どうかすると表の門まで閉めたままにして置くことも有つた。

三吉は最早、子供なぞはどうでも可いと言うことの出来ない人であつた。多くの困難を排しても進もうとした努力が、どうしてこんな悲哀かなしみの種に成るだろ、と彼の眼が言うに見えた。「彼處あすこに子供が三人居るんだ」——この思想かんがえに導かれて、幾いくたび度か彼の

足は小さな墓の方へ向いた。家から墓地へ通う平坦な道路の両側には、すでに新緑も深かつた。到る処の郊外の日あたりに、彼は自分の心によく似た憂鬱な色を見つけた。しかし彼は、寺の周囲を彷徨つて来るだけで、三つ並んだ小さな墓を見るに堪えなかつた。それを無理にも行こうとすれば、頭脳がカツと逆上せて、急に倒れかかりそうな激しい眩暈を感じた。いつでも寺の前まで行きかけては、途中から引返した。

「父さんは薄情だ。子供の墓へ御参りもしないで……」

とお雪はよくそれを言つた。

寄ると触ると、家では子供の話が出た。何時の間にか三吉の心も、家のものの話の方へ行つた。

お雪は姪をつかまえて、夫の傍で種夫に乳を呑ませながら、

「繁ちゃんの亡くなつた時は、まだ房ちゃんは何事も知りませんでしたよ。でも、菊ちゃんの時には最早よく解つていましたツケ——あの時は皆な一緒に泣きましたもの」

「なアし」とお延も思出したように、「あれを思うと、房ちゃんが眼に見えるようだ」

「眞實に、繁ちゃんの時は皆な夢中でしたよ——私が、『御覧なさいな、繁ちゃんはノノサンに成つたんじや有りませんか』と言えば、房ちゃんと菊ちゃんととも平気な顔して、

『死んじやつたのよ、死んじやつたのよ』と言いながら、棺の周囲を踊つて歩きましたよ。そして、死んだ子供の側へ行つて、噴飯すんですもの』

「まあ」

「しかし、二人とも達者でいる時分には、よく繁ちゃんの御墓へ連れて行つて、桑の実を摘つて遣りましたツけ。繁ちゃんの桑の実だからツて教えて置いたもんですから、行くと繁ちゃん桑の実頂戴ツて断るんですよ。そうしちゃあ、二人で頂くんです……あの御墓の後方にある桑の樹は、背が高いでしょう。だもんですから、母さん摘つて下さいツて言つちゃあ……」

「オイ、何か他の話にしようじやないか」

と三吉が遮つた。子供の話が出ると、必と終には三吉がこう言出した。

「種ちゃん」お延はアやすように呼んだ。

「この子は又、どうしてこんなに弱いんでしょう」とお雪は種夫の顔を熟視りながら言った。

蹂躪ふみにじられるような目付をして、三吉も種夫の方を見た。その時、夫婦は顔を見合せた。

「ひよツとかすると、この児も?」この無言の恐怖が互の胸に伝わつた。三人の娘達を見

た目で弱い種夫を眺めると、十分な発育さえも氣遣われた。

急に日が強く映つて來た。すこし湿つた庭土は、熱い、黄ばんだ色を帶びた。木犀の葉影もハツキリと地にあつた。三吉は帽子を手にして、そこいらを散歩して來ると言つて、出て行つた。

「そう言えば、繁ちゃんの肉体からだは最早腐つて了つたんでしょうねえ」

とお雪は姪に言つて、歎息たんそくした。彼女は乳呑児を抱きながら縁側のところへ出て眺めた。日光は輝いたり、薄れたりするような日であった。お延は庭へ下りた。董すみれの唱歌を歌い出した。それはお房やお菊が未だピンピンしている時分に、二人して家の周囲まわりをよく歌つて歩いたものである。お雪は、死んだ娘の声を探すような眼付して、一緒に低い声で歌つて見た。勝手口の方でも調子を合せる声が起つた。

夕方に三吉はボンヤリ帰つて來た。

「何だか俺は氣ちがでも狂いそうに成つて來た。一寸磯辺いそべまで行つて來る」

こう家のものに話した。その晩、急に彼は旅行を思い立つた。そして、そこのに仕度を始めた。山にある友人の牧野からは休みに來い來いと言つて寄すが、その時は唯一人ただよこた。世間を忘れるようなところへ行きたかつた。翌朝早く、彼は磯辺の温泉宿を指して發つた。

て行つた。

「あれ、叔父さんは最早帰つて御出たそうな」

とお延は入口の庭に立つて言つた。

お雪が生家の方で老祖母の死去したという報知は、旅にある三吉を驚かした。二三日

しか彼は磯辺に逗留しなかつた。電報を受取ると直ぐ急いで家の方へ引返して來た。

「種ちゃん、父さんの御帰りだよ」とお雪も乳児を抱きながら、夫を迎えた。

「よく、こんなに早く帰られましたね、皆な貴方のことを心配しましたよ」

「道理で、森彦さんからも見舞の電報を寄した。どうも変だと思った——俺は又、お前の方を案じていた」

ホッと溜息を吐いて三吉は老祖母の話に移つた。

この老祖母の死は、今更のように名倉の大きな家族のことを思わせた。別に寵を持つた孫娘だけでも二人ある。まだ修業中の孫から、多勢の曾孫を加えたら、余程の人数に成る。お雪ばかりは、その中でも、遠く嫁いで來た方であるが、この葬式は是非とも見送り

たかつた。三吉は又、種夫に下婢おんなを附けて一緒に遣るつもりで帰つて來た。

「さあ、今度はお前が出掛ける番だ」と三吉が言つた。「でも、俺の仕事が済んだ後で好かつた……買う物があつたら買つたら可かろう。何か土産みやげも用意して行かんけりや成るまい」

「土産なんか要りません。一々持つて行つた日にや大変です」

お雪は妹だの、姪だのを数えてみた。

久し振で生家さとへ帰る妻の為にと思つて、三吉は名倉の娘達もとの許へ何か荷物に成らない物を見立てようとした。旅費を用意したり、買物したりして、夫が町から戻つて来る頃は、妻は旅仕度に忙しかつた。

あわただしい中にも、種々なことがお雪の胸の中を往来した。長い年月の間、夫と艱難かんなを共にした後で、彼女は自分の生家を見に行く人である。今まで殆んど出なかつた家を出、遠く夫を離れて、両親や姉妹きよつだいやそれから友達などと一緒に成りに行く人である。光る帆、動搖する波、鷗の鳴声……可憐なつかしいものは故郷の海ばかりでは無かつた。曾て、彼女が心を許した勉つとむ——その人を自分の妹の夫としても見に行く人である。

「叔母さん、御郷里おくにへ御帰り?……御取込のところですネ」

こう言つて、翌朝正太が訪ねて来た頃は、手荷物だの、子供の着物だのが、部屋中ごちやごちや散乱してあつた。

「正太さん、御免なさいまし」とお雪は帯を締めながら挨拶した。

「どれ、子供をここへ連れて来て見ナ」

と三吉に言われて、下婢はそこに寝かしてあつた種夫を抱いて來た。

「余程気をつけて連れて行かないと、不可ぜ」

「よくああして温順しく寝ていたものだ」と正太も言つた。

「まだ、君、毎日浣腸してますよ。そうしなけりや通じが無い……玩具でも宛行つて置こうものなら、半日でも黙つて寝ています。房ちゃん達から見ると、ずつとこの児は弱い」

「これで御郷里の方へでも連れていらしツたら、また壮健に成るかも知れません」

「まあ、一夏も向に居て来るんです」

「眞實に叔母さんも御苦勞様——女の旅は容易じや有りませんネ」

お雪は二人の話を聞きながら、白足袋を穿いた。「私が留守に成つたら、父さんも困るでしようから、お俊ちゃんにでも來ていて頂くつもりです」と彼女は言つた。そのうちに

仕度が出来た。お雪は夫や正太と一緒に旅立の茶を飲んだ。

「種ちゃんにも、一ぱい飲まして」

とお雪は懐ふとこころをひろげて、暗い色の乳首を子供の口へ宛あてが行つた。お延は車宿を指して走つて行つた。

甥おいに留守を頼んで置いて、一寸三吉は新宿の停車場ステーションまで妻子を送りに行つた。帰つて見ると、正太は用事ありげに叔父を待受けていた。

「正太さん、君はまだ朝飯前じやなかつたんですか。僕は言うのを忘れた」

「いえ、早く済まして来ました」

「めずらしいね」

「私のような寝坊ですけれど、めずらしく早く起きました。下宿の膳ぜんに對つて、つくづく今朝は考えました……なにしろ一年の余にも成るのに、未だこうしてブラブラしているんですからね……」

正太は激げつ昂こうするように笑つた。暗い前途にいくらかの明りを見つけたと言出した。そ

の時彼は叔父の思惑を憚るという風であつたが、やや躊躇した後で、自分の行くべき道は兜町の方角より外に無い——尤も、これは再三再四熟考した上のことで、いよいよ相場師として立とうと決心した、と言出した。

何か冒険談でも聞くように、しばらく三吉は正太の話に耳を傾けていたが、やがて甥の顔を眺めて、

「しかし君、——実さんにせよ、森彦さんにせよ、皆な儲けようという人達でしよう。そういう人達が揃つても、容易に儲からない世の中じや有りませんか。兜町へ入つたからツて、必ず儲かるとは限りませんぜ」

「実叔父さん達と、私とは、時代が違います」と正太は力を入れた。

「まあ僕のような門外漢から見ると、商売なり何なりに重きを置いてサ、それから儲けて出るというのが、実際の順序かと思うね。名倉の阿爺を見給え。あの人は事業をした。そして、儲けた。どうも君等のは儲けることばかり先に考えて掛つてるようだ……だから相場なんて方に思想が向いて行くんじや有りませんか」

「そこです。私は相場を事業として行ります。一寸手を出してみて、直ぐまた止めて了うなんて、そんな行き方をする位なら、初から私は関係しません……先ず店員にでも成つて、

それから出発するんです……私は兜町に骨を埋める覚悟です……」

「それほどの決心があるなら、君の思うように行つて見るサ。僕は君、何でも<sup>や</sup>行りたか<sup>や</sup>れという流儀だ」

「そう叔父さんに言つて頂くと、私も難<sup>ありがた</sup>有<sup>い</sup>——森彦叔父さんなぞは何と言<sup>う</sup>か知<sup>ら</sup>ないが……」

森彦の方へ行けば森彦のように考<sup>え</sup>、三吉の許<sup>ところ</sup>へ来れば三吉のように考<sup>え</sup>るのが、正太の癖であつた。丁度、この植木屋の地内に住む女教師の夫<sup>とい</sup>うは、兜町方面に明るい人である。で、正太は話を進めて叔父からその人に口を利いて貰うように、こう頼んだ。

何となく不安な空氣を残して置いて、甥は帰つて行つた。「正太さんも本氣で行<sup>や</sup>る積りかナア」と三吉は言つてみて、とにかく甥のために、頼めるだけのことは頼もうと思つた。その日の午後、三吉は庭伝いに女教師の家の横を廻つて、沢山盆栽鉢<sup>ばち</sup>の置並べてあるところへ出た。植木屋の庭の一部は、やがて女教師の家の庭であつた。子息の中学生は三脚椅子に腰掛けて、何かしきりと写生していた。

女教師の旦那<sup>だんな</sup>とい<sup>う</sup>は、官吏生活もしたことの有るらしい人で、今では兜町に隠れて、手堅くある店を勤めていた。三吉は一ぱい物の散乱<sup>ちらか</sup>してある縁側のところへ行つて、この

阿爺さんとも言いたい年配の人の前に立つた。

「アアそうですか。宜しい。承知しました」と女教師の旦那は、心易い調子で、三吉から種々聞取つた後で言つた。「橋本さんなら、私も御見掛申して知つています。御年齢は何歳位かな?」

「私より三つ年少です」

「むむ、未だ御若い。これから働き盛りというところだ。御気質はどんな方ですか——そこも伺つて置きたい」

「そうですナア。ああして今では浪人していますが、一体華美なことの好きな方です」「それでなくツちや不可——相場師にでも成ろうという者は、人間が派手でなくちや駄目です。では、私の許まで簡単な履歴書をよこして下さい。宜しい。一つ心当たりを問合せてみましょう」

女教師の旦那は引受けてくれた。

甥のことを頼んで置いて、自分の家へ引返してから、三吉は不取敢ず正太へ宛てて書いた。その時は姪のお延と二人ぎりであつた。

「叔母さん達も、最早余程行つたわなアし」とお延は、叔父の傍へ来て、旅の人達の噂

をした。

「こんな機会でもなければ、叔母さんだつて置いて行かれるもんぢやない——今度出掛けたのは、叔母さんの為にも好い」

こう三吉は姪に言い聞かせた。彼は、自分でも、何卒して子を失つた悲しみを忘れたいと思つた。

## 一一

諸方の学校が夏休に成る頃、お俊は叔父の家を指して急いで來た。妹のお鶴も姉に随つて來た。叔父が家の向側には、農家の垣根のところに、高く枝を垂れた百日紅の樹があつた。熱い、紅い、寂しい花は往来の方へ向つて咲いていた。

お俊は妹と一緒に格子戸を開けて入つた。

「あら、お俊姉さま——」

とお延は飛立つように喜んで迎えた。お俊姉妹と聞いて、三吉も奥の方から出て來

た。

「叔父さん。もつと早く御手伝いに伺う筈はずでしたが、つい学校の方がいそがしかつたもんですから——」とお俊が言つた。「延ちゃん一人で、さぞ御困りでしたろう」

「ほんと、鶴ちゃんもよく来て下すつた」とお延は嬉しそうに。

「今日は一緒に連れて参りました、学校が御休だもんですから」

「へえ、鶴ちゃんの方は未だ有るのかい」と三吉が聞いた。

「この娘この学校は御休が短いんです……あの、吾家の阿父おとうさんからも叔父さんに宜しく……」

…

「お俊姉さまが来て下すつたんで、眞実ほんとに私は嬉しい」とお延はそれを繰返し言つた。

長い長い留守居の後で、お俊姉妹は漸く父の実と一緒に成れたのである。この二人の娘は叔父達の力と、母お倉くらの遺やり縁くくりとで、僅かに保護されて來たようなものであつた。三吉がはじめて家を持つ時分は、まだお俊は小学校を卒業したばかりの年頃であつた。それがこうして手伝いなぞに來るように成つた。お俊は幾年振かで叔父の側に一夏を送りに來た。「鶴ちゃん、お裏の方へ行つて見ていらつしやい」とお俊が言つた。

「鶴ちゃんも大きく成つたネ」

「あんなに着物が短く成つちやつて——もうズンズン成長しどなるんですもの」

お鶴はキマリ悪そうにして、笑いながら庭の方へ下りて行つた。

「俊、お前のとこの阿父さんは何してゐるかい」

「まだ何事もしていません……でも、朝なぞは、それは早いんですよ。今まで家のものにサンサン苦勞させたから、今度は乃公が勤めるんだなんて、阿父さんが暗いうちから起きてお釜の下を焚付けて下さるんです……習慣に成つちやつて、どうしても寝ていられないんですツテ……阿母さんが起出す時分には、御味噌汁までちやんと出来てます……」

「それを思うと氣の毒もあるナ」

「阿母さん一人の時分には、家の内だつてそう閑わなかつたんですけど、阿父さんが帰つていらしツたら、何時の間にか綺麗に片付いちまいました——妙なものねえ」

庭の方で笑い叫ぶ声がした。お鶴は滑つて転んだ。お延は駆出して行つた。お俊も笑いながら、妹の着物に附いた泥を落してやりに行つた。

その晩、三吉の家では、めずらしく賑かな唱歌が起つた。娘達は楽しい夏の夜を送る為に集つた。暗い庭の方へ向いた部屋には、叔父が冷しい夜風の吹入るところを選んで、ひとり横に成つていた。叔父は別に燈火も要らないと言うので、三人の姪の居るところだけ明るい。一つにして隅の方に置いた洋燈の光は、お鶴が白い单衣だの、お俊が薄紅い帶だの

に映つた。

「鶴ちゃん、叔父さんに遊戯をしてお見せなさいよ」とお俊がすすめた。

「何にしましよう……」とお鶴は考えて、「もしもし亀よにしましようか」

「浦島が好いわ」

「ふる旧い小泉の家——その頽廃たいはいと零落れいらくとの中から、若草のようになに成長した娘達は、叔父に聞かせようとして一緒に唱歌を歌い出した。お鶴は編み下げる髪のリボンを直して、短い着物の皺しわを延しながら起立たちあがつた。姉や従姉妹が歌う種々な唱歌につれて、この娘は部屋の内を踊つて遊んだ。

三吉は縁側の方から眺めながら、

「ウマい、ウマい——何か、御褒美ごほうびを出さんけりや成るまい」

「鶴ちゃん、もう沢山よ」

と姉に言われても、妹は遊戯に夢中に成つた。一つや二つでは聞入れなかつた。

一晩泊つてお鶴は帰つて行つた。翌日から勝手の方では、若々しい笑声が絶えなかつた。

こんなことをお延が言つて、年長の従姉妹を笑わせた。お俊は釣瓶の水を分けて貰つて復たジヤブジヤブ洗つた。

庭には物を乾す余地が可成広くあつた。やがてお俊は洗濯した着物を長い竿に通して、それを高く揚げた。

うれしい！

思わず彼女は叫んだ。  
お延は立つて眺めていた。

「学校の先生が、夏休みの間に考えていらっしゃいという問題を、ひよいと思出してよ」

こうお俊が話し聞かせて、お延と一緒に勝手口から上つた。二人は意味もなく起つて来る微笑を交換した。互に、濡れた、あらわな手を拭いた。

空は青い海のように光つた。いやというほど照りつけて来た日光は、白い干物に反射し

て、家の内に満ち溢れた。午後から、娘達は思い思いの場所を選んで足を投出したり、柱に倚凭つたりした。三吉は、南の窓に近く、ハンモックを釣つた。そこへ蒸されるような体躯を載せた。熱い地の息と、冷しい風とが妙に混り合つて、窓を通して入つて来る。単調な蝉の歌は何時の間にか彼の耳を疲れさせた。

憂鬱な眼付をして、三吉が昼寝から覚めた時は、虹にでも刺されたらしい疼痛を覚えた。お俊は髪に塗る油を持つて来て、それを叔父に勧めた。

「延ちゃん——まあ、来て御覧なさいよ」とお俊が笑いながら呼んだ。「三吉叔父さんはこんなに白髪が生えてよ」

お延は勝手の方から手を振つてやつて來た。

「オイ、オイ」と三吉は自分の子供にでも戯れるように言つた。「そうお前達のように馬鹿にしちや困るぜ……これでも叔父さんは金鷄勲章の積りだ」

「あんな負惜みを言つて」とお延は訳も無しに笑つた。

「ねえ、延ちゃん、有れば仕方が無いわ」と言つて、お俊は叔父の傍へ寄つて、「叔父さん、ジツとしていらツしやい——抜いて進げましょうね。前の方はそんなでも無いけれど、ひん鬚のところなどは、一ぱい……こりや大変だ……容易に取尽せやしないわ」

お俊は叔父の髪に触れて、一本々々<sup>え</sup>択り分けた。凋<sup>ちょう</sup>落<sup>らく</sup>を思わせるような、白い、光つたやつが、どうかすると黒い毛と一緒に成つて抜けて来た。

「叔父さん、どうしてこんなに髪がこわれるんでしょう」

勝手の方から来たお俊は、叔父の傍へ寄つて、親しげな調子で言つた。この姪は三吉を頼りにするという風で、子が親に言うようなことまで話して聞かせようとした。

「どうして夏はこんなに——」

と復たお俊は言つて、うしろむきに身を斜にして見せた。彼女は、乾きくずれた束髪の根を掴んで、それを叔父に動かして見せたりなぞした。

庭の洗濯物も乾いた。二人の姪は屋外<sup>そと</sup>に出て着物や襦袢<sup>じゆばん</sup>を取込みながら、互に唱歌を歌つた。この半分夢中で合唱しているような、何となく生氣のある、浮々とした声は、叔父の心を誘つた。三吉は縁側のところに立つて、乾いた着物を畳んでいる娘達の無心な動作を眺めた。そして、お雪や正太の細君などに比べると、もつとずつと嫩<sup>わか</sup>い芽<sup>め</sup>が、最早彼の周囲<sup>まわり</sup>に頭を持ち上げて来たことを、めずらしく思つた。

蘇<sup>いきかえ</sup>生<sup>さと</sup>るような空気が軒へ通つて來た。夕方から三吉は姪を集めて、遠く生家の方に居るお雪の噂<sup>うわさ</sup>を始めた。表の方の農家でも往来へ涼<sup>すずみだい</sup>台<sup>だい</sup>を持出して、夏の夜風を楽しむらしかつた。ジャン<sup>けん</sup>拳<sup>こぶ</sup>で負けて冰を買いに行つたお延は、やがて戻つて來た。お俊はコップだの、砂糖の壺<sup>つぼ</sup>だのを運んだ。

「皆なに御馳走<sup>ごちそう</sup>するかナ」

と三吉は、赤い葡萄酒<sup>ぶどうしゅ</sup>の残りを搜<sup>さが</sup>出して、それを碎いた氷にそそいだ。

お俊の娘らしい話は、手紙のことに移つて行つた。切手を故意に倒<sup>さかさ</sup>たまに貼<sup>は</sup>るのは敵意をあらわすとか、すこし横に貼るのは恋を意味するとか、そんなことを言出す。敵意のあるものなら、手紙を<sup>やりとり</sup>遺<sup>な</sup>取<sup>う</sup>するのも少し変ではないか、こう叔父<sup>おじ</sup>が混<sup>まぜかえ</sup>返したのが始まりで、お俊は負けずに言い争つた。

「叔父さんなんか、そういうことはよく知つていらッしやるくせに」

と軽く笑つて、それからお俊は彼女が学校生活を叔父に語り始めた。三吉は時々、手にしたコップを夜の燈火<sup>あかり</sup>に透かして見ながら、「そとかナア」という眼付をして、耳を傾けていた。

「私は涅槃<sup>ねはん</sup>という言葉が大好よ」とお俊は冷<sup>か</sup>そうに氷を噛<sup>か</sup>んで言つた。

「あら、いやだ」とお延はコップの中を搔廻<sup>かきまわ</sup>して、「それじや、お俊姉さまのことを、これから涅槃<sup>おん</sup>と……」

「涅槃<sup>おん</sup>ツて、何だか音<sup>おん</sup>からして好いわ」

こんなことからお俊の話は解けて、よく学校の裏手にある墓地へ遊びに行くことを言出した。そこの古い石に腰掛け、落葉の焼けるにおいを嗅<sup>か</sup>ぎながら、読書するのが彼女の楽しみであると言出した。

「学校の先生<sup>が</sup>——小泉さん、貴<sup>あなた</sup>方は誰にも悪<sup>にく</sup>まれないが、そのかわり人に愛される性質<sup>たち</sup>で反<sup>かえ</sup>つて不可<sup>いけない</sup>——貴方は余程シツカリしていないとけません、その為に苦労<sup>たち</sup>することが有るからツて……」

こう言いかけて、お俊は癖のよう着物の襟<sup>えり</sup>を搔合<sup>か</sup>せて、

「叔父さんやなんかのことは、自分の身に近い人ですから解りませんがネ……私の知つてる人で、一人も心から敬服するという人は無いのよ。あの人はエライ人だとか、何だとか言われる人でも、私は直にその人の裏面<sup>うら</sup>を見ちやつてよ——妙に、私には解るの——解るようになつて来るの」

お延は叔父と従姉妹の顔を見比べた。

「私は二十五に成つたら、叔父さんに自分の通<sup>とおりこ</sup>過して來たことを話しましよう。よく小説にいろいろなことが書いてあるけれど、自分の一生を考えると、あんなことは何でも無いわ。私の遭遇<sup>であ</sup>つて來たことは、小説よりも、もつともつと種<sup>いろいろ</sup>々なことが有る」「そんなら、今ここで承りましよう」と三吉は半分<sup>じょう</sup>串<sup>だん</sup>談<sup>だん</sup>のよう<sup>に</sup>。

「いいえ」

「二十五に成つて話すも、今話すも、同じことじやないか」

「もつと心が動かないように成つたら、その時は話します……今はまだ、心が動いてて黙目よ」

しばらくお俊の話は途切れた。暗い、静かな往来の方では、農家の<sup>うちわ</sup>人達が团扇<sup>うちわ</sup>をバタバタ言わせる音がした。

「しかし、叔父さんが私を御覧なすつたら、さぞ馬鹿なことを言つてると御思いなさるでしょうねえ」

「どういたして

「必<sup>きつ</sup>とそうよ」

「しかし」と三吉は姪の方を眺めながら、「お前がそんなオシャベリをする人だとは、今

まで思わなかつた——今夜、初めて知つた

「私はオシャベリよ——ねえ、延ちゃん」と言つて、お俊はすこし羞じらつた顔を袖で掩うた。

両国りょうごくの花火のあるという前の日は、森彦からも葉書が来て、お俊やお延は川かわびらきに行くことを楽しみに暮した。

翌日の新聞は、隅田川すみだがわの満潮と、川開の延期とを伝えた。水嵩みずかさが増して危いという記事は、折角せつかくまちもく翘望けた娘達をガツカリさせた。そうでなくとも、朝から冷しい夏の雨が降つて、出掛けられそうな空模様には見えなかつた。

「延は?」と三吉がお俊に聞いた。

「裏の叔母さんとのことでしよう」

女教師の通う小学校も休に成つてからは、「叔母さん、叔母さん」と言つて、毎日のようにお延は遊びに行つた。

庭の草木も濡れて復活いきかえつた。毎日々々の暑さあつさで、柔軟かよわい鳳仙花ほうせんかなどは竹の垣のもとに

長い葉を垂れて、紅く咲いた花も死んだように成っていたが、これも雨が来て力を得た。三吉は縁側に出て、ションボリと立っていた。

「叔父さん——何故私が墓場が好きですか、それを御話しましようか」

こうお俊が言出した。三吉は部屋へ戻つて、心地の好い雨を眺めながら、姪の話を聞いた。

お俊の言おうとすることは、彼女の若い、悲しい生涯を思わせるようなものであつた。十六の年に親しい友に死別れて、それから墓畔ぼはんのさまよいを樂むように成つたことや、ある時はこの世をあまり浅猿あさましく思つて、死ということまで考えたが、母と妹のある為に思い直したこと、自分は苦勞というものに逢いにこの世へ生れて來たのであろう、というようなことなどが、この娘の口からきれぎれに出て來た。

「私は、どんなことがあつても、自分の性質だけは曲げたくないと思ひますわ……でも、ヒネクレしまて了やしないか、とそればかり心配しているんですけれど……」

と言つて、ややしばらく沈思した後で、

「しかし、私が今まで遭遇つて來たことの中で、唯一つだけ叔父さんに話しましようか」

お俊は、附添して、母より外にこの事件を知るものがないと言つた。その口振で、三吉には、親戚の間に隠れた男の関係ということだけ読めた。誰がこの娘に言い寄るうとしたか、そんな心当りは少しも無かつた。

「大抵叔父さんには解りましたろうネ」

「解らない」三吉は首を振つた。「何か又、お前が誤解したんだろう——雲を烟と間違えたんじゃないか」

お俊の眼からは涙が流れて來た。彼女は手で顔を掩うて、自分の生涯を思い出しては半ば啜泣くという風であつた。一寸縁側へ出て見て、復た叔父の方へ來た。

「叔父さんは……正太兄さんをどういう人だとお思いなすつて……兄さんは叔父さんが信じていらツしやるような人でしようか」

三吉は姪の顔を熟視つた。「——お前の言うのは正太さんのことかい」

「私が二十五に成つたら、叔父さんに御話しましようつて言いましたろう。それよ。その一つよ。豊世姉さんがこんな話を御聞きなすつたら、どんな顔を成さるでしよう……可厭だ、可厭だ……私は一生かかつて憎んでも足りない……」

「ああ、なんだか変な気分に成つて來た。何だつて、そんな可厭な話をするんだ」

「だつて、叔父さんが鑿つて聞くんですもの」

三吉は「そうかナア」という眼付をして、黙つて了つた。

「ね、もつと他の好い話をしましよう」

とお俊は微笑んで見せて、窓のある部屋の方へ立つて行つた。そこから手紙を持つて來た。

「多分叔父さんはこの手紙を書いた人を御存じでしよう」

姪が出して來て見せたものは、手紙と言つても、純白な紙の片にペンで細く書いた僅かな奥床しい文句であつた。「君のように香の高い人に遭遇つたことは無い、これから君のことを白い百合の花と言おう」唯それだけの意味が認めてある。サッパリしたものだ。別に名前も書いて無いが、直樹の手だ。

「今まで兄さんでしたから、だから眞実の兄さんになつて頂いたの——それでおしまい」とお俊は言葉を添えた。

この「それでおしまい」が三吉を笑わせた。

正太でも、直樹でも娘達は同じように「兄さん」と呼んでいた。一方は従兄弟。一方は三吉が恩人の子息<sup>むすこ</sup>というだけで、親戚同様にしていたが、血統<sup>ちすじ</sup>の関係は無かつた。区別す

る為に正太兄さんとか、直樹兄さんとか言つた。三吉も、その時に成つて、いろいろ知らなかつたことを知つた。

### 三

実——お俊の父は、三吉とお雪とが夫婦に成つてから、始めて弟の家に来て見た。<sup>ふるい</sup>旧い小泉を相続したこの一番年長<sup>うえ</sup>の兄が、暗い悲酸な月日を送つたのも、久しいものだ。彼が境涯の変り果てたことは、同じ地方の親しい「旦那衆<sup>だんなしゆう</sup>」を見ても知れる。一緒に種々な事業を經營した直樹の父は、彼の留守中に亡くなつた。意氣相投じた達雄は、最早拓落<sup>たくらく</sup>しつろの人と成つた。

とは言え、留守中彼の妻子が心配したほど、実は衰えて見えなかつた。彼は兄弟中で一番背の高い人で、体格の強壯なことは父の忠寛に似ていた。小泉の家に伝つて、遠い祖先の慾望を見せるような、特色のある大きな鼻の形は、彼の容貌<sup>おもぼせ</sup>にもよく表れていた。顔の色なぞはまだ艶々<sup>つやつや</sup>としていた。

この兄が三吉の部屋へ通つた。丁度、娘達は家に居なかつた。三吉は長火鉢<sup>ながひばち</sup>の置いて

あるところへ行つて、自分で茶を入れた。それを見の前へ持つて来た。

一生の身の蹉跎<sup>つまづき</sup>から、実は弟達に逢うことを遠慮するような人である。未だ森彦には一度も逢わずにいる。三吉に逢うのは漸く<sup>ようや</sup>一度目である。

「俊は?」と実が自分の娘のことを聞いた。

「一寸新宿まで——延と二人で買物に行きました」

「御留守居がウマク出来るかナ」

「ええ、よく遣<sup>や</sup>つてくれます。今日は二人に、浴衣<sup>ゆかた</sup>を一枚ズツ奢つてやることにしました」

「それは 大<sup>おお</sup>悦<sup>よろこ</sup>びだろう。お前のどこでも、子が幾人<sup>いくたり</sup>も死んで、随分不幸つづきだつたナ。しかし世の中のことは、何でも深く考えては不可<sup>いけない</sup>。淡泊に限る。乃公<sup>おれ</sup>はその主義サ——家内のことでも——子供のことでも——自分のことでも」

こんな調子で、あだかも繁華な街衢<sup>ちまた</sup>を歩く人が、右に往き、左に往きして、他<sup>ひと</sup>を避けようとするように、実はなるべく弟に触るまい触るまいとしていた。彼は弟の手を執つて過去の辛酸を語ろうともしなければ、留守中<sup>どれほど</sup>何<sup>か</sup>程の迷惑を掛けたろうと、深くその事を詫<sup>わ</sup>びるでもなかつた。唯、旧家の家長が目下の者に対するような風で、冷<sup>ひやめし</sup>飯の三吉と向い合つていた。

金の話は余計に兄の矜持ほこりきずつを傷けた。病身な宗蔵——三吉などが「宗さん、宗さん」と言つてゐる兄——この人は今だに他所よそへ預けられていて、実が世話すべき家族の一人ではあるが、その方へも三吉には金を出させていた。種々余分な工面もさせた上に、復た兄は金策を命じに來た。

「実はNさんのところから、四十円ばかり借りた。いづれ三吉の方で返しますから、と言つて、時に借りて來た。これは是非お前に造つて貰わにや成らん」

当惑顔な弟が何か言おうとしたのを実は遮さしきつた。彼は細く書いた物を取出した。これだけの家具を四十円で引取ると思つてくれ、と言出した。それには、筆筒たんす、膳ぜん、敷物、巻煙草入、その他徳利、盃洗はいせんなどとしてあつた。

「頼む」

と兄は無理にも承諾させて、そこの間に弟の家を出た。

「留守中は御苦勞あいさつだつたとが、何とか……それでも一言ぐらい挨拶あいさつが有りそうなものだナア」

こう三吉は、ひとりごとのように言つて、嘆息した。尤も、兄が言えないことは、三吉も承知していた。

お俊はお延と一緒に、風呂敷包を小脇に擁えながら帰った。包の中には、ある呉服屋から求めて来た反物たんものが有つた。

「叔父さんに買つて頂いたのを、お目に懸けましよう」

と娘達は言い合つて、流行の浴衣地ゆかたじを叔父の前に置いた。目うつりのする中から、思いに見立てて来た涼しそうな中形ちゅうがたを、叔父に褒めて貰う積りであつた。

「何だつて、こんな華美はいでなものを買つて来るんだね」

と叔父は気に入らなかつた。

「豊世姉さんだつて随分華美なものを着るわねえ」

こうお俊が従姉妹いいとこに言つた。三吉はそれを聞いて、何故なぜ小泉の家が今日のようになぜ貧乏ははになつたろうとか、何故娘達がそれを思はないだろうとか、何故旧い足袋たびを穿いていても流行はを競うような量見に成るだろはうとか、種々なヤカマしいことを言出した。

「でも、こういうもので無ければ、私に似合わないんですもの」とお俊は萎しおれた。

やがて三吉は機嫌きげんを直して、お俊の父が金策の為に訪ねて来たことを話し聞かせた。その時お俊は自分の家の方の疇うわさをした。丁度彼女が帰つて行つた日は、公売処分の当日であつたこと、ある知人しりびとに頼んで必要な家具は買戻して貰つたこと——執達吏——高利貸——古道具屋——その他生活のみじめさを思わせるような言葉がこの娘の口から出た。

三吉は家の内をあちこちと歩いた。最後の波に洗われて行く小泉の家が彼の眼に浮んだ。破産又た破産。幾度も同じ事を繰返して、その度に実の集めた道具は言うに及ばず、母が丹精たんせいして田舎いなかで織つた形見の衣類まで、次第に人手に渡つて了つた。実の家では、長い差押さしおさえの仕末をつけた上で、もつと屋賃の安いところへ引移る都合である。

話が両親のことになると、お俊は眼の縁を紅あかくした。彼女は涙なしに語れなかつた。

「——母親おつかさんには、どうしても詫びることが出来ない。『母親さん、御免なさいよ』と口にはあつても……首は下げる……どうしても言葉には出て来ない」

こんなことまで叔父に打開けて、済まないとは思いつつ、耳を塞ふさいで、試験の仕度したくしたことなどを語つた。話せば話すほど、お俊は涙が流れて來た。そして、娘らしい、涙に濡れた眼で、数奇すうきな運命を訴えるように、叔父の顔を見た。

その晩、遅くなつて、お俊はひとりで屋外そとへ出て行つた。

「叔父さん、お俊姉さまは？」お延が聞いた。

「葉書でも出しに行つたんだろう」

と三吉が答えていると、お俊は布拉リと戻つて来て、表の戸を閉めて入つた。

「お俊姉さまは屋外そとで泣いてた」

「あら、泣きやしないわ」

「叔父さんは？」

「今まで縁側に腰掛けていらしつてよ」

こう娘達は言い合つて、洋燈ランプのもとで針仕事をひろげていた。あく翌る晩のことである。

お俊はお延の着物を縫つていた。お延は又、時々従姉妹の方を眺めて、自分の着物がいくらかずつ形を成して行くことを嬉しそうにしていた。来る花火の晩には、この新しい浴衣を着て、涼しい大川の方へ行つて遊ぼう、その時は一緒に森彦の旅舎やどやへ寄ろう、それから直樹の家を訪ねよう——それからそれへと娘達は楽しみにして話した。

曇つた空ながら、月の光は地に満ちていた。三吉は養鶏所の横手から、雑木林の間を通

つて、ずっと岡の下の方まで、歩きに行つて來た。明るいようで暗い樹木の影は、郊外の道路にもあつた。植木屋の庭にもあつた。自分の家の縁側の外にもあつた。帰つて来て、復た眺めていると、姪達はそろそろ寝る仕度を始めた。

「叔父さん、お先へお休み」

と言いに来て、二人とも蚊帳の内へ入つた。叔父は独りで起きていた。

楽しい夜の空氣はすべての物を包んだ。何もかも沈まり返つていた。樹木ですら葉を垂れて眠るように見えた。妙に、彼は眠られなかつた。一旦蚊帳の内へ入つて見たが、復た這出した。夜中過と思われる頃まで、一枚ばかり開けた戸に倚凭つていた。

短い夏の夜が明けると、最早立秋という日が來た。生家に居るお雪からは手紙で、酷しい暑さの見舞を書いて寄した。別に二人の姪へ宛てて、留守中のことはくれぐれも宜しく頼む、と認めてあつた。

その日、お俊はすこし心地が悪いと言つて、風通しの好い処へ横に成つた。物も敷かずに枕をして、心臓のあたりを氷で冷した。お延は、これも鉢巻で、頭痛を苦にしていた。

三吉は子供でも可傷るよう、

「叔父さんは、病人が有ると心配で仕様が無い」

「御免なさいよ」

とお俊は半ば身を起して、詫びるように言つた。

死んだ子供の墓の方へは、未だ三吉は行く氣に成らないような心の状態にあつた。時々彼は空な懷をひろげて、この世に居ない自分の娘を捜した……彼の虚しい手の中には、何物も抱締めてみるようなものが無かつた……朝に晩に傍へ来る娘達が、もし自分の眞実の子供でもあつたら……この考えはすこし彼を呆れさせた。死んだお房のかわりに抱くとしては、お俊なぞは大き過ぎたからである。

近所の人達は屋外へ出た。互に家の周囲へ水を撒いた。叔父が跣足で庭へ下りた頃は、お俊も気分が好く成つたと言つて、台所の方へ行つて働いた。夕飯過に、三吉は町から大きな水瓜を買って戻つて来た。思いの外お俊も元気なので、叔父は安心して、勉めてくれる娘達を慰めようとした。燈火を遠くした縁側のところには、お俊やお延が団扇を持つて来て、叔父と一緒に水瓜を食いながら、涼んだ。

女教師の家へも水瓜を分けて持つて行つたお延は、やがて庭伝いに帰つて來た。

「裏の叔父さんがなし、面白いことを言つたデ——『ああ、ああ、峯公（女教師の子息）

も独りで富士登山が出来るようになつたか、して見ると私が年の寄るのも……』どうだとか、こうだとか——笑つて了つたに』

お延の無邪気な調子を聞くと、お俊は笑つた。

何時の間にか、月の光が、庭先まで射し込んで來ていた。お延は早く休みたいと言つて、独りで蚊帳の内へ入つた。夜の景色が好きそうなので、三吉は前の晩と同じように歩きに出た。お俊も叔父に随つて行つた。

朝の膳の用意が出来た。お延は台所から熱いうつしたての飯櫃を運んだ。お俊は自分の手で塩漬にした茄子を切つて、それを各自の小皿につけて持つて來た。

三吉は直ぐ箸を執らなかつた。例になく、彼は自分で自分を責めるようなことを言出した。「實に、自分は馬鹿らしい性質だ」とか、何だとか、種々なことを言つた。

「これから叔父さんも、もつとどうかいう人間に成ります」

こう三吉はすこし改まつた調子で言つて、二人の姪の前に頭を下げた。

お俊やお延は笑つた。そして、叔父の方へ向いて、意味もなく御辞儀をした。

漸く三吉は箸を執り上げた。ウマそうな味噌汁の香を嗅いだ。その朝は、よく可笑しな顔付をして姪達を笑わせる平素の叔父とは別の人のように成った。死んだ子供等のことを思えば、こうして飯を食うのも難有いことの——実の家族が今日あるは、主に森彦の力である、お俊なぞはそれを忘れては成らないことの——朝飯の済んだ後に成つても、まだ叔父は娘達に説き聞かせた。

こういう尤もつとらしいことを言つている中にも、三吉が狼狽てた容子は隠せなかつた。彼は窓の方へ行つて、往来に遊んでいる子供等の友達、餌を撒き歩く農家の鶏などを眺めながら、前の晩のことを思つてみた。草木も青白く煙るような夜であつた。お俊を連れて、養鶏所の横手から彼の好きな雑木林の道へ出た。月光を浴びながら、それを楽んで歩いていると、何處で鳴くともなく幽かな虫の歌が聞えた。その道は、お房やお菊が生きている時分に、よく隨いて来て、一緒に花を摘みとつたり、手を引いたりして歩いたところである。不思議な力は、不図、姪の手を執らせた。それを彼はどうすることも出来なかつた。「こんな風にして歩いちや可笑しいだろうか」と彼が串談のようになつて言つた。お俊は何處までも頼りにするという風で、「叔父さんのことですもの」と平素の調子で答えた。この「こんな風にして歩いちや可笑しいだろうか」が、彼を呆れさせた。

「馬鹿！」

三吉は窓のところに立つて、自分を嘲つた。

お俊やお延は中の部屋に机を持出した。「お雪叔母さん」のところへ手紙を書くと言つて、互に紙をひろげた。別に、お俊は男や女の友達へ宛てて送るつもりで、自分で画いた絵葉書を取出した。それをお延に見せた。

お延はその絵葉書を机の上に並べて見て、

「お俊姉さま、私にも一枚画いておくんなんしょや」

と従姉妹の技術を羨むように言った。

お俊に絵画を学ぶことを勧めたのは、もと三吉の発議であつた。彼女の母親は、貧しい中にも娘の行末を楽しみにして、画の先生へ通うことやを廃めさせなかつた。幾年か彼女は花鳥の模倣を習つた。三吉の家に来てから、叔父は種々な絵画の話をして聞かせて、直接に自然に見ることを教えようとした。次第に叔父はそういう話をしなく成つた。

庭の垣根のところには、鳳仙花が長く咲いていた。やがてお俊はそれを折取つて來た。萎れた花の形は、美しい模様のよう葉書の裏へ写された。その色彩がお延の眼を喜ばせた。

「叔父さん、見ちや厭よ」

とお俊は、傍へ來た叔父の方を見て、自分の画いた絵葉書を両手で掩うた。

学校の友達の噂から、復たお俊の話は引出されて行つた。彼女は日頃崇拜する教師のことをお俊に話した。学校の先生に言わせると、この世には十の理想がある、それを合せると一つの大きな理想に成る——七つまでは彼女も考えたが、後の三つはどうしても未だ思ひ付かない、この夏休はそれで頭脳を悩している。こんなことを言出した。お俊は附添して、丁度先生は「吾家の祖父さん」のような人だと言つた。先生と忠寛とは大分違うようだ、と三吉が相手に成つたのが始まりで、お俊は負けずに言い争つた。

「へえ、お前達はそんな夢見てるのかい」

と叔父は言おうとしたが、それを口には出さなかつた。彼は幅の広い肩を動つて、黙つて自分の部屋の方へ行つて了つた。

夜が來た。

屋外は昼間のように明るい。燐の光に誘われて、復た三吉は雑木林の方まで歩き

に行きたく成った。お俊は叔父に連れられて行つた。

やがて、三吉達が散歩から戻つて來た頃は、最早遅かつた。表の農家では戸を閉めて了つた。往来には、大きな犬が幾つも寝そべつて頭を持上げたり、耳を立てたりしていた。中には月あかりの中を馳出して行くものもあつた。三吉は姪を庇護うようにして、その側を盗むように通つた。表の門から入つて、金目垣かなめがきと窓との狭い間を庭の方へ抜けると、裏の女教師の家でも寝た。三吉の方へ向いた暗い窓は、眼のように閉じられていた。

深い静かな晩だ。射し入る月の光は、縁側のところへ腰掛けた三吉の膝ひざを照らした。お俊は、従姉妹の側へ寝に行つたが、眼が冴えて了つて眠られないと言つて、白い寝衣のままで復た叔父の側へ來た。

急に犬の群が竹の垣を潜くぐつて、庭の中へ突進して來た。互に囁合かみあつたり、尻尾しつぽを振つたりして、植木の周囲まわりを馳かけけずり廻つて戯れた。ふと、往来の方で仲間の吠ほえる声が起つた。それを聞いて、一匹の犬が馳出して行つた。他の犬も後を追つて、復た一緒に馳出して行つた。互に鳴き合う声が夜更よふけた空に聞えた。

「眞實に——寝て了うのは可惜いような晩ねえ」

と言つて、考え沈んだ姪の側には、叔父が腰掛けて、犬の鳴声を聞いていた。叔父は犬

のよう震えた。

「まだ叔父さんは起きていらしツて？」とそのうちにお俊が尋ねた。

「アア叔父さんに<sup>かま</sup>関わらずサツサと休んどくれ」

と言われて、お俊は従姉妹の方へ行つた。三吉は独りで自分の身体の戦慄<sup>ふるえ</sup>を見ていた。  
翌朝<sup>よくあさ</sup>になると、復た三吉は同じようなことを二人の姪の前で言つた。「叔父さんも心  
を入替えます」とか、「俺もこんな人間では無かつた積りだ」とか、言つた。  
「どうしたと言うんだ——一体、俺はどうしたと言うんだ」

と彼は自分で自分に言つて見て、前の晩もお俊と一緒に歩いたことを悔いた。

容易に三吉が精神の動搖は静まらなかつた。彼は井戸端へ出て、冷い水の中へ手足を突<sup>き</sup>つ  
浸したり、乾いた髪を湿したりして來た。

「オイ、叔父さんの背中を打つて見ておくれ」

こう言つたので、娘達は笑いながら叔父の背後<sup>うしろ</sup>へ廻つた。

「どんなに強くても宜う御座んすか」とお俊が聞いた。

「いいとも。お前達の力なら……背中の骨が折れても関わない」「後で怒られても困る」とお延は笑つた。

叔父は娘達に吩咐けて、「もうすこし上」とか、「もうすこし下」とか言いながら、骨を噛まれるような身体の底の痛みを打たせた。

日延に成つた両国の川開があると、いう日に当つた。お俊やお延は、森彦の旅舎へも寄ると言つて、午後の三時頃から出掛る仕度をした。そこへお俊の母お倉が訪ねて來た。お倉は、夫が頼んで置いた金を受取りに來たのであつた。

「母親さん、御免なさいよ——着物を着ちますから」

とお俊は母に挨拶した。お延も従姉妹の側で新しい浴衣に着更えた。

お倉は三吉の前に坐つて、娘の方を眺めながら、

「三吉叔父さんに好いのを買つて頃いたネ。叔母さんの御留守居がよく出来るかしらん、そう言つて毎日家で噂をしてる……学校の御休の間に、叔父さんの側に居て、種々教え頂くが好い……」

三吉は嫂と姪の顔を見比べた。

「眞實に、御役にも立ちますまい。黙つて見ていいで、ズンズン世話を焼いて下さい」

「母親さん、鶴ちゃんはどうしていて?」とお俊が立つて身仕度をしながら尋ねた。

「アア、鶴ちゃんも毎日勉強してゐる」

こうお倉は答えながら、娘の方へ行つて、帯を締る手伝いをしたり、台所の方まで見廻りに行つたりした。

「叔父さん、リボンを見ておくんなんしょ」とお延が三吉の傍へ來た。

「私のも、似合いまして?」とお俊も来て、うしろむきに身を斜にして見せた。

三吉は約束の金を嫂の前に置いた。お倉はそれを受取つて、帯の間へ仕舞いながら、宗蔵の世話料をも頼むということや、正太がちよいちよい遊ぶということや、それから自分の夫が今度こそは好く行つて貰わなければ成らないということなどを話し込んだ。

娘達は最早花火の音が聞えるという眼付をした。そこまでお倉を送つて行こう、と催促した。

「母親さんは煙草を忘れて來た。一寸叔父さんに一服頂いて」

お倉は弟が出した巻煙草に火を点けて、橋本の姉もどうしているかとか、大番頭の嘉助も死んだそうだとか、豊世を早く呼寄せるようにしなければ、正太のためにも成らないとか、それからそれへと話した。

「母親さん、早く行きましょよ」とお俊はジレッタそうに。

「アア、今行く」と言つて、お倉は弟の方を見て、「今度という今度は、それでも吾夫やど

懲りましたよ。私がツケツケ言うもんですからね、『お前はイケナイ奴に成った、今まで  
はもっと優しい奴だと思つていた』なんて、吾夫がそう言つて笑うんですよ……でも、貴  
方、今までのような大きな量見でいられると、失敗するのは眼に見えてます。どの位私  
達が苦労をしたか分りませんからね——眞實に、三吉さんなぞは堅くて好い』

三吉は額へ手を当てた。

間もなくお倉は、種々と娘の世話を焼きながら、連立つて出て行つた。

両国橋辺の混雜を思わせるような夕方が来た。三吉は燈火も点けずに、薄暗い部屋の内  
に震えながら坐つていた。何となく可恐しいところへ引摺込まれて行くような、自分の  
位置を考えた。今のうちに踏留まらなければ成らない、と思つた。しばらく忘れていた  
妻のことも彼の胸に浮んだ。次第に家の内は暗く成つた。遠く花火の上る音がした。

「残暑きびしく候ところ、御地皆々さまには御機嫌よく御暮し遊ばされ候由、目出度ぞん  
じあげまいらせ候。ばば死去の節は、早速雪子御遣わし下され、ありがたく存じ候。御蔭  
さまにて法事も無事に相済み、その節は多勢の客などいたし申し候。それもこれも亡き親

の御蔭と存じまいらせ候。さて雪子あまり長く引留め申し、おんもとさま許様には何角御不自由のことと御察し申しあげ候。俊子様、延子様にも御苦勞相掛け、まことに御氣の毒とは存じ候えども、何分にも斯こののお暑さ、それに種夫さん同道とありては帰りの旅も案じられ候につき、今すこしく冷すずしく相成り候まで当地に逗とうりゆう留りゆういたさせたく、私より御願い申上げまいるせ。何卒々々悪しからず御思おぼしめしくだ召めし下くだされたく候——

三吉が名倉の母から手紙を受取った頃は、何となく空氣も湿つて秋めいて來た。お俊は叔父の側へ来て、余計に忸なれなれ々しく言葉を掛けた。

「叔父さん、今何事も用が有りませんが、肩が凝るなら、按摩あんまさんでもして進あげましょうか」

「沢山」

「すこし白髮しらがを取つて進あげましょうネ」

「沢山」

「叔父さんは今日はどうかなすつて?」

「どうもしない——叔父さんを関わらずに置いておくれ——お前達はお前達の為することを為しておくれ——」

例<sup>い</sup>になく厭<sup>い</sup>い避<sup>け</sup>るような調子で言つて、叔父が机に對<sup>むか</sup>つていたので、お俊はまた何か機嫌を損<sup>そ</sup>ねたかと思つた。手持不沙汰<sup>てもちぶさた</sup>に、勝手の方へ引返して行つた。

「お俊姉様——兄様が御出たぞなし」

とお延が呼んだ。

直樹が來た。相變らず温厚で、勤勉なのは、この少壯<sup>としわか</sup>な会社員だ。シツカリとした老<sup>お</sup>祖母<sup>ばあさん</sup>が附いているだけに、親譲りの夏羽織などをして、一寸訪ねて来るにも服装<sup>みなり</sup>を崩さなかつた。三吉のことを「兄さん、兄さん」と呼んでいるこの青年は年寄にも子供にも好かれた。

叔父は娘達を直樹と遊ばせようとしていた。こうして郊外に住む三吉は、自分で直樹の相手に成つて、この弟のように思う青年の口から、下町の変遷を聞こうと思うばかりでは無かつた。彼は二人の姪を直樹の傍へ呼んだ。黒い土蔵の反射、紺の暖簾<sup>のれん</sup>の香<sup>におい</sup>——そういうものの漂う町々の空気がいかに改まりつつあるか、高い甍<sup>いいらか</sup>を並べた商家の繁昌<sup>はんじよう</sup>がいかに昔の夢と変りつつあるか、かつて三吉が直樹の家に書生をしている時分には、名高い大酒店<sup>おだな</sup>の御隠居と唄われて、一代の榮華<sup>きわ</sup>を極め尽したような婦人も、いかに寄る年波と共に、下町の空氣の中へ沈みつつあるか——こういう話を娘達にも聞かせた。

「俊、大屋さんの庭の方へ、直樹さんを御案内したら可かろう」

と叔父に言われて、お俊は花の絶えない盆栽棚だなの方へ、植木好な直樹を誘つた。お延も一緒に隨ついて行つた。

若々しい笑声が庭の樹木の間から起つた。三吉は縁側に出て聞いた。無垢むくな心で直樹や娘達の遊んでいる方を、楽しそうに眺めた。彼は、自分の羞恥はじと悲哀かなしみとを忘れようとしていた。

やがて娘達は、庭の鳳仙花ほうせんかを摘とつて、縁側のところへ戻つて來た。白いハンケチをひろげて、花や葉の液を染めて遊んだ。鳳仙花は水分が多くて成功しなかつた。直樹は軒の釣つりしのぶ葱ねの葉を摘つて与えた。お俊は鉄はさみの尻でトントン叩たたいた。お延の新しいハンケチの上には、葱の葉の形が鮮明あざやかに印いんされた。

暮れてから直樹は帰つて行つた。三吉は一人の姪に吩咐いいつけて、新宿近くまで送らせた。

「俊は?」

ある日の夕方、三吉は台所の方へ行つて尋ねた。お延は茄子なすの皮を剥むいていた。

「姉様かなし、未だ帰つて来ないぞなし」とお延は流許に腰掛けながら答えた。

一寸お俊は自分の家まで行つて来ると言つて、出た。帰りが遅かつた。

「何とかお前に云つたかい」と叔父が心配そうに聞いた。

お延は首を振つて、復た庖丁を執り上げた。茄子の皮は俎板の上へ落ちた。

待つても待つてもお俊は帰らなかつた。夕飯が済んで、燈火が点いても帰らなかつた。

八時、九時に成つても、未だ帰らなかつた。

「必と今夜は泊つて来る積りだ」

と言つて見て、三吉は表の門を閉めに行つた。掛け金だけは掛けずに置いた。十時過ぎまで待つた。到頭お俊は帰らなかつた。

次第に三吉は恐怖を抱くようになつた。いつもお俊が風呂敷包の置いてあるところへ行つてみると、着物だの、書籍だのは、そのままに成つてゐるらしい。三吉はすこし安心した。自分の部屋へ戻つた。

「俊は最早帰つて来ないんじやないか」

夜が更けるに随つて、こんなことまで考えるように成つた。

壁には、お房の引延した写真が額にして掛けてある。洋燈の光がその玻璃に映つた、三

吉は火の影を熟じつと視つめて、何をお俊が母親に語りつつあるか、と想像してみた。近づいて見れば、叔父の三吉も、従兄弟の正太とそう大した変りが無い……低い鋭い声で、こう語り聞かせているだろうか。それは唯考てみたばかりでも、暗い、遺瀬やるせない心を三吉に起させた。

「俊はまた、何を間違えたんだ。俺はそんな積りじや無いんだ」

臆おくびよう病病な三吉は、こうすべてを串じょうだん談談のようにして、笑おうと試みた。「叔父さん、叔父さん」と頼みにして来て、足の裏を踏んでくれるとか、耳の垢あかを取ってくれるとか、その心こころやす易やすだてを彼はどうすることも出来なかつたのである。「結婚しない前は、俺もこんなことは無かつた」こう嘆息して、三吉は寝床に就ついた。

翌朝よくあさ、お俊は帰つて來た。彼女は別に変つた様子も見えなかつた。

「どうしたい」

と叔父はお延の居るところで聞いた。彼は心の中で、よく帰つて來てくれたと思つた。「なんだか急に父親おとうさんや母親おつがさんの顔が見たく成つたもんですから……突然だしぬけに家へ帰つたら、皆な驚いちゃつて……」

こう答えるお俊の手を、お延は娘らしく握つた。お俊は皆なに心配させて氣の毒だつた

という眼付をした。

漸く三吉も力を得た。日頃義理ある叔父と思えばこそ、こうして働きに来てくれると、お俊の心をあわれにも思つた。

その日から、三吉はなるべく姪を避けようとした。避けようとすればするほど、余計に巻込まれ、蹂躪ふみにじられて行くような気もした。彼は最早、苦痛なしに姪の眼を見ることが出来なかつた。どうかすると、若い女の髪が蒸されるとも、身体からだが燃えるともつかないようだ。今まで気のつかなかつた、極く極く幽かすかな臭氣においが、彼の鼻の先へ匂つて来る。それを嗅ぐと、我知らず罪もないものの方へ引寄せられるような心地じがした。この勢で押進んで行つたら、自分は畢竟つまりどうなる……と彼は思つて見た。

「俺は、もう逃げるより他に仕方が無い」

到頭、三吉はこんな狂人きちがいじみた声を出すように成つた。

二人の前垂あきんどを持った商人らしい男が、威勢よく格子戸を開けて入つて來た。一人は正太だ。今一人は正太が連れて來た榊さかきという客だ。

「今 こんにち 日 にち は」

と正太はお俊やお延に挨拶して置いて、連つれと一緒に叔父の部屋へ通つた。

お俊は茶戸棚の前に居た。客の方へ煙草盆を運んで行つた従姉妹は、やがて彼女の側へ來た。

「延ちゃん、貴方あなた持つて行つて下さいな——私が入れますからネ」  
と言つて、お俊は茶を入れた。

客の榊というは、三島の方にある大きな醤油屋しょうゆやの若主人であつた。不図ふとしたことから三吉は懇意に成つて、この人の家へ行つて泊つたことも有つた。十年も前の話。榊なら、それから忘れずにいる旧ふるい相識しりあいの間柄である。唯、正太と一緒に來たのが、不思議に三吉には思えた。そればかりではない、醤油蔵の白壁が幾つも並んで日に光る程の大きな家の若主人が、東京に出て仮に水菓子屋を始めているとは。加おまけに、若い細君が水菓子を売ると聞いた時は、榊が戯れて言うとしか三吉には思われなかつた。

「現に、私が買いに行きました」と正太が言出した。「私もネ、しばらく気分が悪くて、伏枕ふせつっていましたから、何か水氣のある物を食べたいと思つて買わせに遣るうちに……どうも話の様子では、普通ただの水菓子を売る家の内儀おかげさんでは無い。聞いてみると、御名前が

榊さんだ。小泉の叔父の話に、よく榊さんということを聞くが……もしや……と思つて、私が自分で買いに行つてみました。果して叔父さんの御馴染おなじみの方だ。それから最早こんなに御懇意にするように成つちゃつたんです」

「橋本君とはスッカリお話が合つて了つて」と言つて、榊は精悍せいかんな眼付をして、「先生——何処でどういう人に逢うか、全く解りませんネ」

榊の「先生」は口癖である。

正太は時々お俊の方を見た。「叔父さん、種々御心配下さいましたが、裏の叔父さんから頼んで頂いた方はウマく行きませんでした。そのかわり、他の店に口がありそうです。実は榊君も私と同じように兜町を狙つてゐるんです」

その日の正太は元氣で、夏羽織なぞも新しい瀟洒さつぱりとしたものを着ていた。「今にウンと一つ働いて見せるぞ」と彼の男らしい、どこか苦味を帶びた眼付が言つた。彼は勃々ほほほつとした心を制えかねるという風に見えた。

話の最中、三吉はこの甥おいの顔を眺めていると、

「あれ、兄さんがいけません」

と鋭く呼ぶ姪の声を耳の底の方で聞くような気がした。

「丁度ここに同じような人間が二人揃つたというものです」と榎は三吉と正太の顔を見比べた。「そう言つちや失敬ですが、橋本君だつても……御国の方で大きくやつていらしつたんでしょう……僕も、まあ、言つて見れば、似たような境遇なんです」

正太は良家に育つた人らしい手で、膝の前垂を直して見た。

「ねえ、橋本君、そうじや有りませんか」と榎は言葉を継いで、「これから二人で手を携えて大に行ろうじや有りませんか。僕もネ、今の水菓子屋なぞはホンの腰掛ですから、あの店は畳みます。いずれ家内は郷里の方へ帰します」

「多分、榎君の方が、私よりは先にある店へ入ることに成りましょう」と正太は叔父に話した。

三島にある城のような家、三吉が寝た二階、入った風呂、上つて見た土蔵、それから醤油を醸す大きな桶かもが幾つも並んでいた深い倉——そういうものはどう成つたか。榎はそれを語ろうともしなかつた。唯、前途を語つた。やがて、若々しい、爽快な笑声を残して、正太と一緒に席を立つた。

玄関のところで、正太はお俊から帽子を受取りながら、「延ちやん、あたま頭脳の具合は？」

「ええ、もうスッカリ癒つた」<sup>なお</sup>とお延は無邪気に笑つた。

「お医者様が病気でも何でも無いツて、そう仰つたら、延ちゃんは薬を服むのもキマリが悪く成つたなんて」とお俊は笑つて、正太の方を見ずに、お延の方を見た。

「静かな田舎から、こういう刺激の多い都会へ出て来るとネ」と正太も庭へ下りてから言った。

叔父、甥、姪などの交換<sup>とりかわ</sup>した笑声は、客の耳にも睦<sup>むつ</sup>まじそうに聞えた。お延は自分が笑われたと思つたかして、袖で顔を隠した。お俊は着物の襟<sup>えり</sup>を堅く搔<sup>かきあわ</sup>合させていた。

郊外の道路には百日紅<sup>さるすべり</sup>の花が落ちた。一夏の間、熱い寂しい思をさせた花が、表の農家の前には、すこし色の褪<sup>あせ</sup>めたまま未だ咲いていた。実が住む町のあたりは祭の日に当つたので、お俊はお延を連れて、泊りがけに行く仕度をした。

「叔父さん、晩召上る物は用意して置きましたから」とお俊が言つた。

「よし、よし、二人とも早くおいで。叔父さんが御留守居する——俺は独りでノンキにや

る

こう答えて、三吉はいくらかの小使を娘達にくれた。

二人の姪は明日の七夕たなばたにあたることなどを言合つて、互に祭の楽しさを想像しながら、出て行つた。娘達を送出して置いて、三吉はぴつたり表の門を閉めた。掛金も掛けて了つた。

窓のところへ行くと、例の紅い花あかが日に萎しおれて見える。そのうちに三吉は窓の戸も閉めて了つた。家の内は、寺院おてらにでも居るようにシンカンとして来た。

「これで、まあ、漸く清々せいせい々々した」

と手を揉もみながら言つてみて、三吉は庭に向いた部屋の方へ行つた。

九月の近づいたことを思わせるような午後の光線は、壁に掛かった子供の額を寂しそうに見せた。そこには未だお房が居る。白い蒲団ふとんを掛けた病院の寝台ねだいの上に横に成つて、大きな眼で父の方を見ている。三吉はその額の前に立つた。光線の反射の具合で、玻璃ガラスを通して見える子供の写真の上には、三吉自身が薄く重なり合つて映つた。彼は自分で自分の梢しょんぼり然とした姿を見た。

三吉は独りで部屋の内を歩いた。静かに過去つたことを胸に浮べた。この一夏の留守居は、夫と妻の繋つながれている意味をつくづく思わせた。彼は、結婚してからの自分が結婚し

ない前の自分で無いに、呆れた。<sup>あき</sup>由緒のある大きな寺院へ行くと、案内の小坊主が古い壁に掛つた絵の前へ参詣人<sup>さんけいにん</sup>を連れて行つて、僧侶<sup>ぼうさん</sup>の一生を説明して聞かせるように、丁度三吉が肉体から起つて来る苦痛は、種々な記憶の前へ彼の心を連れて行つてみせた。そして、家を持つた年にはこういうことが有つた、三年目はああいうことが有つた、と平<sup>ひら</sup>素忘<sup>だん</sup>れていたようなことを心の底の方で私語<sup>ささや</sup>いて聞かせた。それは殊勝気な僧侶の一代記のようなものでは無かつた。どれもこれも女のついた心の絵だ。隠したいと思う記憶ばかりだ。三吉は、深く、深く、自分に呆れた。

遠く雷の音がした。夏の名残<sup>なごり</sup>の雨が来るらしかつた。

「只<sup>ただいま</sup>今」

お雪は種夫を抱きながら、車から下りた。下婢<sup>おんな</sup>も下りた。

「叔父さん、叔母さんが御帰りですよ」

と二人の姪は、叔父を呼ぶやら、叔母の方へ行くやらして、門の外まで出て迎えた。二つの車に分けて載せてある手荷物は、娘達が手伝つて、門の内へ運んだ。

「どうも長々難有う御座いました」

と娘達に礼を言いながら、お雪は入口のところで車代を払つて、久し振で夫や姪の顔を見た。

「種ちゃんもお腹なかが空いたでしよう。先まず一ぱい呑のみましようネ」

とお雪が懐をひろげた。三吉は子供のウマそうに乳を呑む音を聞きながら、「ああ、好いところへお雪が帰つて来てくれた」と思った。

娘達は茶を入れて持つて來た。お雪は乾いた咽喉のどを露うるおして、旅の話を始めた。やがて、汽船宿の扱い札などを貼付けた手荷物が取出された。

「父さん、済みませんが、この鞆かばんを解いてみて下さいな。お俊ちゃん達に進あげる物がこの中に入つている筈はずです——生家の父親さんはこんなに堅く荷造りをしてくれて」

こうお雪が言つた。

幾年振かで生家の方へ行つたお雪は、多くの親戚から送られた種々な土産物みやげものを持って帰つて來た。これは名倉の姉から、これは※の姉から、これは※の妹から、とそこへ取出した。※は彼女が二番目の姉の家で、※は妹のお福の家である。「名倉母より」とした土産がお俊やお延の前にも置かれた。

この荷物のゴチャゴチャした中で、お雪は往復の旅を混合させて夫に話した。

「私が生家へ着きますとネ、しばらく父親さんは二階から下りて来ませんでしたよ。そのうちに下りて来て、台所へ行つて顔を洗つて、それから挨拶しました。父親さんは私の顔を見ると、碌に物も言えませんでした……」

「余程嬉しかつたと見えるネ」

「よくこんなに早く仕度して来てくれたツて、後でそう言つて喜びました。私が行くまで、老祖母さんの葬式も出さずには有りましたツけ」

お雪の話は帰路のことにつきて行つた。出発の日は、姉妹から親戚の子供達まで多勢波止場に集つて別離を惜んだこと、妹のお福なぞは船まで見送つて来て、漕ぎ別れて行く船の方からハンケチを振つたことなぞを話した。お雪は又、やや躊躇した後で、帰路の船旅を妹の夫と共にしたことを話した。

「へえ、勉さんが一緒に来てくれたネ」と三吉が言つた。

「商法の方の用事があるからツて、※が途中まで送つて来ました」

お雪が勉のことを話す場合には、「福ちゃんの旦那さん」とか、「※」とか言つた。なるべく彼女は旧いことを葬ろうとしていた。唯、親戚として話そうとしていた。それを三

吉も察しないでは無かつた。彼の方でも、唯、親戚として話そうとしていた。

旅の荷物の中からは、お雪が母に造つて貰つた夏衣の類が出て來た。ある懇意な家から  
せんべつ 餌別に送られたというまる円みのある包も出て來た。

まだ客のような顔をして、かしこまつていた下婢は、その包を眺めて、  
「※さんがそれを間違えて、『何だ、これは、水瓜なら食え』なんて仰有つて、船の中  
で解いて見ましたツけ……」

「青い花瓶……」

とお雪は笑つた。

勉には、三吉も直接に逢つていた。以前彼が名倉の家を訪ねた時に、既に名のり合つて、  
若々しい、才氣のある、心の好さそうな商人を知つた。

「どれ、御線香を一つ上げて」

とお雪は仏壇の方へ行つて、久し振で小さな位牌の前に立つた。土産の菓子や果物な  
どを供えて置いて、復た姪の傍へ來た。

「ほんと 真実にお俊ちゃんも、御迷惑でしたらうねえ——さぞ、東京はお暑かつたでしょうねえ

——

「ええ、今年の暑さは別でしたよ」

「彼地あちらもお暑かつたんですねよ」

こんな言葉を親しげに交換とりかわしながら、お雪は家の内うちを司懷なつかしそうに眺め廻した。彼女は、左の手の薬指に、細い、新しい指輪なども嵌はめていた。

そのうちにお雪は旅で汚よごれた白足袋はくを脱ぬいだ。彼女は台所の方へ見廻りに行つて、自分が主に成つて働き始めた。

お俊が叔父や叔母に礼を述べて、自分の家をさして帰つて行つたのは、それから二三日過ぎてのことであつた。「すつかり私は叔父さんの裏面うらを見ちやつてよ——三吉叔父さんという人はよく解つてよ」こう骨を剝えぐるような姪の眼の光を、三吉は忘れることが出来なかつた。それを思う度に、人知れず彼は冷い汗を流した。彼は、最早以前のように、苦痛なしに自分を考えられない人であつた。同時に、他ひとをも考えられなく成つて來た。家の生活で結び付けられた人々の、微妙な、陰影かげの多い、言うに言われぬ深い関係——そういうものが重苦しく彼の胸を压して來た——叔父姪、従兄妹いとこ同志、義理ある姉と弟、義理ある兄と妹……

## 四

三吉が家の横手にある養鶏所の側から、雑木林の間を通り抜けたところに、草地がある。緩慢な傾斜は浅い谷の方へ落ちて、草地を岡の上のように見せている。雑木林から続いた細道は、コンモリとした杉の木立の辺で尽きて、そこから坂に成った郊外の裏道が左右に連なつていて、馬に乗つた人などがその道を通りつつある。

武藏野の名残を思わせるような、この静かな郊外の眺望の中にも、よく見れば驚くべき変化が起つていた。植木畠、野菜畠などはドシドシ潰されて了つた。土は掘返された。新しい家屋が増えるばかりだ。

三吉はこの草地へ来て眺めた。日のあたつた草の中では蟋蟀が鳴いていた。山から下りて来たばかりの頃には、お菊はまだ地方に居る積りで、「房ちゃん、御城址へ花摘りに行きましよう」などと言つて、姉妹で手を引き合いながら、父と一緒に遊びに来たものだつた。お繁は死に、お菊は死に、お房は死んだ。三吉は、何の為に妻子を連れてこの郊外へ引移つて来たか。それを思わずにはいられなかつた。つくづく彼は努力の為すなきを感じた。

遠い空には綿のよくな雲が浮んだ。友人の牧野が住む山の方は、定めし最早秋らしく成つたろうと思わせた。三吉は眺め佇立んで、更に長い仕事を始めようと思ひ立つた。

新宿の方角からは、電車の響が喰るよう伝わつて来る。丁度、彼が寂しい田舎に居た頃、山の上を通る汽車の音を聞いたように、耳を聴立てて町の電車の響を聞いた。山から郊外へ、郊外から町へ、何となく彼の心は響のする方へ動いた。それに、子供等の遊友達を見ると、思出すことばかり多くて、この静かな土地を離れたく成つた。彼は町の方へ家を移そうと考えた。そのゴチャゴチャした響の中で、心を紛したり、新規な仕事の準備に取掛つたりしようと考えた。

家を指して、雑木林の間を引返して行くと、門の内に家の図を引いている人がある。やはりこの郊外に住む風景画家だ。お雪は入口のところに居て、どの窓がどの方角にあるなどと話し聞かせていた。

風景画家は洋服の袖隠から磁石を取出した。引いた図の方角をよく照らし合せて見て、ある家相を研究する人のことを三吉に話した。あまり子が死んで不思議だ、家相ということも聞いてみ給え、これから家を移すにしても方角の詮議もしてみるが可い、こう言つて、猶この家の図は自分の方から送つて置く、と親切な口調で話して行つた。

「ああいう画を描く人でも、方角なぞを気にするかナア」  
と三吉は言つてみたが、しかし家の図までも引いて行つてくれる風景画家の志は難有  
く思つた。

お雪は夫の方を見て、

「貴方のように関わなくとも困る。人の言うことも聞くもんですよ。山を發つ時にも、日  
取が悪いから、一日延ばせというものを無理に發つたりなんかして、だからあんな不幸が  
有るなんて、後で近所の人に言われたりする……それはそうと、何だか私はこの家に居る  
のが厭に成つた」

こう言う妻の為にも、三吉は家を移そと決心した。

信心深い植木屋の人達は又、早く三吉の去ることを望んだ。何か、彼が禍を背負つて、  
折せつかく新築した家へケチを付けにでも來たように思つていた。それを聞くにつけても、三  
吉は早く去りたかった。

外濠線の電車は濠に向つた方から九月の日をうけつた。客の中には立つて窓の

板戸を閉めた人もあつた。その反対の側に腰掛けた三吉は、丁度家を探し歩いた帰りがけで、用達の都合でこの電車に乗合わせた。彼は森彦の旅舎へも寄る積りであつた。

昇降する客に混つて、二人の紳士がある停留場から乗つた。

「小泉君」

とその紳士の一人が声を掛けた。三吉は幾年振かで、思いがけなく大島先生に逢つた。

割合に込んだ日で、大島先生は空いたところへ行つて腰掛けた。三吉と反対の側に乗つたが、連があるので、客を隔てたのと、互に言葉も替さなかつた。二人は黙つて乗つた。

大島先生は、一夏三吉が苦しんだ熱い思を、幾夏も経験したような人であつた。細君に死別れてから、先生は悲しい噂ばかり世に伝えられるように成つた。改革者のような熱烈な口調で、かつて先生が慷慨したり痛嘆したりした声は、皆な逆に先生の方へ戻つて行つた。正義、愛、美しい思想——そういう先生の考えたことや言つたことは、残らず葬られた。正義も夢、愛も夢、美しい思想も夢の如くであつた。唯、先生には変節の名のみが残つた。昔親切によく世話をやくして遣つた多くの後輩の前にも、先生は黙つて首を垂れて、  
「鞭撻て」  
〔むちうやふる〕  
と言わぬばかりの眼付をする人に成つた。旧い友達は大抵先生を捨てた。先生も旧い友達を捨てた。

以前に比べると、大島先生はずつと肥った。服装なども立派に成つた。しかし以前の貧乏な時代よりは、今日の方が幸福であるとは、先生の可傷しい眼付が言わなかつた。

この縁故の深い、旧時恋しい人の前に、三吉は考え沈んで、頭脳の痛くなるような電車の響を聞いていた。先生の書いたもので思出す深夜の犬の鳴声——こんな突然に起つて来る記憶が、懐旧の情に混つて、先生のことともつかず、自分のことともつかず、丁度電車の窓から見える人家の窓や柳の葉のように、三吉の胸に映つたり消えたりした。

そのうちに、三吉は大島先生の側へ行つて腰掛けることが出来た。先生は重い体躯を三吉の方へ向けて、手を執らないばかりの可懐なつかしそうな姿勢を示したが、昔のようには語ろうとして語られなかつた。

「オオ、鍛冶橋に來た」

と先生はあわただしく起立たちあがつて、窓から外の方の市街を見た。

「もう御降りに成るんですか」と三吉も起上つた。

「小泉君、ここで失敬します」

という言葉を残して置いて、大島先生は電車から降りた。

「吾儕われわれに媒酌なこうど人をしてくれた先生だつたけナア」

こう思つて、三吉が見送つた時は、酒の香にすべての悲<sup>かなしみ</sup>哀<sup>かなしみ</sup>を忘れようとするような寂<sup>かなしみ</sup>しい、孤独な人が連の紳士と一緒に柳の残つてゐる橋<sup>たもと</sup>の畔<sup>たもと</sup>を歩いていた。

電車は通り過ぎた。

「小泉さんはおいでですか」

三吉は森彦<sup>やどや</sup>の旅舎<sup>やどや</sup>へ行つて訪ねた。そこでは内儀<sup>おかげ</sup>さんが変つて、女中をしていた婦人が丸<sup>まる</sup>髷<sup>まげ</sup>に結つて顔を出した。

電話口に居た森彦は、弟の三吉と聞いて、二階へ案内させた。部屋にはお俊も来合せていた。森彦は電話の用を済まして、別の楼梯<sup>はしごだん</sup>から上つて來た。

三吉はお俊と不思議な顔を合せた。殊に厳格な兄の前では、いかにも姪<sup>めい</sup>の女らしい黙つて観てゐるような様子がツラかつた。彼は、夏中手伝いに來ていて貰つた時のような、親しい、樂々とした氣分で、この娘と對<sup>むか</sup>い合うことが出来なかつた。何となく堅くなつた。

「森彦叔父さん、私は学校の帰りですから」とお俊が催促するように言つた。

「そうかい。じや着物は宜しく頼みます。母親<sup>おつか</sup>さんにそう言つて、可いように仕立てて貰

つておくれ

やどやざまい

旅舎生活する森彦は着物の始末をお俊の家へ頼んだ。お俊は長い袴の紐を結び直して、二人の叔父に別れて行つた。

漸く三吉は平常の調子に返つて、一日家を探し歩いたことを兄に話した。直樹が家の附近は、三吉も少年時代から青年時代へかけての記憶のあるところで、同じ町中を抜ぶとすれば、なるべく親戚や知人にも近く住みたい。それには、旧時直樹の家に出入した人の世話で、一軒二階建の家を見つけて來た。こんな話をした。

「時に、延もお愛ちゃんの学校へ通わせることにしました」と三吉が言つた。「その方があの娘の為めにも好さそうです」

森彦は自分の娘が兄の娘に負けるようでは口惜しいという眼付をした。

「まあ、学校の方のことは、お前に任せること……俺の積りでは、延に語学をウンと遣らせて、外交官の細君に向くような娘を造りたいと思つていた。行く行くは洋行でもさせたい位の意気込だつた……」

「娘の性質にもありますサ」

「俺の娘なら、もうすこし勇気が有りそうなものだ。存外ヤカなもんだ」

と森彦は田舎訛を交えて、自分の子が自分の自由に成らないに、歎息した。

「実さんの家でも越すそじや有りませんか」

「そうだそな。どうも兄貴にも困りものだよ。一応俺に相談すればあんな真似はさせやしなかつた。その為に俺の仕事まで、どれ程迷惑を蒙つたか知れない。ああいう兄貴の弟だ——直ぐそれを他に言われる。實に、油断も間隙もあつたもんじや無い。どうだ、そのうちに一度兄貴の家へ集まるまいか。どうしても東京に置いや不可……満洲の方にでも追つて遣らにや不可……今度行つたら、俺がギュウという目に逢わせてくれる」

小泉の家の名譽と、実の一生とを思うのあまり、森彦は高い調子に成つて行つた。この兄は、充実した身体の置場所に困るという風で、思わず言葉に力を入れた。その飛沫が正太にまで及んで行つた。兜町で儲けようなどとは、生意氣な、という語氣で話した。正太は幼少の頃、この兄の手許へ預けられたことが有るので、どうかすると森彦の方ではまだ子供のように思つていた。

部屋の障子の開いたところから、青桐の葉が見える。一寸三吉は廊下へ出て、町々の屋根を眺めた。

「お前が探して來た家は、二階があると言つたネ。二階も好いが、子供にはアブナイぞ。

橋本の仙（正太の妹）なぞは幼少い時分に樓梯から落ちて、それであんな風に成った

——夫婦は二階で寝ていて知らなかつたという話だ——

「でも、お仙さんは、房ちゃんと同じ病氣をしたと云うじや有りませんか」

「何でも俺はそういう話を聞いた」

三吉は森彦の前へ戻つて、眼に見えない二階の方を見るように、しばらく兄の顔を見た。間もなく三吉はこの二階を下りた。旅舎を出てから、「よく森彦さんは、ああして長くひとりで居られるナア」と思つてみた。電車で新宿まで乗つて、それから樹木の間を歩いて行くと、諸方の屋根から夕餐の煙の登るのが見えた。三吉は家の話を持つて、妻子の待つている方をさして急いだ。

家具という家具は動き始めた。寝る道具から物を食う道具まで互に重なり合つて、門の前にある荷車の上に積まれた。

「種ちゃん、彼方のお家の方へ行くんですよ」

とお雪は下婢の背中に居る子供に頭巾を冠せて置いて、庭伝いに女教師の家や植木屋へ

別れを告げに行つた。こうして、思出の多い家を出て、お雪は夫より一足先に娘達の墳墓の地を離れた。

町中にある家へ、彼女が子供や下婢と一緒に着いた時は、お延が皆なを待受けていた。そこは、往時女髪結で直樹の家へ出入して、直樹の母親の髪を結つたという老婆ばあさんが見つけてくれた家であつた。その老婆の娘で、直樹の父親の着物なぞを畳んだことのある人が、今では最早十五六に成る娘から「母親さんおつか」と言われる程の時代である。極く近く住むところから、その人達が土瓶どびんや湯沸ゆわかしを提げて見舞に来てくれた。お雪は手拭てぬぐいを冠つたり脱つたりした。

静かな郊外に住慣れたお雪の耳には、種々な物にぎや売の声が賑かに聞えて來た。勇ましい鰯わしゅうりの呼声、豆腐屋の喇叭らつぱ、歯入屋の鼓、その他郊外で聞かれなかつたようなものが、家の前を通る。表を往つたり來たりする他の主婦かみさんで、彼女のように束髪にした女は、殆ほとんど無いと言つても可い。この都会の流行に後れまいとする人々の髪の形が、先ず彼女を驚かした。

実の家からは、例の簾笥たんすや膳箱ぜんばこなどを送り届けて來た。いずれも東京へ出て來てから、の実の生活の名残だ。大事に保存された古い器物ばかりだ。お雪はそれを受取つて、自分

の家の飾りとするのも気の毒に思つた。

夫は荷物と一緒に着いた。

「こういうところで、田舎風の生活をして見るのも面白いじゃないか」

と三吉はお雪に言つた。お雪はよく働いた。夕方までには、大抵に家の内が片付いた。荷車に積んで来たゴチャゴチャした家具は何處へ納まるともなく納まつた。改まつた畳の上で、お雪は皆なと一緒に、楽しそうに夕飯の膳に就いた。

暮れてから、かわるがわる汗を流しに行つた女達は、あまり風呂場が明る過ぎてキマリが悪い位だつた、と言つて帰つて來た。下婢は眼を円くして飛んで来て、「この辺では、荒物屋の内儀さんまで三味線を引いています」とお雪に話した。長唄や常磐津が普通の家庭にまで入つてゐることは、田舎育ちの下婢にめずらしく思われたのである。

「延ちやん、一寸そこまで見に行つて来ましょう」

とお雪は姪を誘つた。

郊外の夜に比べると、数えきれないほどの町々の灯がお雪の眼にあつた。紅——青——

黄——と一口に言つて了うことの出来ない、強い弱い種々な火の色が、そこにも、ここにも、都会の夜を照らしていた。お雪と姪とは、互に明るく映る顔を見合せた。二人は手を

引き合つて歩いた。戻りがけに、町中を流れる暗い静かな水を見た。お雪は直樹の家に近く引移つて来たことを思つた。

三吉は最早響の中に居た。朝の騒々しさが納まつた頃は、電車の唸りだの、河蒸汽の笛だのが、特別に二階の部屋へ響いて來た。

「叔父さん、障子張りですか」

と言いながら、正太が樓梯を上つて來た。正太は神と相前後して、兜町の方へ通うことになつた。

「相場師が今頃訪ねて來ても好いのかね」と三吉は笑つて、張つた障子を壁に立掛けた。

「いえ、私はまだ店へ入つたばかりで、お客様の形です。今ネ、一寸場を覗いて、それから廻つて來ました」

正太は叔父の側で一服やつて、袂から細い打紐うちひもを取出した。叔父の家にある額の釣紐たもとにもと思つて、途中から買求めて來たのである。彼はこういうことに好く気がついた。

壁には田舎屋敷の庭の画が掛けてあつた。正太はその釣紐を取替えて、結び方も面白く

掛直してみた。その画は、郊外に住む風景画家の筆で、三吉に取つては忘れ難い山の生活の記念であつた。

三吉は額を眺めて、旧いことまでも思出したように、

「Sさんもどうしているかナア」

と風景画家の噂うわさをした。正太はずつと以前、染物織物なぞに志して、その為に絵画お絵を修めようとしたことがある位で、風景画家の仕事にも興味を持つていた。

「Sさんには、この節は稀たまにしか逢わない」と三吉は嘆息しながら、「何となく友達の遠く成つたのは、悲しいようなものだネ」

「オヤ、叔父さんはああして近く住んでいらしツたじや有りませんか」

「それがサ……この画をSさんが僕に描いてくれた時分は、お互に山の上に居て、他に話相手も少いしネ、毎日のようによく往来いききしましたツけ。僕が田圃たんぼ側わきなぞに転がつていて、向の谷の方から三脚を持つた人がニコニコして帰つて来る——途次二人で画や風景の話なぞをして、それから僕がSさんの家へ寄ると、写生を出して見せてくれる、どうかすると夜遅くまでも話し込む——その家の庭先がこの画さ。あの時分は実に楽しかつた……一度とああいう話は出来なく成つて了つた……」

「友達は多くそう成りますネ」

「何故そんな風に成つて來たか——それが僕によく解らなかつたんです。Sさんとは何事も君、お互に感情を害したようなことが無いんだからネ。不思議でしよう。実は、此頃、ある友達の許へ寄つたところが、『小泉君——Sさんが君のことをモルモットと言つていましたぜ』こう言いますから、『モルモットとは何だい』と僕が聞いたら、大学の試験室へ行くと医者が注射をして、種々な試験をするでしよう。友達がモルモットで、僕が医者だそうだ——」

正太は噴飯した。

「まあ、聞給え。考えて見ると、成程Sさんの言うことが真実だ。<sup>ほんとう</sup>知らず知らず僕はその医者に成つていたんだネ。傍に立つて、知ろう知ろうとして、観<sup>み</sup>ていられて見給え——好い心<sup>こころ</sup>地<sup>ぢ</sup>はしないや。何となくSさんが遠く成つたのは、始めて僕に解つて來た……」

復た正太は笑つた。

「しかし、正太さん、僕は唯一——偶然に——そんな医者に成つた訳でも無いんです。よく物を觀よう、それで僕はもう一度この世の中を見直そうと掛つたんです。研究、研究でネ。これがそもそも他<sup>ひと</sup>を苦しめたり、自分でも苦しんだりする原因なんです……しかし、君、

人間は一度可恐しい目に逢着してみ給え、いろいろなことを考えるように成るよ……子供が死んでから、僕は研究なんてことにもそう重きを置かなく成つた……」

明るい二階で、日あたりを描いた額の画の上に、日があたつた。春蚕の済んだ後で、刈取られた桑畠に新芽の出たさま、林檎の影が庭にあるさまなど、玻璃越しに光つた。お雪は階下から上つて来た。

「父さん、障子が張れましたネ」

「その額を御覧、正太さんがああいう風に掛けて下すつた」

「眞實に、正太さんはこういうことが御上手なんですねえ」

とお雪は額の前に立つて、それから縁側のところへ出てみた。

「叔母さん、御覧なさい」

と正太も立つて行つて、何となく江戸の残つた、古風な町々に続く家の屋根、狭い往来を通る人々の風俗などを、叔母に指してみせた。

塩瀬というが正太の通う仲買店であつた。その店に縁故の深い人の世話で、叔父の三吉

にも身元保証の判を捺かせ、当分は見習かたがた外廻りの方をやつっていた。正太に比べると、榊の方は店も大きく、世話する人もよく、とにかく客分として扱われた。二人ともまだ馴染が少なかつた。正太は店の大将にすらよく知られていなかつた。毎日のようには下宿から通つた。

秋の蜻蛉とんぼが盛んに町の空を飛んだ。塩瀬の店では一日の玉ぎょく高だかの計算を終つた。後場ごばは疾とうに散ひけた。幹部を始め、その他の店員はいざれも帰りを急ぎつつあつた。電話口へ馳かけ付けるもの、飲仲間を誘うもの、いろいろあつた。正太は塩瀬の暖簾のれんを潜くぐり抜けて、榊の待つてゐる店の方へ行つた。

二人は三吉の家をさして出掛けた。大きな建築物たてもののせせこましく並んだ町を折れ曲つて電車を待つところへ歩いて行つた。株の高低に激しく神経を刺激された人達が、二人の前を右に往き、左に往きした。電車で川の岸まで乗つて、それから復た二人はぶらぶら歩いた。

途中で、榊は立留つて、

「成金が通るネ——護謨輪ゴムわかなんかで」

と言つて見て、情婦の懷ふところへと急ぎつつあるような、意氣揚々とした車上の人を見送つた。

榊も正太も無言の侮辱を感じた。榊は齷齪あくせくと働いて得た報酬を一夕の歓樂に擲なげうとうと思つた。

橋を渡ると、青い香も失せたような柳の葉が、石垣のところから垂下つてゐる。細長い条えだを通して、逆に溢あふれ込む活々いきいきとした潮が見える。その辺まで行くと、三吉の家は近かつた。

「榊君——小泉の叔父の近所にネ、そもそも洋食屋を始めたという家が有る。建物なぞは、古い小さなものサ。面白いと思うことは、僕の阿爺おやじが昔流行つた獵虎らつこの帽子を冠かぶつて、酒を飲みに来た頃から、その家は有るんだトサ。そこへ叔父を誘つて行こうじゃないか……一夕昔を忍ぼうじやないか」

「そんなケチ臭いことを言うナ。そりや、今日の五吉儕われわれの境涯では、一月の月給が一晩も騒げば消えて了うサ。それが、君、何だ。一攫千金いっかくせんきんを夢みる株屋じやないか——今夜は僕が奢る」

二人は歩きながら笑つた。

父の夢は子の胸に復活いきかえつた。「金釵きんざい」とか、「香影こうえい」とか、そういう漢詩に残つた趣のある言葉が正太の胸を往来した。名高い歌妓うたひめが黒縫子くろじゆすの襟えりを掛けて、素足で客を

款待したという父の若い時代を可懐しく思つた。しばらく彼は、樺太で難儀したことや、青森の旅舎で煩つたことを忘れた。旧い屋根船の趣味なぞを想像して歩いた。

「お揃いですか」

と三吉は机を離れて、客を二階の部屋へ迎えた。

兜町の方へ通うように成つてから、榊は始めて三吉と顔を合せた。榊も、正太もまだ何となく旧家の主人公らしかつた。言葉遣いなども、妙に丁寧に成つたり、書生流儀に成つたりした。

「叔母さん、おめずらしゆう御座いますネ」

と正太は茶を持つて上つて来た叔母の髪に目をつけた。お雪は束髪を止して、下町風の丸髷にしていた。

お雪が下りて行つた後で、榊は三吉と正太の顔を見比べて、

「ねえ、橋本君、先ず吾儕の商売は、女で言うと丁度芸者のようなものだネ。御客大明神と崇め奉つて、ペコペコ御辞儀をして、それでまあ玉を付けて貰うんだ。そこへ

行くと、先生は芸術家とか何とか言つて、乙に構えてもいられる……大した相違のものだ  
ネ」

三吉は「復た始まつた」という眼付をした。

「先生でなくとも、君でも可いや——ねえ、小泉君、僕がこんな商売を始めたと言つたら、  
君なぞはどう思うか知らないが——」

「叔父さんなぞは何とも思つてやしません」と正太が言つた。

「榊が居ると思わないで、ここにたいいこもち 帮間たいいこまち が一人居ると思つてくれ給え——ねえ、橋本君、  
まあお互にそんなもんじやないか」と言つて、榊は急に正太の方に向いて、「どうだい、  
君、今日の相場は。僕は最早傍観していられなく成つた。他の儲けるところを、君、黙つ  
て観ていられるもんか」

「ドシンと來たねえ」

「どうだい、君、二人で大に行ろうじゃないか」

笛、太鼓の囃子はやし の音が起つた。芝居の広告の幟のぼり が幾つとなく揃つて、二階の欄てすり の外を通  
り過ぎた。話も通じないほどの騒ぎで、狭い往来からは口上言いの声が高く響き渡つた。  
階下した では、種夫おぶ を背負つた人が、見せに出るらしかつた。親戚の娘達の賑かな笑声も聞え

た。

やがて、榊は三吉の方を見て、

「小泉君の前ですが、君は僕の家内にも逢つて、覚えておられるでしょう。家内は今、郷里に居ます。時々家のこと書いた長い手紙を寄越します。それを読むと僕は涙が流れて、夜も碌に眠られないことがあります……眠らずに考えます……しかし四日も経つと、復た僕は忘れて了う……極く正直な話が、そうなんです。なにしろ僕などは、三十万の借財を親から譲られて、それを自分の代に六十万に増しました……」

正太も首を振つて、感慨に堪えないと、いう風であつた。思いついたように、懐中時計を取り出して見て、

「叔父さん、今晚は榊さんが夕飯を差上げるそうです。何卒御交際下さいまし」

と言つて御辞儀をしたので、榊も話を一ト切にした。

その時親類の娘達がドヤドヤ 楼 梯を上つて來た。

「兄さん、左様なら」とお愛が手をついて挨拶した。

「お愛ちゃん、学校の方の届は?」と三吉が聞いた。

「今、姉さんに書いて頂きました」

「叔父さん、私も失礼します」とお俊はすこし改まつた調子で言つて、正太や榦にも御辞儀をした。

「左様なら」とお鶴も姉の後に居て言つた。

この娘達を送りながら、三吉は客と一緒に階下へ降りた。彼は正太に向つて、今度引移つた実の家の方へ、お延を預ける都合に成つたことなぞを話した。

階下の部屋は一時混雜した。親類の娘達の中でも、お愛の優美な服装が殊に目立つた。お俊は自分の筆で画いた秋草模様の帯を『しめ』ていた。彼女は長いこと使い慣れた箪笥が、叔父の方に来ているのを見て、ナサケナイという眼付をした。順に娘達はお雪に挨拶して出た。つづいて、三吉も出た。門の前には正太や榦が待つていた。未だ日の暮れないうちから、軒燈を点ける人が往来を駆け歩いた。町はチラチラ光つて來た。

水は障子の外を緩く流れていた。榦、正太の二人は電燈の飾りつけてある部屋へ三吉を案内した。叔父の家へ寄る前に、正太が橋の畔で見た青い潮は、耳に近くヒタヒタと囁語や

榊は障子を明け払つて、

「橋本君、 こういうところへ来て楽めるというのも、 やはり……」「金！金！」

と正太は榊が皆な言わないうちに、 言つた。 榊は正太の肩をつかまえて、 二度も三度も揺つた。 「然り、 然り」という意味を通わせたのである。

三吉が立つて水を眺めているうちに、 女中が膳を運んで来た。 一番いける口の榊は、 種々な意味で 祝 盂<sup>しゃく はい</sup>を挙げ始めた。

「姉さんにも一つ進<sup>あ</sup>げましよう」と榊は女中へ盃を差した。 「どうです、 僕等はこれで何商売と見えます？」

女中は盃を置いて、 客の様子を見比べた。

「私は何と見えます？」と正太が返事を待兼ねるように言つた。

「さあ、 御見受申したところ……袋物でも御商<sup>あきな</sup>いに成りましようか」

「オヤオヤ、 未だ 素人<sup>しろうと</sup>としか見られないか」と正太は頭を搔いた。

榊<sup>ふきだ</sup>も噴飯した。 「姉さん、 この二人は株屋に成りたてなんです。 まだ成りたてのホヤホ

ヤなんです」

「あれ、兜町の方でいらつしやいましたか。あちらの方は、よく姉さん方が大騒ぎを成さいます」

こう女中は愛想よく答えたが、よくある客の戯れという風に取つたらしかつた。女中は半信半疑の眼付をして意味もなく、軽く笑つた。

知らない顔の客のことで、口を掛ければ直ぐに飛んで来るような、中年増の妓が傍へ来て、先ず酒の興を助けた。庭を隔てて明るく映る障子の方では、放肆な笑声が起る。盛んな三味線の音は水に響いて楽しそうに聞える。全盛を極める人があるらしい。何時の間にか、榊や正太は腰の低い「幫間」で無かつた。意氣昂然とした客であつた。

「向うの座敷じや、おおい大にモテるネ」

と榊は正太に言つた。ここにも二人は言うに言われぬ侮辱を感じた。それに、扱いかねている女中の様子と、馴染の無い客に対する妓の冷淡とが、何となく二人の矜持ほごりを傷けた。殊に、榊は不愉快な眼付をして、楽しい酒の香を嗅いだ。

「貴方あなた一つ頂かして下さいな」

とその中年増が、自信の無い眼付をして、盃を所望した。世に後れても、それを知らずにいるような人で、座敷を締める力も無かつた。

そのうちに、今一人若い妓が興を助けに来た。歌が始まつた。

「姐さん、一つ二上りを行こう」

と言つて、正太は父によく似た清しい、鏽の加わつた声で歌い出した。

「好い声だねえ。橋本君の唄は始めてだ」と榎が言つた。

「叔父さんの前で、私が歌つたのも今夜始めてですね」と正太は三吉の方を見て微笑んだ。  
 「小泉君の酔つたところを見たことが無い——一つ酔わせなけりや不可」と榎が盃を差した。

「すこし御酔いなさいよ。貴方」と中年増の妓が銚子を持添えて勧めた。

三吉は酒が発したと見えて、顔を紅くしていた。それでいながら、妙に醒めていた。彼は酔おうとして、いくら盃を重ねてみても、どうしても酔えなかつた。

唯、夕飯の馳走にでも成るように、心易い人達を相手にして、談したり笑つたりした。

「是方は召上らないのね」

と若い妓が中年増に言つた。

夜が更けるにつれて、座敷は崩れるばかりであつた。「何か伺いましょう」とか、「心

意気をお聞かせなさいな」とか、中年増は客に對つて、ノベツに催促した。若い方の妓は、  
懐中ふところから小さな鏡を取出して、客の見ている前で顔中拭ふき廻した。

榊は大分酔つた。若い方が御辞儀をして帰りかける頃は、榊は見るもの聞くもの面白く  
ないという風で、面まのあたりその妓ののしを罵ののしたつた。そして、貰つて帰つて行つた後で、腐つた  
肉にとまる蠅のよう言つて笑つた。折角せつかく楽しみに来ても、楽めないでいるような客の前  
には、中年の女が手持無沙汰てもちぶさたに銚子を振つて見て、恐れたり震えたりした。

酒も冷く成つた。

ボーンという音が夜の水に響いて聞えた。仮色こわいろを船で流して來た。榊は正太の膝を枕  
にして、互に手を執りながら、訴えるような男や女の作り声を聞いた。三吉も横に成つた。  
三人がこの部屋を離れた頃は、遅かつた。屋外そとへ出て、正太は独語ひとりごとのように、遣瀬やるせ  
ない心を自分で言い慰めた。

「今に、ウンと一つ遊んで見せるぞ」

「小泉君、君は帰るのかい……野暮臭い人間だナア」

と榊は正太の手を引いて、三吉に別れて行つた。

三吉は森彦から手紙を受取つた。森彦の書くことは、いつも簡短である。兄弟で実の家へ集まろう、実が今後の方針に就いて断然たる決心を促そう、と要領だけを世慣れた調子で認めて、猶<sup>なお</sup>物のキマリをつけなければ、安心が出来ないかのように書いて寄した。

弟達は兄を思うばかりで無かつた。度々<sup>たびたび</sup>の兄の失敗に懲りて、自分等をも護<sup>よこ</sup>らなければ成らなかつた。で、雨降揚句<sup>よひようく</sup>の日に、三吉も兄の家を指して出掛けた。

沼のように湿気の多い町。沈滞した生活。溝<sup>じぶ</sup>は深く、道路<sup>みち</sup>は悪く、往来<sup>ゆきき</sup>の人は泥をこねて歩いた。それを通り越したところに、引込んだ閑静な町がある。門構えの家が続いている。その一つに実の家族が住んでいた。

「三吉叔父さんが被<sup>いら</sup>入しつた」

とお俊が待受顔<sup>まつゆめんがほ</sup>に出て迎えた。お延も顔を出した。

「森彦さんは？」

「先刻<sup>さつき</sup>から来て待つていらしツてよ」

とお俊は玄関のところで挨拶した。彼女は大略<sup>おおよそ</sup>その日の相談を想像して、心配らしい様子をしていた。

「鶴ちゃん、御友達の許へ遊びに行くつてらッしやい」お俊はひとりで氣を揉んだ。

「そうだ、鶴ちゃんは遊びに行くが可い」

とお倉も姉娘の後に附いて言つた。「こ<sup>う</sup>いう時には、延ちゃんも氣を利かして、避けてくれれば可いに」とお俊はそれを眼で言わせたが、お延にはどうして可いか解らなかつた。この娘は、三吉叔父の方から移つて間もないことで、唯マゴマゴしていた。

実は部屋を片付けたり、茶の用意をしたりして、三吉の来るのを待つていた。三人の兄弟は、会議を開く前に、集つて茶を喫んだ。その時実は起つて行つて、戸棚の中から古い箱を取出した。塵埃<sup>ほこり</sup>を払つて、それを弟の前に置いた。

「これは三吉の方へ遣つて置こう」

と保管を托するように言つた。父の遺筆である。忠寛を記念するものは次第に散つて了つた。この古い箱一つ残つた。

「どれ、話すことは早く話して了おう」と森彦が言出した。

お俊は最早<sup>もう</sup>気が氣でなかつた。母は、と見ると、障子のところに身を寄せて、聞耳<sup>きみ</sup>を立ててゐる。従姉妹は長火鉢<sup>ながひばち</sup>の側に俯向<sup>うつむ</sup>いてゐる。彼女は父や叔父達の集つた部屋の隅へ行つて、自分の机に身を持たせ掛けた。後日のために、よく話を聞いて置こうと思つた。

「そんなトロクサいことじや、ダチカン」と森彦が言つた。「満洲行と定めたら、直ぐに出掛ける位の勇気が無けりや」

「俺も身体は強壯じょうぶだしナ」と実はそれを受け、「家の仕末さえつけば、明日にも出掛けたいと思つてゐる」

「後はどうにでも成るサ。私も居れば、三吉も居る」

「もう——引受けてくれるか——難あらがた有い。それをお前達が承知してくれさえすれば、俺は安心して発たてる」

こういう大人同志の無造作な話は、お俊を驚かした。彼女は父の方を見た。父は細かく書いた勘定書を出して叔父達に示した。多年の間森彦の胸にあつたことは、一時に口を衝いて出て來た。この叔父は「兄さん」という言葉を用いていなかつた。「お前が」とか、「お前は」とか言つた。そして、声を低くして、父の顔色が變るほど今日までの行おこない為むを責めた。

お俊はどう成つて行くことかと思つた。堪かんにん忍強かえりやうい父は黙つて森彦叔父の鞭むち鞭むちを受けた。この叔父の癖で、言葉に力が入り過ぎるほど入つた。それを聞いていると、お俊は反つて不幸な父を憐あわれんだ。

「俊、先刻さつきの物をここへ出せや」

と父に言われて、お俊はホツと息を吐いた。彼女は母を助けて、用意したものをお奥の部屋の方へ運んだ。

「さあ、何物なんにもないが、昼飯をやつとくれ」と実は家長らしい調子に返つた。

三人の兄弟は一緒に食卓に就いた。口に出さないまでも、実にはそれが別離わかれの食事である。箸はしを執つてから、森彦も悪い顔は見せなかつた。

「むむ、これはナ力ナ力うま甘い」と森彦は吸物の出来を賞ほめて、気忙せわしなく吸つた。

「さ、何卒どうかおかえなすつて下さい」と、旧い小泉の家風を思わせるように、お倉は款待もてなした。

皆な笑いながら食つた。

間もなく森彦、三吉の二人は兄の家を出た。半町ばかり泥濘ぬかるみの中を歩いて行つたところで、森彦は弟を顧みて、

「あの位、俺が言つたら、兄貴もすこしはコタえたらう」

と言つてみたが、その時は二人とも笑えなかつた。実の家族と、病身な宗蔵とは、復た二人の肩に掛つていた。

「鶴ちゃん」

とお俊は、叔父達の行つた後で、探して歩いた。

「父さんが明日御出発おたつちなさるというのに……何処へ遊びに行つてるんだろうねえ……」

と彼女は身を震わせながら言つてみた。一軒心当たりの家へ寄つて、そこで妹が友達と遊んで帰つたことを聞いた。急いで自分の家の方へ引返して行つた。

こんなに急に父の満洲行が来ようとは、お俊も思いがけなかつた。家のものにそう委くわいことも聞かせず、快活らしく笑つて、最早旅仕度たびじたくにいそがしい父——狼狽ろうばいしている母——未だ無邪気な妹——お俊は涙なしにこの家の内の光景ありさまを見ることが出来なかつた。

長い悲惨な留守居の後で、漸く父と一緒に成れたのは、實に昨日のことのよう娘の心に思われていた。復た別れの日が來た。父を逐おうものは叔父達だ。頼りの無い家のもの的手から、父を奪うのも、叔父達だ。この考えは、お俊の小さな胸に制え難い口惜しさを起させた。可厭しい親戚の前に頭を下げて、母子の生命を托さなければ成らないか、と思う心は、一家の零落を哀しむ心に混つて、涙を流させた。

叔父達に反抗する心が起つた。彼女は余程自分でシツカリしなければ成らないと思つた。弱い、年をとつた母のことを考へると、泣いてばかりいる場合では無いとも思つた。その晩は母と二人で遅くまで起きて、不幸な父の為に旅の衣服などを調えた。

「母親さん、すこし寝ましよう——どうせ眠られもしますまいけれど」

と言つて、お俊は父の側に寝た。

紅い、寂しい百日紅の花は、まだお俊の眼にあつた。彼女は暗い部屋の内に居ても、一夏を叔父の傍で送つたあの郊外の家を見ることが出来た。こんなに早く父に別れるとしたら何故父の傍に居なかつたろう、何故叔父を遠くから眺めて置かなかつたろう。

「可厭だ——可厭だ——」

こう寝床の中で繰返して、それから復た種々な他の考えに移つて行つた。父も碌に眠らなかつた。何度も寝返を打つた。

未だ夜の明けない中に、実は寝床を離れた。つづいてお倉やお俊が起きた。

「母親さん、鶏が鳴いてるわねえ」

と娘は母に言いながら、寝衣を着えたり、帯を〆《しめ》たりした。

赤い釣洋燈の光はションボリと家の内を照してゐた。台所の方では火が燃えた。やが

てお倉は焚たき落おとしを十能に取つて、長火鉢の方へ運んだ。そのうちにお延やお鶴も起きて來た。

小泉の家では、先代から仏を祭らなかつた。「御靈様」と称みたまさまえて、神棚だけ飾つてあつた。そこへ実は拝さかみに行つた。父忠寛は未だその櫛の蔭に居て、子の遠い旅立を送るかのようにも見える、実は柏かしわ手てを打つて、先祖の靈に別離わかれを告げた。お倉やお俊は主人の膳ぜんを長火鉢の側に用意した。暗い涙は母子の頬ほおを伝いつつあつた。実は一同を集めて、一緒に別離の茶を飲んだ。

復た鶏が鳴いた。夜も白しらじら々明け放れるらしかつた。

「皆な、屋外そとへ出ちや不可いけないよ……家に居なくちや不可いけないよ……」

実は、屋外まで見送ろうとする家のものを制して置いて、独りで門を出た。強い身体と勇気とは猶なお頼めるとしても、彼は年五十を超過こいていた。懷ふところ中には、神戸の方に居るという達雄の宿まで辿りつくだけの旅費しか無かつた。満洲の野は遠い。生きて還ることは、あるいは期し難かつた。こうして雄々しい志を抱いだいて、彼は妻子の住む町を離れて行つた。

お雪は張物板を抱いて屋並に続いた門の外へ出た。三吉は家に居なかつた。町中に射す十月下旬の日をうけて、門前に立掛けて置いた張物板はよく乾いた。 榆<sup>たすき</sup>掛<sup>がけ</sup>で、お雪がそれを取込もうとしていると、めずらしい女の客が訪ねて來た。

「まあ、豊世さん——」

お雪は櫻<sup>さくら</sup>を<sup>はず</sup>した。張物もそこそこにして、正太の細君を迎えた。

「叔母さん、<sup>ほんと</sup>眞実にお久しう振ですねえ」

豊世は入口の庭で言つて、絹の着物の音をさせながら上つた。

久し振の上京で、豊世は叔母の顔を見ると、何から言出して可いか解らなかつた。 坐蒲<sup>ざぶ</sup>團<sup>とん</sup>を敷いて坐る前に、お房やお菊の弔みだの、郷里に居る姑からの言伝だの、夫が来てよく世話に成る礼だのを述べた。

「叔母さん、私もこれから相場師の内儀さんですよ<sup>おかげ</sup>」

と軽く笑つて、豊世は自分で自分の境涯の変遷に驚くという風であつた。

「種ちゃん、御辞儀は？」とお雪は眼を<sup>まる</sup>ぐして來た子供に言つた。  
「種ちゃんも大きく御成なさいましたねえ」

「豊世叔母さんだよ、お前」

「種ちゃん、一寸ちよつと来て御覧なさい。叔母さんを覚えてますか。好い物を進あげますよ」

種夫は人見知りをして、母の背後に隠れた。

「種ちゃん幾歳いくつに成るの?」と豊世が聞いた。

「最早もう、貴方三つに成りますよ」

「早いもんですねえ。自分達の年をとるのは解りませんが、子供を見るとそう思いますわ」  
その時、壁によせて寝かしてあつた乳呑児ちのみごが泣出した。お雪は抱いて来て、豊世に見せた。

「これが今度お出来なすつた赤さん?」と豊世が言つた。「先せんには女の御児さんばかりで  
したが、今度は又、男の御児さんばかり……でも、叔母さんはこんなにお出来なさるから  
宜よう御座んすわ」

「幾ちゃん」とお雪は顧みて呼んだ。

お幾はお雪が末の妹で、お延と同じ学校に入つていた。丁度、寄宿舎から遊びに来た日  
で、客の為に茶を入れて出した。

「先せんによくお目に掛つた方は?」

「愛ちゃんですか。あの人は卒業して国へ帰りました。今に、お嫁さんに成る位です」

「そうですかねえ。お俊ちゃんなどが最早立派なお嫁さんですものねえ」

しばらく静かな山の中に居て单调な生活に飽いて來た豊世には、見るもの聞くものが新しかった。正太も既に一戸を構えた。川を隔てて、三吉とはさ程遠くないところに住んでいた。豊世は多くの希望のぞみを抱いて、姑の傍を離れて來たのである。

その日、豊世はあまり長くも話さなかつた。塩瀬の大将の細君あという人にも逢つて來たことや、森彦叔父の旅舎やどやへも顔を出したことなどを言つた。これから一寸買物して帰つて、早く自分の思うように新しい家を整えたいとも言つた。

「叔母さん、どんなに私は是方こっちへ参るのが樂みだか知れませんでしたよ。お近う御座いますから、復たこれから度々たびたび寄せて頂きます」

こう豊世は優しく言つて、心忙わしそうに帰つて行つた。お雪は張物板を取込みに出た。

暗くなつてから、三吉は帰つて來た。彼は新規な長い仕事に取掛つた頃であつた。遊び

疲れて早く寝た子供の顔のぞを覗きのぞに行つて、それから洋服を脱ぎ始めた。お雪は夫の上衣うわぎなどを受取りながら、

「先刻さつき、豊世さんが被いは入いりしやいましたよ。橋本の姉さんから小鳥を頂きました」

「へえ、そいつは珍しい物を貰つたネ。豊世さん、豊世さんうわせって、よくお前は噂うわさをしていたつけるが。どうだね、あの人の話は」

「私なぞは……ああいう人の傍そばへは寄れない」

「よく交際つきあつて見なけりや解らないサ。なにしろ親類が川の周囲まわりへ集つて来たのは面白い

よ」

三吉は白シャツまで脱いだ。そこへ正太がブラリと入つて來た。芝居の噂うわせや長唄ながうたの会の話なぞをした後で、

「叔父さん、私は未だ御飯前なんです」

こんなことを言出した。その辺へ案内して、初冬らしい夜を語りたいというのであつた。「オイ、お雪、今の洋服を出してくれ。正太さんが飯を食いに行くと言うから、俺おれも一緒に話しに行つて来る」

「男の方というものは、気楽なものですねえ」

お雪は笑つた。三吉は一旦脱いだ白シャツに復た手を通して、服も着けた。正太は紺色の長い絹を襟巻がわりにして、雪踏の音なぞをさせながら、叔父と一緒に門を出た。

「何となく君は兜町の方の人らしく成つたネ。時に、正太さん、君は何処へ連れて行く積りかい」

「叔父さん、今夜は私に任せて下さい。種々御世話にも成りましたから、今夜は私に奢らせて下さい」

こう二人は話しながら歩いた。

町々の灯は歓楽の世界へと正太の心を誘うように見えた。昂つたとか、降つたとか言つて、売つたり買つたりする取引場の喧囂——浮沈する人々の変遷——狂人のような眼——激しく罵る声——そういう混雜の中で、正太は毎日のように刺激を受けた。彼は家にジツとしていられなかつた。夜の火をめがけて羽虫が飛ぶように、自然と彼の足は他の遊びに行く方へ向いていた。電車で、ある停留場まで乗つて、正太は更に車を二台命じた。車は大きな橋を渡つて、また小さな橋を渡つた。

風は無いが、冷える晩であつた。三吉は正太に案内されて、広い静かな座敷へ来て いた。水に臨んだ方は硝子戸<sup>ガラス戸</sup>と雨戸<sup>ガラス戸</sup>が二重に閉めてあつて、それが内の障子の嵌硝子<sup>はめガラス</sup>から寒そ うに透けて見えた。

女中が火を運んで來た。洋服で震えて來た三吉は、大きな食卓の側に火鉢<sup>ひばち</sup>をかか 楽<sup>かか</sup>えて、先ま ず凍えた身体を温めた。

正太は料理を通して置いて、

「それからねえ、姉さん、小金さんに一つ掛けて下さい」

「小金さんは今、彼方<sup>あちら</sup>の御座敷です」

「『先程は電話で失礼』——そう仰つて下されば解ります」

それを聞いて、女中は出て行つた。

「叔父さん、こうして名刺を一枚出しさえすれば、何處へ行つても通ります——塩瀬の店 は今兜町でも売<sup>うれ</sup>子なんですかね」と正太は、紙入から自分の名刺を取出して、食卓の 上に置いて見せた。

正太の話は兜町の生活に移つて行つた。漸く塩瀬の大将に知られて重なる店員の一人と 成つたこと、その為には随分働きもしたもので、他の嫌がる帳簿は二晩も寝ずに整理した

ことを叔父に話した。彼は又、相場師生活の一例として、仕立てたばかりの春衣が仕附糸のまま、年の暮に七つ屋の蔵へ行くことなどを話した。

「そう言えば、今は實に可恐しい時代ですネ」と正太は思出したように、「此頃、私がお俊ちゃんの家へ寄つて、『鶴ちゃん、お前さんは大きく成つたらどんなところへお嫁に行くネ』と聞きましたら——あんな子供がですよ——軍人さんはお金が無いし、お医者さんはお金が有つても忙しいし、美しい着物が着られてお金があるから大きな呉服屋さんへ嫁に行きたいですト——それを聞いた時は、私はゾーとしましたネ」

こんな話をしているうちに、料理が食卓の上に並んだ。小金が来た。小金は三吉に挨拶して、馴々しく正太の傍へ寄つた。親孝行などでも言いそうな、温順しい盛りの年頃の妓だ。

「橋本さん、老松姐さんもここへ呼びましよう——今、御座敷へ来てますから」と言つて、小金は重い贅沢な着物の音をさせながら出て行つた。

土地に居着のものは、昔の深川芸者の面影がある。それを正太は叔父に見て貰いたかつた。こういうところへ来て、彼は江戸の香を嗅ぎ、残つた音曲を耳にし、通人の遺風を楽しもうとしていた。

小金、老松、それから今一人の年増が一緒に興を添えに来た。老松は未だ何処かに色香の名残なまりをとどめたような老妓で、白い、細い、指輪を嵌めた手で、酒を勧めた。

「老松さん、今夜はこういう客を連れて来ました」と正太が言つた。「御馳走ごちそうに何か面白い歌を聞かせて進あげて下さい」

老松は三吉の方を見て、神經質な額と眼とで一寸挨拶ちよつとした。

「どうです、この二人は——何方がどつちこれで年長どじょうえ見えます」と復た正太が言つた。

「老松姐さん、私は是方こちらの方がお若いと思うわ」と小金が三吉を指して見せた。

「私もそう思う」と老松は三吉と正太とを見比べた。

「ホラ——ネ。皆なそう言う」と正太は笑つて、「これは私の叔父さんですよ」是方こちらが橋本さんの叔父さん?」老松は手を打つて笑つた。

「叔父さんは好かつた」と小金と老松の間に居る年増も噴飯ふきだした。

「眞実ほんとの叔父さんだよ」と正太は遮さえぎつてみたが、しかし余儀なく笑つた。

「叔父さん! 叔父さん!」

老松や小金はわざとらしく言つた。皆な三吉の方へ向いて、一つずつ御辞儀した。そして、クスクス笑つた。三吉も笑わずにいられなかつた。

「私の方が、これで叔父さんよりは老けてるとみえる」と正太が言つた。

「小金は肥つた手を振つて、「そんな嘘を吐かなくつても宜う御座んすよ。眞實に、橋本さんは担ぐのがウマいよ」

「叔父さん、へえ、御酌」と老松は銚子を持ち添えて、戯れるように言つた。

「私にも一つ頂かせて下さいな」と年増は寒そうにガタガタ震えた。

電燈は花のよう皆なの顔に映つた。長い夜の時は静かに移り過ぎた。硝子戸の外にある石垣の下の方では、音のしない川が流れて行くらしかつた。老松は好い声で、浮々とさせるような小唄を歌つた。正太の所望で、三人の妓は三味線の調子を合せて、古雅なメリヤス物を弾いた。正太は、酒はあまり遣らない方であるが面長な渋味のある顔をすこし染めて、しみじみとした醉心地に成つた。

「貴方。何かお遣り遊ばせな」と老松が三吉の傍に居て言つた。

「私ですか」と三吉は笑つて、「私は唯こうして拝見しているのが樂みなんです」

老松は冷やかに笑つた。

「叔父さん、貴方の前ですが……ここに居る金ちゃんはネ、ずっと以前にある友達が私に紹介してくれた人なんです……私は未だ浪人していましたろう、あの時分この下の川を蒸

汽で通る度に、是方こつちの方を睨んでは、早く兜町の人に成れたら、そう思い思ひしましたよ  
……

「ヨウヨウ」という声が酒を飲む妓達の間に起つた。

「橋本さん」と老松は手を揉んで、酒が身体からだにシミルという容子ようすをした。「貴方——早く儲けて下さいよ」

次第に周囲あたりはヒツソリとして來た。正太は帰ることを忘れた人のようであつた。叔父が煙草を燻ふかしている前で、正太は長く小金の耳を借りた。

「私には踊れないんですもの」と小金は、終に、他に聞えるように言つた。

酔に乗じた老松の端唄はうたが口くち唇びを衝いて出た。紅白粉べにおしきに浮身やつを棄すもの早ちようら落いたを傷むいたという風で、

「若い時は最早行つて了しまつた」と嘆息するように口くちすさんだ。食卓の上には、妓の為に取寄せた皿もあつた。年増は残つた蒲鉾かまぼこだのキントンだのを引寄せて、黙つてムシャムシヤ食つた。

やがて十二時近かつた。三吉は酔つた甥おいが風邪かぜを引かないようにと女中によく頼んで置いて、ひとりで家まで車を命じた。女中や三人の妓は玄関まで見送りに出た。三吉が車に乘

つた時は、未だ女達の笑声が絶えなかつた。

「叔父さん！　叔父さん！」

すこし話したいことが有る。こういう森彦の葉書を受取つて、三吉は兄の旅舎を訪ねた。二階の部屋から見える青桐の葉はすつかり落ちていた。

「来たか」

森彦の挨拶はそれほど簡単なものであつた。

短く白髪を刈込んだ一人の客が、森彦と相対に碁盤を置いて、煙管を咬えていた。

この人は森彦の親友で、実や直樹の父親などと事業を共にしたことも有る。

「三吉。今一勝負済ますから、待てや。黒を渡すか、白を受取るかという天下分目のところだ」

「失礼します」

こう兄と客とは三吉に言つて、復た碁盤を眺めた。両方で打つ碁石は、二人の長い交際と、近づきつつある老年とを思わせるように、ポツリポツリと間を置いては沈んだ音がし

た。

一石終つた。客は帰つて行つた。森彦は弟の方へ肥つた体躯を向けた。

「葉書の用は他ほかでも無いが、どうも近頃正太のやつが遊び出したそ�だテ。碌に儲けも

しないうちから、最早あの野郎遊びなぞを始めてケツカル」

こう森彦が言出したので、思わず三吉の方は微笑ほほえんだ。

「実は、二三日前に豊世がやつて来てね、『困つたものだ』と言つから俺がよく聞いてみた。なんでも小金という芸者が有つて、その女に正太が熱く成つてゐるそ�だ。豊世の言うことも無理が無いテ。彼女あれが塩瀬の大将に逢つた時に、『橋本さんも少し気を付けて貰わないと——』という心配らしい話が有つたトサ。折角あそこまで漕こぎ着けたものだ。今信用を落しちゃツマラン。『叔父さんからでも注意して貰いたい』こう彼女あれが言うサ」

「その女なら、私も此頃正太さんと一緒に一度逢いました……あれを豊世さんが心配してゐるんですか。そんな危げのある女でも無さそうですがナア。私の見たところでは、お目出度いような人でしたよ」

「復た阿爺おやじの轍てつを履ふみはしないか、それを豊世は恐れてる」

「しかし、兜町の連中なぞは酒席が交際場裏めかけだと言つてゐる。塩瀬の大将だつても妾めが幾

人くたりもあると言う話です。部下のものが飲みに行く位のことは何とも思つてやしないんで  
しょう。大将がそんなことを言いそうちも無い……豊世さんの方で心配し過ぎるんじや有り  
ませんか』

「俺は、まあ、何方どつちだか知らないが——」

「そんなことは放うつちやらかして置いたら可いでしょう。そうホジクらないで……私に言わせ  
ると、何故なぜそんなに遊ゆぶと責めるよりか、何故もつと儲けないと責めた方が可い』

森彦は長火鉢の上で手を揉んだ。

「どうも彼あれは質たちがワルいテ。すこしばかり儲けた錢で、女に貢みつぐ位みつが彼の身しんじょう上あサ。こ  
う見るのに、時々彼が口を開いて、極く安ッぽい笑い方ひとをする……あんな笑い方ひとをする人  
間は直ぐ他に腹の底ひとを見透うわてされて了う……そこへ行くと、橋本の姉わかれわれさんなり、豊世なりだ。  
余程彼よりは上うわて手てだ。吾われわれ儕たまの親類しんるいの中で、彼の細君ほそくみが一番エライと俺は思つてる。細君  
に心配されるような人間は高たかが知しれてるサ』

「ですけれど——私は、貴方が言うほど正太さんを安くも見ていないし、貴方が買つてる  
程には、橋本の姉さんや豊世さんを見てもいません。丁度姉さんや豊世さんは貴方が思  
ような人達です。しかし、あの人達は自分で自分を買過ぎてやしませんかネ』

「そうサ。自分で高く買かい被かぶつてるようなどころは有るナ」  
兄は弟の顔をよく見た。

「女の方の病気さえなければ、橋本父子おやこに言うことは無い——それがあの人達の根本の思おおね想おもです。だから、ああして女の関係ばかり苦にしてる。まだ他に心配して可いことが有りやしませんか。達雄さんが女に弱くて、それで家を捨てるようになつた——そう一途いちずにあの人達は思い込んで了うから困る」

兄は、弟が来て、一体誰に意見を始めたのか、という眼付をした。

「しかし」と三吉はすこし萎しおれて、「正太さんも、仕事をするという質たちの人では無いかも知れませんナ」

「彼が相場で儲けたら、俺は御目に懸りたいよ」

「ホラ、去年の夏、近松の研究が有りましたあネ。丁度盆の芝居でしたサ。あの時は、正太さんも行き、俊も延も行きました。博多はかた小女郎こじょろう浪枕なみまくら。私はあの芝居を見物して帰つて来て、復た淨瑠璃じょうるり本を開けて見ました。宗七むねしちという男が出て来ます。優美慇いんぎん懃いんなあの時代の浪華趣味なにわを解するような人なんです。それでいて、猛烈な感情家おほでサ。長崎までも行つて商売をしようという冒險な氣風を帶びた男でサ。物に溺おぼれるなんてことも、極端

まで行くんでしょう……何処かこう正太さんは宗七に似たような人です。正太さんを見る度に、私はよくそう思い思います——」

「彼の阿爺おやじが宗七だ——彼は宗七第二世だ」

兄弟は笑出した。

「それはそうと、俺の方でも呼び寄せて、彼によく言つて置く。細君を心配させるようなことじや不可いかんからネ。お前からも何とか言つて遣やつてくれ」と森彦が言つた。

「去年の夏以来、私は意見をする権利が無いとつくづく思つて来ました」と三吉は意味の通じないようなことを言つて、笑つて、「とにかく、謹み給え位のことは言つて置きましょうう」

遠く満洲の方へ行つた実の噂、お俊の縁談などをして、弟は帰つた。

正太は兜町の方に居た。塩瀬の店では、皆な一日の仕事に倦うんだ頃であつた。テ工ブルの周囲に腰掛けるやら、金庫の前に集るやらして、芝居見物の話、引幕の相談などに疲勞つかれを忘れていた。煙草のけぶりは白い渦を巻いて、奥の方まで入つて行つた。

土蔵の前には明るい部屋が有つた。正太は前に机を控えて、幹部の人達と茶を喫んでいた。小僧が郵便を持つて來た。正太宛だ。三吉から出した手紙だ。家の方へ送らずに、店に宛てて寄すとは。不思議に思いながら、開けて見ると、内には手紙も無くて、水天宮の護符まもりふだが一枚入れてあつた。

正太はその意味を読んだ。思わず拳こぶしを堅めてペン軸の飛上るほど机をクラわせた。

「橋本君、そりや何だネ」と幹部の一人が聞いた。

「こういう訛サ」正太は下口唇を噛みながら笑つた。「昨日一人の叔父が電話で出て来い」というから、僕が店から帰りがけに寄つたサ。すると、例の一件ネ、あの話が出て、可恐おそろしい御目玉を頂戴した。この叔父の方からも、いずれ何か小言が出る。それを僕は予期していた。果してこんなものを送つて寄した」

「何の洒落しゃれだい」

「こりや、君、僕に……溺死できしするなどいう謎なぞだネ」

「意見の仕方にもいろいろ有るナア」

幹部の人達は皆な笑つた。

その日、正太は種々な感慨に耽ふけつた。不取敢とりあえず叔父へ宛てて、自分もまた男である、素

志を貫かずには置かない、という意味を葉書に認めた。仕事をそここにして、横手の格子口から塩瀬の店を出た。細い路地の角のところに、牛乳を温めて売る屋台があつた。正太はそれを一合ばかり飲んで、電車で三吉の家の方へ向つた。

叔父の顔が見たくて、寄ると、丁度長火鉢の周囲にまわり皆な集つていた。正太は叔父の家で、自分の妻とも落合つた。

「正太さん、妙なものが行きましたろう」

と三吉は豊世やお雪の居るところで言つて、笑つて、他の話に移ろうとした。豊世は叔父と相対の席を夫に譲つた。自分の敷いていた座蒲団を裏返しにして、夫に勧めた。

「叔父さん、確かに拝見しました」と正太が言つた。「私から御返事を出しましたが、それは未だ届きますまい」

豊世は夫の方を見たり、叔父や叔母の方を見たりして、「私は先刻さつきから来て坐り込んでいます……ねえ叔母さん……何か私が言うと、宅は直ぐ『三吉叔父さんの許へ行つて聞いて御覧』なんて……」

こんな話を、豊世も諄くはしなかつた。彼女は夫から巻煙草を貰つて、一緒に睦まじそくうに吸つた。

「バア」

三吉は傍へ来た種夫の方へ向いて、可笑おかしな顔をして見せた。

「叔母さん、私も子供でも有つたら……よくそう思いますわ」と豊世が言つた。

「豊世さんの許でも、御一人位御出来に成つても……」とお雪は茶を入れて款待しながら。

「御座いますまいよ」豊世は萎しおれた。

「医者に診みて貰つたら奈いかが何いかがです」と言つて、三吉は種夫を膝の上に乗せた。

「宅では、私が悪いから、それで子供が無いなんて申しますけれど……何どつち方が悪いか知れやしません」

「俺は子供が無い方が好い」と正太は何か思出したように。

「あんな負惜みを言つて」

と豊世が笑つたので、お雪も一緒に成つて笑つた。

豊世は一步先ひとあしきへ帰つた。正太は叔父に隨いて二階の樓梯はしじこだんを上つた。正太は三吉から受取つた手紙の礼を言つた後で、

「豊世なぞは解らないから困ります。そりや芸者にもいろいろあります。ミズの階級も有ります。しかし、叔父さん、土地で指でも折られる位のものは、そう素しろうと人が思うような

ものじや有りません。あの社会はあの社会で、一種の心意氣というものが有ります。それが無ければ、誰が……教育あり品性ある妻を置いて……」

「いえ、僕はネ、君が下宿時代のことを忘れさえしなけりや——」

「難有う御座います。あの御守は紙入の中に入れて、こうしてちゃんと持つてます。今日は大に考えました」

こう言つて、正太は激昂した眼付をした。彼は、眞面目でいるのか、不眞面目でいるのか、自分ながら解らないように思つた。「とにかく肉的なと言つたら、私は素人の女の方がどの位肉的だか知れないと想います……」こんなことまで叔父に話して、微笑んで見せた。

「正太さん、何故君はそんなに皆ながら心配されるのかね」

「どうも……叔父さんにそう聞かれても困ります」

「世の中には、君、随分仕たいことを仕ていながら、そう心配されない人もあります。君のようにヤイヤイ言われなくとも可さうなものだ……何となく君は危いような感じを起させる人なんだネ」

「それです。塩瀬の店のものもそう言います——何処か不安なところが有ると見える——

こりや大に省みなけりや不可ぞ

その時、お雪が階下から上つて来て声を掛けた。

「父さん、※が見えました」

親戚の客があると聞いて、正太は叔父と一緒に二階を下りた。

「正太さん、この方がお福さんの旦那さんです」

商用の為に一寸上京した勉を、三吉は甥に紹介した。勉は名倉の母からの届け物と言つて、鰯、数の子、鰆、鰯節などの包をお雪の方へ出した。

大掃除の日は、塵埃を山のように積んだ荷馬車が三吉の家の前を通り過ぎた。豈を叩く音がそこここにした。長い袖の着物を着て往来を歩くような人達まで、手拭を冠つて、煤と埃の中に寒い一日を送つた。巡査は家々の入口に検査済の札を貼付けて行つた。

早く暮れた。お雪は汚れた上掩を脱いで、子供や下婢と一緒に湯へ行つた。改まつたような心地のする畳の上で、三吉はめずらしく郷里から出て来た橋本の番頭を迎えた。今御新造さん（豊世）が買物に行くと言つて、そこまで送つて来てくれました。久し振

で東京へ出たら、サツパリ様子が解りません」

こう番頭が言つて、橋本の家風を思わせるような、行儀の好い、前垂を掛けた膝を長火鉢の方へ進めた。

番頭は幸作と言つた。大番頭の嘉助が存命の頃は、手代としてその下に働いていたが、今はこの人が薬方を預つて、一切のことを切り盛りしている。旧い橋本の家はこの若い番頭の力で主に支えられて來たようなもので有つた。幸作は正太よりも年少であった。

黒光りのした大黒柱なぞを見慣れた眼で、幸作は煤掃した後の狭細い町家の内部を眺め廻した。大旦那の噂が始まつた。郷里の方に留守居するお種——三吉の姉——の話もそれに連れて出た。

「どうも大御新造（お種）の様子を見るに、大旦那でも歸つて來てくれたら、そればかり思つておいでなさる。もうすこし安心させるような工夫は無いものでしようか」

世辞も飾りも無い調子で、幸作は主人のことを案じ顔に言つた。姉の消息は三吉も聞きたいと思つていた。

「姉さんは、君、未だそんな風ですかネ」

「近頃は復<sup>ま</sup>た寝たり起きたりして——」

「困るねえ」

「私も実に弱つて了しましました。今更、大旦那を呼ぶ訳にもいかず——」「達雄さんが帰ると言つて見たところで、誰も承知するものは無いでしょう。僕も実に気の毒な人だと思つています……ねえ、君、実際氣の毒な……と言つて、今ここで君等が生まやさ優しい心を出してみ給え、達雄さんの為にも成りませんやね」

「私も、まあそう思つています」

「よくよく達雄さんも窮つて——病氣にでも成るとかサ——そういう場合は格別ですが、下手なことは見合せた方が可いネ」

「大御新造がああいう方ですから、私も間に入つて、どうしたものかと思ひまして——」「こう薬の手伝いでもして、子のことを考えて行くような、沈着いた心には成れないものですかねえ。その方が可いがナア」

「そういう氣分に成つてくれると 難有いんですけれど」

「姉さんにそう言つてくれ給え——もし達雄さんが窮つて来たら、『窮るなら散々御窮りなさい……よく御考えなさい……是処は貴方の家じや有りません』ツて。もし眞実に達雄さんの眼が覚めて、『乃公はワルかつた』と言つて詫びて来る日が有りましたら、その時

は主人公の席を設けて、そこで始めて旦那を迎えたなら可いでしようツて——

幸作は深い溜息ためいきを吐いた。

「實に妙なものです。ここは私も一つ躊躇ふんばらんけりや不可いがん、と思つて、大御新造の前では強いことを言つていますが……時々私は夢を見ます。大旦那が大黒柱に倚凭よりかかつて、私のことを『幸作!』と呼んでいるような——あんなヒドイ目に逢いながら、私はよくそういう夢を見ます。すると、眼が覚めた後で、私はどんな無理なことでも聞かなければ成らないような気がします……」

こう話しているところへ、お雪が湯から帰つて來た。三吉は妻の方を見て、

「オイ、幸作さんから橋本の薬を頂いたぜ」

「毎度子供の持薬に頂かせております」

とお雪は湯上りのすこし逆上のぼせたような眼付をして、礼を言つた。

幸作の話は若旦那のことに移つた。小金の噂うわさが出た。彼は正太の身の上をも深く案じ顔に見えた。

「実は御新造さんから手紙が来て、相談したいことが有ると言うもんですから、それで私も名古屋の方から廻つて來ました」

「へえ、その為に君は出て来たんですか。そんなに大騒ぎしなくても可いことでしよう。

豊世さんもあんまり氣を揉み過ぎる」

「何ですか心配なような手紙でしたから、大御新造には内証で」

「そう突き散らかすと、反つていけませんよ」

その晩、幸作は若旦那の方へ寝に行つた。

復たボカボカする季節に成つた。三吉が家から二つばかり横町を隔てた河岸のところには、黄緑な柳の花が垂下つた。石垣の下は、荷舟なぞの碇泊する河口で、濁つた黒ずんだ水が電車の通る橋の下の方から春らしい欠伸をしながら流れて來た。

この季節から、お菊やお房の死んだ時分へかけて、毎年のように三吉は頭脳が病めた。子を失うまでは彼もこんな傷みを知らなかつたのである。半ば病人のような眼付をして、彼は柳並木の下を往つたり來たりした。白壁にあたる温かい日は彼の眼に映つた。その焦々と萌え立つような光の中には、折角彼の始めた長い仕事が思わしく果取らないというモドカシさが有つた。稼ぎに追われる世帯持の悲しさが有つた。石垣に近く漕いで通る

船は丁度彼の心のように動搖した。

三吉は土蔵の間にある細い小路の一つを元来た方へ引返して行つた。彼はこういう小路だけを通り抜けて家まで戻ることが出来た。

お俊の母親が彼を待受けていた。

「姉さんが先刻から被入つて、貴方を待つてますよ」

とお雪は長火鉢の傍で言つた。煙草を吸付けて、それを嫂にすすめていた。

金の話はとかく親類を気まずくさせた。それに仕事の届託で、髪も刈らず鬚も剃らず、寝起のように憂鬱な三吉の顔を見ると、お倉は言おうと思うことを言い兼ねた。不幸な嫂の話は廻りくどかつた。

「畢竟、先方の家では宗さんの世話が出来ないと言うんですか」

こう言つて三吉は遮つた。

「いえ、そういう訳じや無いんですよ」とお倉は寂しそうに微笑みながら、「先方だつてもあの通り遊んでいるもんですから、世話をしたいは山々なんです。なにしろ手の要る人ですからねえ。それに物価はお高く成るばかりですし……」

復た復たお倉の話は横道の方へ外れそのうので、三吉の方では結末を急ぐとした。

「あれだけ有つたら、いきそなものですがナア」

「そこですよ。もう二円ばかりも月々増して頂かなければ、御世話が出来かねるというんです」

「姉さん、どうです」と三吉は串談のじょうだんのように、「貴方の方で宗さんを引取つては。私の方から毎月の分を進げるあとしたら、その方が反かえつて経済じや有りませんか」

「真平」とお倉は瘦細やせほそつた身体を震わせた。「宗さんと一緒に住むのは、死んでも御免だ」

傍に聞いているお雪も微笑んだ。

病身な宗藏は、実の家族から、「最早お目出度く成りそなもの」と言われるほど厄介に思われながら、未だ生きていた。実の出発後は、三吉がこの病人の世話料を引受けて、月々お俊の家へ渡していた。どんなに三吉の方で頭脳あたまの具合の悪い時でも、要るだけのものは要つた。無慈悲な困窮は迫るように実の家族の足を運ばせた。

「折角、姉さんに来て頂いたんですけれど、今日は困りましたナア」

と三吉は額に手を宛てた。とにかく、増額を承諾した。金は次の日お俊に取りに来るようとに願つた。

お俊が縁談も出た。

「御蔭様で、結納も交換しました。これで、まあ私もすこし安心しました」

とお倉はお雪の方を見て言つた。

この縁談が纏まるにつけても、お俊の親に成るものは森彦と三吉より他に無かつた。森彦の発議で、二人はお俊の為に互に金を出し合つて、一通りの結婚の準備をさせることにした。

「姉さん、まあ御話しなすつて下さい。私は多忙しい時ですから一寸失礼します」

こう言い置いて、三吉は二階の部屋へ上つて行つた。

仕事は碌に手につかなかつた。三吉が歩きに行つて来た方から射し込む日は部屋の障子に映つた。河岸の白壁のところに見て来た光は、自分の部屋の黄ばんだ壁にもあつた。それを眺めていると、仕事、仕事と言つて、彼がアクセクしていることは、唯身内の者の為に苦労しているに過ぎないかとも思わせた。

「一寸俺は用達に行つて来る。着物を出してくんナ」

三吉は二階から下りて来て、身仕度を始めた。お倉は未だ話し込んでいた。お雪は白足袋の洗濯したのを幾足か取出して見、  
 「一二度外へ行つて来ると、もうそれは穿かないんですから、幾足あつたつて堪りませんよ」

こんなことを言つて笑いながら、中でも好さそうなのを押つて夫に渡した。三吉は無造作に綴合せた糸を切つて、縮んだ足袋を無理に自分の足に填めた。

「姉さん」と三吉はコハゼを掛けながら、「満洲の方から御便は有りますか」

「ええ、無事で働いておりますそうです——皆さんにも宜しく申上げるようにつて先頃も手紙が参りました」

「ウマくやつてくれるに可う御座んすがナア」

「さあ、私もそう思つています」

「まだ家の方へ仕送りをするといふところまでいきませんかネ」

「どうして……でも、まあ彼方に親切な方が有りまして、よく見て下さるそうです」

頼りないお倉は「親切な」という言葉に力を入れ入れした。嫂を残して置いて、三吉は家を出た。

森彦は旅舎の方に居た。丁度弟が訪ねて行つた時は、電話口から二階の部屋へ戻つたところで、一寸手紙を書くからと言ひながら、机に對つていそがしそうに筆を走らせた。やがてその手紙を読返して見て、封をして、三吉の方へ向くと同時に手を鳴らした。

「これは急ぎの手紙ですから、直に出して下さい」

と森彦は女中に言附けて置いて、それから弟の顔を眺めた。

「今日はすこし御願が有つてやつて来ました」

こういう三吉の意味を、森彦は直に読むような人であつた。「まあ、待てよ」と起上つて、戸棚の中から新しい菓子の入つた罐を取出した。

「貴方の方で宗さんの分を立替えて置いて頂きたいもんですがナア」と三吉は切出した。

「ホ、お前の方でもそうか」と森彦は苦笑して、「俺は又、お前の方で出来るだらうと思つて、未だお俊の家へは送れないでいるところだ——困る時には一緒だナア」

二人の話は宗蔵や実の家の噂に移つて行つた。

「ほんと、宗蔵の奴は困り者だよ。人間だからああして生きていられるんだ。これがもし獣でも御覧、あんな奴は疾に食われて了つてるんだ」

「生きたくないと思つたつて、生きるだけは生きなけりや成りません……宗さんのも苦し

い生活ですネ」

「いえ、第一、彼奴あいつの心得方が間違つてゐるサ。廃人なら廃人らしく神妙にして、皆なの言  
うことに従わんけりや成らん。どうかすると、彼奴は逆さかねじ捩ねじを食わせる奴だ……だから世  
話の仕手も無いようなことに成つて了う」

「一体、吾儕われわれがこうして——殆んど一生掛つて——身内のものを助けているのはそれが  
果して好い事か悪い事か、私には解らなく成つて來ました。貴方なぞはどう思いますネ」

森彦は黙つて弟の言ふことを聞いていた。

「吾儕われわれが兄弟の為に計つたことは、皆な初めに思つたことは違つて來ました。俊を学校  
へ入れたのは、彼女に独立の出来る道を立ててやつて、母親おつかさんを養わせる積りだつたん  
でしよう。ところが、彼女は学校の教師なぞには向かない娘に育つて了いました。姉さん  
だつてもそうでしよう、弱い弱いで、可傷いたわられるうちに、今では最早眞實ほんとに弱い人です。

吾儕われわれは長い間掛つて、兄弟に倚よりかかることを教えたようなものじや有りませんか……名倉  
の阿爺おやじなぞに言わせると、吾儕われわれが兄弟を助けるのは間違つてゐる。借金しても人を助けるな  
んて、そんな法は無いというんです」

「むむ、それも一理ある」と森彦は快活な声で笑出した。

「確かに、阿爺さんのは強い心

から来ている。それが阿爺さんをして名倉の家を興させた所以ゆえんでもある。確かに、それは一つの見方に相違ない。が、俺は俺で又別の見方をしている。こうして十年も旅舎に寝転ねころんで、何事をなに為てるんだか解らない人だと世間から思われても、別に俺は世間の人に迷惑を掛けた覚は無し、兄貴のところなぞから鑑ひた一文でも貰つて出たものでは無いが、それでもああして俊の家を助けている——俺は俺の為ることを為てる積りだ

「これがネ、一月や二月なら何でもないんですが、長い年月の間となると、随分苦しい時がありますネ」

「いや、どうして、ナカナカ苦しい時があるよ」

兄の笑声に力を得て、三吉は他に正面する積りで起上つた。何のかんのと言つて見たところで、弱い人達が生きている以上は、どうしてもそれを助けない訳にいかなかつた。

「食わせてくれば食うし、食わせてくれなければそれまで」と言つたような、宗蔵の横に成つた病躯からだには実に強い力が有つた。

「そうかい。折角来たのに御氣の毒でした」

と森彦は弟を見送りに出て言つた。

お俊は三吉叔父の家をさして急いで來た。未來の夫としてお俊が選んだ人は、丁度彼女と同じような旧家に生れた壯年わがものであつた。ふとしたことから、彼女はその爽快そうかいで沈着な人となりを知るようになつたのである。この縁談が、結納とりかわを交換こうかんすまでに運ぶには、彼女は一通りならぬ苦心を重ねた。随分長い間かかつた。一旦談が絶えた。復た結ばれた。その間には、叔父達は早くキマリを付けさせようとばかりして、彼女の心を思わないようなことが多かつた。「どうでも叔父さん達の宜しいように」こう余儀なく言い放つた場合にも、心にはこの縁談の結ばれることを願つたのであつた。

三吉叔父の矛盾した行為おこないには、彼女を呆れさせることが有る。叔父は一度、ある演壇へあの体躯からだを運んだ。その時はお延も一緒で、婦人席に居て傍聴した。叔父が「女も眼を開いて男を見なれば不可いけない」と言つたことは、未だ忘れずにある。その叔父が姪めいの眼を開くことはどうでも可いような仕向むきが多かつた。叔父は自分に都合の好いような無理な注文ばかりした。

小泉の家の零落——それがお俊には唯悲しかつた。それを思うと、涙が流れた。

叔母のお雪は門のところに居た。種夫を背中に乗せて樂隊の通るのを見せていた。

「種ちゃん、おんぶで好う御座んすね」

こう言つて、お俊は叔母と一緒に家の内へ入つた。

三吉は二階で仕事を急いでいた。お俊が樓梯<sup>はしごだん</sup>を上つて、挨拶に行くと、急に叔父は厳格に成つた。

「叔父さん、昨日は母親<sup>おつか</sup>さんが上りまして——」

とお俊は手を突いて言つた。

「オオ、お前が来るだろうと思つて、待つていた。まあ、是方<sup>こつち</sup>へお入り」

お俊の前に堅く成つて坐つている三吉は、楽しい一夏を郊外で一緒に送つた頃の叔父とは別の人のようで有つた。よく可笑<sup>おかし</sup>な顔付をして、鼻の先へ皺<sup>しわ</sup>を寄せたり、口唇<sup>くちびる</sup>を歪めたりして、まるで古い能の面にでも有りそうなトボケた人相をして見せて、お俊やお延を笑わせたような、そんな忸<sup>なれなれ</sup>々<sup>々々</sup>しさは見られなかつた。

三吉は自分でもそれに気がついていた。お俊と相<sup>さしむかい</sup>対に成ると、我知らず道徳家めいた口調に成ることを、深く羞<sup>は</sup>じていた。そして、言うことが何となく虚偽<sup>うそ</sup>らしく自分の耳にも響くことを、心苦しく思つていた。不思議にも、彼はそれをどうすることも出来なかつた……お俊の結婚に就いても、もつとユツクリした気分で、こうしたら可かろうとか、

ああしたら可かろうとか、種々話してやりたいと心に思つていた。妙に口へ出て来なかつた……唯……「叔母さんの留守に、叔父さんは私の手を握りました——」と人に言われそなうな気がして、お俊の顔を見ると何事も言えなかつた。どんな為になることを言つても、為ても、皆なその一点に打消されて了うような氣もした。三吉は心配して作つて置いた約束の金を取出した。苦しむ獸のような目付をして、それを姪の前に置いた。

「何故、叔父さんはこうだらう……」

とお俊は自分で自分に言つてみて、宗蔵の世話料を受取つた。

長くも居られないような気がして、お俊は一寸礼を述べて、やがて階下へ下りた。

お雪の居る部屋には、仕事が一ぱいにひろげてあつた。叔母は長火鉢のところで茶を入れて、キヌカツギなぞを取出しながら、姪と一緒に上野や向島の噂をした。

「父さん、御茶が入りました」

とお雪は樓梯の下から声を掛けたので、三吉も下りて來た。三人一緒に成つてからは、三吉も機嫌を直した。叔母や姪は睦まじそうに笑つた。

何処までもお俊は氣をタシカに持つて、言うことだけは叔父に言つて置こうという風で、「叔父さん——昨日母親さんに御話が有つたそうですが、宗蔵叔父さんと一緒に成ること

は御断り申します」

と帰りがけに、口惜しそうに言つた。

三吉は苦笑した。腹の中<sup>おなか</sup>で、「なにも俺は、無理に一緒に成れと言つたんじや無いんだ——串<sup>じょうだん</sup>談<sup>と</sup>半分に、一寸そんなことを言つて見たんだ——お前達はそう釈<sup>と</sup>つて了<sup>と</sup>うから困る」、こうも思つたが、あまりお俊にキッパリ出られたので、それを言う氣に成らなかつた。

姪が帰つて行つた後で、三吉は深い溜息<sup>ためいき</sup>を吐いた。

「何故、俊はああだろう」

とお雪に言つて見た。叔父の心は姪に解らず、姪の心は叔父に解らなかつた。

不意な出来事が実の留守宅に起つた。お鶴を病院へ入れなければ成らない。この報知<sup>しらせ</sup>を持つて、お延は三吉の家へ飛んで來た。不図した災難<sup>もと</sup>が因で、お鶴は発熱するようになつたのであつた。

間もなくお鶴は病院の方へ運ばれた。一週間ばかり煩<sup>わざら</sup>つた後で、脳膜炎で亡くなつた。

河岸の柳の花も落ち始める頃、三吉は不幸な娘の為に通夜をする積りで、お俊の家をさして出掛けた。お雪も、子供を下婢に托して置いて、夫よりは一歩先に出た。

親戚は実の留守宅へ集つて来た。森彦、正太夫婦を始め、お俊が父方の遠い親戚とか、母方の縁者とか、そういう人達まで弔みを言い入れに来た。混雜したところへ、丁度三吉も春先の泥をこねてやつて来た。「鶴ちゃんも、可哀そうなことをしましたね」こういふ言葉が其処にも是処にも交換された。台所の方には女達が働いていた。

「こここの家は神葬祭だネ。禰宜様を頼まんけりや成るまい」と森彦はお倉の方を見て言つた。

「宗さんの旧い歌仲間で、神主をしてる人があります」とお倉が答えた。「母親さんの生きてる時分には、よくその人を頼んで来て貰いました」

「よし。では、正太は気の毒だが、その禰宜様のところへ行つて来てくれや」

「正太さん、僕も一緒に行きましょ」と三吉は甥の側へ寄つた。

遠い神主の寓居の方から、三吉、正太の二人が帰つて来た頃は、近い親戚のものだけ残つた。お倉は取るものも手に着かないという風で、唯もう狼狽していた。お俊は一人で氣

を揉んだ。会計も娘が預つた。

「お雪」と三吉が声を掛けた。「お前は今日は御免蒙つたら可かろう」「叔母さん、何卒御帰りなすつて下さい」とお俊が言つた。

奥に机を控えていた森彦は振向いた。「そうだ。子持は帰るが可い。俺もこの葉書を書いたら、今日は帰る……通知はなるべく多く出した方が可いぞ……俊、もつと葉書を出すところはないか。郷里の方からもウント香典を寄して貰わんけりや成らん」死んだ娘の棺を側に置いて、皆な笑つた。

暮れてから、通夜をする為に残つた人達が一つどころへ集つた。豊世は正太の傍へ行つて、並んで睦まじそうに坐つた。

「世間の評判では、僕は細君の尻に敷かれてるそうだ」

こう正太は当つてつけがましいことを言つて、三吉やお倉の方を見ながら笑つた。豊世は俯向いて、萎れた。

お倉は娘の棺の方へ燈明の油を行つた。復た皆なの方へ戻つて来て、

「正太さんの所でも御越しに成つたそうですネ」

「ええ」と正太は受けて、「叔母さんも御淋しく成りましたろうから、ちと御話に被入つ

て下さい。今度は三吉叔父さんと同じ川の並びへ移りました

「三吉叔父さんは一度被入つて下さいました」と豊世がお倉に言つた。

「今度の家は好いよ」と三吉は正太を見て、「第一、川の眺望が好い」

「延ちゃんも姉さんと一緒に遊びにお出」と正太は娘達の方を振向いた。

土器の燈明は、小泉を継がせる筈のお鶴の為に、最後の一点の火のよう<sup>は</sup>に燃つた。お倉は、この名残<sup>なごり</sup>の住居で、郷里<sup>くに</sup>の方にある家の旧い話を始めた。弟、娘、甥、姪などの視線は、過去つた記憶を生命<sup>いのち</sup>としているような不幸な婦<sup>おんな</sup>の方へ集つた。

お倉はよく覚えていた。家を堅くしたと言われる祖父が先代から身上<sup>しんじょう</sup>を受取る時には、銭箱に百文と、米蔵に二俵<sup>たくわ</sup>の貯えしか無かつた。味噌蔵も空であつた。これでどうして遣<sup>や</sup>つて行かれると祖父祖母が顔を見合せた時に、折よく大名が通りかかつて、一夜に大勢の客をして、それから復た取り付いた。こんな話から始めて、街道一と唄<sup>うた</sup>われた美しい人が家に生れたこと、その女の面影をお倉もいくらか記憶していることなどを語り聞かせた。

「へえ、叔母さんは眞<sup>ほん</sup>實に覚えが好い」と正太も昔懷<sup>なつか</sup>しい眼付をした。

お倉の話は父忠寛の晩年に移つて行つた。狂死する前の忠寛は、眼に見えない敵の為に悩まされた。よく敵が責めて来ると言ひ言ひした。それを焼払おうとして、ある日寺院の

障子に火を放つた。親孝行と言われた実も、そこで拠なく観念した。村の衆とも相談の上、父の前に御辞儀をして、「子が親を縛るということは無い筈ですが、御病氣ですから許して下さい」と言つて、後ろ手にくくし上げた。それから忠寛は木小屋に仮に造つた座敷牢ろうを前にして、前手には池があつた。そこは裏の米倉の隣りで、大きな竹敷たけやふを後にして、前手には池があつた。日頃一村の父のように思われた忠寛のことで、先生の看護と言つて、村の人々はかわるがわる徹夜で勤めに來た。附添に居た母の座敷は、別に畳を敷いて設けた。そこから飲食する物を運んだ。どうかすると、父は格子のところから母を呼んだ。「ちよつとは是処へ来さつせ」と油断させて置いて、母の手のちぎれる程引いた。薄暗い座敷牢の中で、忠寛の仕事は空想の戦を紙の上に描くことで有つた。さもなければ、何か書いてみることであつた。忠寛は最後まで国風こくふうの歌に心を寄せていた。ある時、正成の故事に倣つて、糞合くそがつ戦せんを計画した。それを格子のところで実行した。母も、親戚も、村の人も散々な足利勢あしかがぜであつた……。

皆な笑い出した。

「私は阿爺おとうさんの亡くなる時分のことをよく知りません。御蔭で今夜は種々なことを知りました」と三吉は嫂に言つた。「あれで、阿爺さんは、平素ふだんはどんな人でしたかネ」

「平素ですか。癪かんさえ起らなければ、それは優しい人でしたよ。宗さんが、貴方、子供の時分と来たら、ワヤク（いたずら）なもんで、よく阿爺さんにお灸きゅうをすえられました……阿爺さんはもう手がブルブル震えちまつて、『これ、誰か来て、早く留めさつせれ』なんて……それほど気の優しい、目下のものにも親切な人でしたよ」

「種々なことを聞いて見たいナア。ああいう気性の阿爺さんですから、女のことなどはサッパリしていましたろうネ」

「ええ、ええ、サッパリ……でも、癪の起つた時などは、どうかするとお末が母親さんや私達の方へ逃げて来ましたよ……お末という下婢おんなが家に居ましたあね」

「へえ、阿爺さんのような人でもそんなことが有りましたか」

三吉は正太と顔を見合せた。誰かクスクス笑つた。

その晩は、三吉、正太夫婦などが起きていて、疲れた親子を横に成らせた。お倉は、遠い旅にある夫、他よそへ嫁かたづく約束の娘、と順に考えて、寝ても寝られないという風であつた。心細そうに、お俊の方へ身体を持たせ掛けた。

「鶴ちゃんが死んで了えば、私はもう誰にも掛るものが無い——眞實ほんとに、一人ぼっち」「母親さん、そんなことを言うもんじや無くつてよ」

「ヤア、ヤア——どうも御苦勞様でした」

お鶴の葬式が済んだ後で、三吉は正太を自分の家へ誘つて來た。一緒に二階の部屋へ上つた。

お雪は夫の好きな茶を入れて持つて來た。障子を開けひろげて、三吉は正太と相対しに坐つた。

「叔母さん、すこし吾家も片付きました。ちと何卒被入つて下さい。經師屋を頼みまして、二階から階下まですっかり張らせました」

「正太さんの今度の御家は大層見晴しが好いそうですネ」

「ええ、まあ川はよく見えます。そのかわり蛻の多いところで、これには驚きました。飼つた痕が銀色して光っています。なんでもあの辺から御宅あたりへ掛けて、蛻が名物ですトサ……叔父さんも何卒復たお近いうちに……御宅から吾家までは、七八町位のものですから、運動かたがた歩いて被入しやるには丁度好う御座んす」

夕日は部屋の内に満ちて來た。河岸の方から町中へ射し込む光線は、屋根と屋根の間を

折れ曲つて、ある製造場の高い硝子<sup>ガラス</sup>を燃えるように見せた。お雪は縁側へ出て町の空<sup>なが</sup>を眺めたが、やがて子供の泣声を聞いて、階下<sup>した</sup>へ下りて行つた。

「正太さん、女達の間に一つ問題が持上つて います。兄貴の家も妙なことに成りましたろう。娘があつても、後を継がせるものが無い。俊が嫁に行つて了えれば、もうそれツッきりと いうことに成つて來た。鶴に養子をする——そのつもりで兄貴も出て行つたんです。鶴が 居なく成つた。俊はどうしたものか。私なら親の方に残るという説と、私はお嫁に行つて も差<sup>さしつかえ</sup>支<sup>かえ</sup>ないと思うという説と、女達の間に問題に成つて いるんです」

「私も婚約を破るということは、不賛成です。結納でも 交換<sup>とりかわ</sup>してなければ格別、交換してある以上は、無論これは夫婦にすべきものと思 います」

「僕も、まあそう思 うがネ」

「叔父さん、お俊ちゃんの方が先へお嫁に行つたと思つて御覧なさい。後で鶴ちゃんが死んだとしましよう。どうすることも出来ないじや有りませんか」

「当人同志の意志を重んじなけりや成らんネ。俊もウマクやつてくれると可いがナ。これで、君、俊が嫁に行き、鶴が死に……でしよう。これから兄貴がどう 盛<sup>もりかえ</sup>返すか知らんが——長い歴史のある小泉の家は、先ず事實に於いて、滅びたというものだネ」

しばらく一人は、夕日を眺めて、黙つて相対していた。

「正太さん、君なり、僕なり、俊なりは……言わば、まあ旧い家から出た芽のようなものさネ。皆な芽だ。お互に思い思いの新しい家を作つて行くんだネ」

「どうかすると、橋本の家は私おしまいで終おしまに成るかも知れないぞ」

正太は考深い眼付をした。

「旧い人は駄目だなんて、言つたつて……新しい時代の人だつて、たのみがい頼甲妻たのみがいがあるとは言  
われないネ」

「ナカナカ」

その時、種夫はしごだんが一生懸命に樓梯はしごだんにつかまつてノコノコ階下しだから上つて來た。ヒヨツ  
コリ頭たのみがいを出したので、三吉は子供たのみがいの方へ起たつて行つた。

「オイ、お雪、危いねえ」と三吉は階下へ聞えるように怒鳴つた。

「種ちゃんはもう、すんすんひとりで上るんですもの」とお雪は階下から答えた。

「なんだか危くつて仕様がない。早く来て、連れておいで」

「種ちゃんいらツしやい」

「ア、到頭上つて来ちやつた」

と正太も種夫の方を見て笑つた。

そのうちに暮れかかつて來た。町々の屋根は次第に黃昏時の空氣の中へ沈んで行つた。製造場の硝子戸には、未だ僅かに深い反射の色が残つた。下婢は階下から洋燈を持って上つて來た。三吉はマツチを摺つた。二階には燈火があかりがついた。正太はそれを眺めて、自分の家の方でも最早燈火が点いたかと思つた。

## 六

橋本のお種が娘お仙を連れて上京するという報知が、正太の家の方へ來た。半歳も考えて旅に出る人のように、いよいよお種が故郷を發つと言つて寄したのは、七月下旬に入つてからのことであつた。

「漸く、私の待つていたような日が來た。番頭の幸作も養子分に引直して、今では家のもの同様である。それに嫁まで取つて宛行つてある。私も、留守を預けて置いて、發つことが出来る。お前達はどういう日を送つてゐるか。お仙と二人で、そちらの噂をしない日は無い。お前達の住む東京を、お仙にも見せたい……叔父さんや叔母さん達にも逢わせたい

……」という意味が、お種の手紙には長々と認めてあつた。

この母からの便りを叔父達に知らせる積りで、先ず正太は塩瀬の店を指して出掛けようとした。

同じ河の傍でも、三吉や直樹の住むあたりから見ると、正太の家は厩橋寄の方であつた。その位置は駒形の町に添うて、小高い石垣の上にある。前には埋立地らしい往来がある。正太は家を出て、石段を下りた。朝日が、川の方から、家の前の石垣のところへ映つていた。それを眺めると、母や妹の旅立姿が彼の眼に浮んだ……日頃、女は家を守るものと定めて、めったに屋敷の外へ出たことも無いお種——そういう習慣の人が、自分から思立つて上京する気に成つたとは。正太は、あの深い屋根の下に跪き悶いていた母の生涯を思わずにはいられなかつた。

塩瀬の店の車に乗つて用達に馳廻つた後、正太は森彦叔父の旅舎へ立寄り、それから引返して三吉叔父の家の前に車を停めた。丁度三吉は下座敷に居た。叔父の顔を見ると、正太は相場の思惑にすこし手違いを生じたことから、遣縁算段して母を迎える打ちあけ話を始めた。

「へえ、お仙ちゃんを連れて？ 姉さんも出て来るにはすこし早いナ」

と三吉は首を傾げていた。

「叔父さんもそうお思いでしよう」と正太は不安らしく、「どうも母親さんは……阿爺に逢うのを目的にして出て来る様子です。いろいろ綜合して、私も考えて見ました。いずれこれは、何処かの温泉場へ阿爺を呼寄せて、そこで会見しようという希望が、母親さんに有るらしいんです……どうもそうらしい……唯母親さんが出て来るものとは、どうしても私は思われません」

猶<sup>なお</sup>的確<sup>たしか</sup>に言うために、正太は幸作から近く来た手紙の模様を叔父に話した。両親が、世間へは内証で、互に消息を通わせていることをも話した。

「母親さんからどういう手紙が行くのですか、それは解りませんが——」と正太はその話を継いで、「阿爺の手紙は、豊世が受取つて、それから母親さんの方へ取次いでいます。時々、私も目を通します……」

「どんな風に、君の父親さんからは書いて寄すものかネ」と三吉が聞いた。

「あの年齢<sup>とし</sup>に成つて、ああいう手紙を交換<sup>とりかわ</sup>してるものかと思うと、驚く……」と言つて、正太は歎息して、「私達が書く手紙なぞとは、まるつきり正太は歎息して、「私達が書く手紙なぞとは、まるつきり全然違つたものなんです」「どうでしよう、仮に、達雄さんが郷里<sup>くに</sup>へ帰つたとしたら——」

「そりや、叔父さん、阿爺が帰れば必ず用いられます——土地に人物は少いんですからね。そこです。用いられれば、必ず復た同じことを繰返します。そりやあ、もう目に見えていきます」

叔父に逢つて談話をして見ると、正太は頭脳あたまがハツキリして來た。父の家出はなし——つづいて起つた崩壊の光景——その種々の記憶さまざまが彼の胸に浮んで來た。三吉の方でも、甥おいの顔を眺めているうちに、何となく空恐しい心こころ地もちに成つた。

「こりや姉さんにも、すこし考えて貰わんけりや成らんネ」と三吉が言出した。

正太は力の籠こもつた語氣で、「ですから、私は母親さんを引留めようと思ひます……」

「大きにそうだ。今ここで、下手に会見なぞさせる場合では無いネ」

「もし母親さんが是方こちらへ参りましたら、叔父さんからもよく話して遣つて下さい」

お種が帰らない夫を待つことは、最早幾年に成る、とその時三吉も数えて見た。娘お仙を夫に逢わせて見たら、あるいは——一旦失われた父らしい心胸を復た元へ引戻すことも出来ようか——離散した親子、夫婦が集つて、もう一度以前のような家を成したい——こう彼女が、一縷いぢるの希望を夫に繋ぎながら、心竊ひそかに再会を期して上京するというは、三吉にも想像し得るようと思われた。

門前には、車が待っていた。正太は車夫を呼んで、心忙しそうに自分の家の方へ帰つて行つた。

お種がお仙と一緒に東京へ着いた翌々日、正太はその報告がてら、一寸復た三吉叔父の家へ寄つた。

「一昨日、母も無事に着きました」と正太は入口の庭に立つたまま、すこし改まつて言つた。

「お雪」と三吉は妻の方を見て、「姉さん達も御着に成つたとサ」

お雪は最早三番目の男の児を抱いている頃であった。橋本の姉の上京と聞いて、微笑みながら上り端のところへ來た。

「月でも更りましたら、御緩り入来しつて下さい」と正太は叔父叔母の顔を見比べて、「叔母さんも、何卒叔父さんと御一緒に——母もネ、着きました晩なぞは非常に興奮していまして、こんな調子じや困つたもんだなんて、豊世と二人で話しましたが、昨日あたりから大分それでも沈静いて來ました——」

簡単に母の様子を知らせて置いて、正太は出て行つた。

月でも更つたらと、正太が言つたが、久し振りで三吉は姉に逢おうと思って、その日の方から甥の家を訪ねることにした。種夫に着物を着更えさせて、電車で駒形へ行つた時は、橋本とした軒燈<sup>ガス</sup>が石垣の上に光り始めていた。三吉は子供を抱き擁えて、勾配の急な石段を上つた。

「種ちゃん、父さんと御一緒に——よく被<sup>いら</sup>入しつて下さいましたねえ」と豊世が出て迎えた。

「坊ちやま、さあアンガなさいまし」女中の老婆も顔を出した。

「こんな小さな下駄<sup>かっこ</sup>を穿いて——」と復た、子の無い豊世がめずらしそうに言つた。

間もなく、三吉はお種やお仙と挨拶<sup>あいさつ</sup>を交換<sup>とりかわ</sup>した。遠慮の無い種夫は、綺麗に片付けてある家の内を歩き廻つた。お種は自分の方へ子供を抱寄せるようにして、

「種ちゃん——これが木曾の伯母さんですよ。お前さんの姉さん達は、よくこの伯母さんが抱ツコをしたり、負<sup>おん</sup>ぶをしたりしたツけが……」と言つて、お仙の方を見て、「お仙や、あのワンワンをここへ持つて来て御覧」

お仙は、簞笥<sup>たんす</sup>の上にある犬の玩具<sup>おもちゃ</sup>を取出して、種夫に与えた。

「叔父さん、二階の方へいらしつて下さい」と正太が先に立つて言つた。

「そうせまいか。二階で話さまいか」と言つて、お種は子供を背中に乗せて、「お仙もいらつしやい」

「母親さん、危う御座んすよ」と豊世は灯の点いた洋燈ランプを持ちながら、皆なの後から階梯だんばを上つた。

二階は、水樓の感じがすると、三吉が来る度に言うところで、隅田川すみだがわがよく見えた。対岸の町々の灯は美しく水に映じていた。正太に似て背の高いお仙は、縁側の欄てすりに近くいて、母や叔父の話を聞こうとした。この娘の癖で、どうかすると叔父の顔に近く自分の処おとこに近づくめららしい顔を寄せて、言い難い喜悅よろこびの情を表わそうとした。お仙は二十五六に成るとは見えなかつた。ずつと若く見えた。

「どうだネ、お仙、三吉叔父さんにお目に掛つてどんな気がするネ」

と母に言われて、お仙は白い纖細ほそい手を口に宛行あてがいながら、無邪気に笑つた。

「彼女は、どの位嬉しいか解わからないところだ」とお種は三吉に言つて聞かせた。「お前さん達のことばかり言い暮して來た。彼女が郷里くにへ連れられて行つたのは、六歳の時むつだぞや。碌ろくに記憶おぼえがあらすか。今度初めて東京を見るようなものだわい」

種夫はすこしも静止していなかつた。部屋の内は正太の趣味で面白く飾つてあつたが、子供はそんなことに頓着なしで、大切な道具でも何でも玩具にして遊ぼうとした。

「種ちゃん、いらつしやい、豊世叔母ちゃんが負ぶして進げましよう——表の方へ行つて見て来ましょうネ」

と豊世は種夫を連れて、階下へ行つた。やがて、往来の方からお仙を呼ぶ声がした。

「お仙ちゃんも、そこいらまで一緒に見に行きませんか」

豊世が誘うままに、お仙も町の夕景色を見に出掛けた。

正太は母や叔父を款待<sup>もてな</sup>そうとして、階梯<sup>はしこだん</sup>を上つたり下りたりした。二階の縁側に近く煙草盆<sup>たばこぼん</sup>を持出して、三吉はお種と相<sup>さしむか</sup>對<sup>かい</sup>に坐つた。お種が広い額には、何となく憂鬱<sup>ううつ</sup>な色が有つた。でも案じた程でも無いらしいので、三吉もやや安心して、亡くなつた三人の子供の話なぞを始めた。山で別れてから以来<sup>このかた</sup>、お種は言いたいことばかり、何か話して可いか解らない程であつた。

「房ちゃん達のことを思うと、種夫もよくあれまでに漕付けましたよ。どの位手数の要<sup>かか</sup>つたものだか知れません」

「そうさ——どうも見たところが弱そつだ」

姉きょうだい弟だいが話の糸口は未だほんとう眞實ほんじやうに解ほどけなかつた。急に、正太は階下したから上つて来て、洋燈の置いてあるところに立つた。

「母親さん、お仙ちゃんが居なくなつたそうです」

こう坐りもせずに言つた。思わず三人顔を見合せた。

お仙を探しに行つた三吉が、町を一廻りして帰つて来た頃は、正太も、豊世も、お種も出て居なかつた。家には、老婆ばあさん一人ほんやり茫然と留守をしていた。

「お仙ちゃんは未だ帰りませんか」

と庭から声を掛け、三吉は下座敷へ上つて見た。壁に寄せて座蒲団ざぶとんの上に寝かして置いた種夫の姿も見えなかつた。

「坊主は？」

「坊ちやまですか。めんめを御覚おさましだもんですから、御隠居様が負おんぶなさいまして、表の方へ見にいらッしやいました」

夏の夜のことで、河の方から来る涼しい空気が座敷の内へ通つていた。三吉は水浅黄色

の力アテンの懸つた玻璃障子のところへ行つて見た。そこから、石段の下を通る人や、町家の灯や、水に近い夜の空なぞを眺めながら立つていた。お仙が居なくなつたという時から、やがて一時間も経つ……

三吉は老婆ばあさんの方へ引返した。

「もう一度、私は行つて見て来ます」

老婆は考深く、「御嬢様も、もうそれでも御帰りに成りそなものですね」「何処どですか、そのお仙ちゃんの見えなく成つたという処は」

「なんでも奥様あすこが御一緒に買物を遊ばしまして——ホラ、電車通に小間物を売る店が御座いましよう——彼処なんで御座いますよ。奥様は、御嬢様が御側に居らいっしやることとばかり思召して、坊ちやまに何か御見せ申していらしつたそうですが、ちよつと振向いて御覧なさいましたら、最早御嬢様は御見えに成らなかつたそうです。それはもう、ホンのちよつとの間に……」

それを聞いて、三吉は出て行つた。

二度目に彼が引返して、暗い石垣の下までやつて来ると、お種は娘の身の上を案じ顔に、玻璃障子のところに立つていた。

「姉さん、お仙ちゃんは？」と三吉は往来から尋ねてみた。

「未だ帰らない」

という姉の答を聞いて、三吉も不安を増して來た。

「三吉」とお種は弟を家の内へ入れてから言つた。「お前は今夜、是方こっちで泊つてくれるだろうネ」

「ええ、とにかく行つて坊主を置いて来ます——それから復たやつて来ましょう」

「ああそうしておくれ。弱い子供だから、お雪さんが心配すると不可いけない。ワンワンも持たせてやりたいが、可いわ、私がまた訪ねる時にお土産みやに持つて行かず」

三吉は眠そうな子供を姉の手から抱取つた。

「坊ちやまのお下駄げたはいかがいたしましょう」と老婆が言葉を添える。

「ナニ、構いませんから、新聞に包んで私の懷中ふところへ捩込ねじこんで下さい」

こう三吉は答えて、「種ちゃん、吾家おうちへ行くんだよ」と言い聞かせながら、子供を肩につかまらせて出た。種夫は眠そうに頭を垂れて、左右の手もだらりと下げていた。

「まあ御可愛そうに、おねむでいらッしやる」と老婆が言つた。

三吉が自分の家へ子供を運んで置いて、復た電車で引返して來た頃は、半鐘はざが烈しく鳴

り響いていた。細い路地や往来は人で埋まつた。お仙が居なく成つたというさえあるに、  
おまけに火事とは。三吉は仰天して了つた。火は正太の家から半町ほどしか離れていなかつた。

「これはまあ何という事だ」

というお種の言葉を聞捨てて、三吉は二階へ駆上つた。続いてお種も上つて來た。

雨戸を開けて見ると、燃え上る河岸の土蔵の火は姉弟の眼に凄じく映つた。どうやら、一軒で済むらしい。見ているうちに、すこし下火に成る。

「もう大丈夫」

と正太も階下から上つて來た。三人は無言のまま、一緒に火を眺めて立つていた。雨戸を閉めて置いて、三人は階下へ下りた。まだ往来は混雜していた。石段を上つて来て、火事見舞を言いに寄るものもあつた。正太は心の震動を制えかねるという風で、

「叔父さん、済みませんが下谷の警察まで行つて下さいませんか……浅草の警察へは今届けて来ました」

「お仙も」とお種は引取つて、「ああいう神様か仏様のようなやつだから、存外無事で出て来るかも知れないテ」

「お仙ちゃんは、こここの番地を覚えて いますまいね」と三吉が聞いた。

「どうも覚えていまいテ」とお種は歎息する。

「なかなか車に乗るという智慧<sup>ちえ</sup>は出そうもない——おまけに、一文も持っていない」と正太も附添<sup>つけた</sup>した。

三吉は思い付いたように、老婆の方を見て、「老婆さん、貴方はあの路地のところへ行つて、角に番をしていて下さい。じゃあ私は下谷の警察まで行つて来ます」

夜は更けて來た。火事の混雜の後で、余計に四辺はシーノンとしていた。青ざめた街燈の火に映る電車通には、往来の人も少なかつた。柳並木の蔭は暗い。路地の角に、豊世と老婆<sup>あさん</sup>の二人が悄然<sup>しあんぱり</sup>立つて、見張をしている。そこへ三吉が帰つて來た。

「まだ帰りませんか」と三吉は二人に近づいて尋ねた。

「叔父さん、どうしたら宜う御座んしようね」と豊世はうれしげに答えた。

「まあ家へ行つて相談しようじや有りませんか」

こういう三吉の後に隨いて、豊世は重い足を運んだ。老婆も黙つて歩いて行つた。

正太の家には、お仙を捜しに出たものが皆な一緒に集つた。

「何時でしよう」と三吉が言出した。

「十一時過ぎました」と正太は懐中時計を出して見て答えた。

しばらく正太は沈吟するように部屋の内を歩いて見た。やがて、玻璃障子の閉めてあるところへ行つて、暗い空を窺いながら立つていたが、復た皆なの居る方へ引返した。時々、彼は可恐しげな眼付をして、豊世の顔を睨みつけた。

「あぶないあぶないと平素から思つていたが、これ程とは思わなかつた」正太はこんな風に妹のことを言つて見た。

「一体、私が子供なぞを連れてやつて來たのが悪かつた」と三吉が言つた。

お種は引取つて、「そんなことを言えば、私がお仙を連れて出て來たのが悪いようなものだ。いや、誰が悪いんでも無い。みんなあの娘こが持つて生れて來たのだぞや。どんなことが有ろうとも、私はもう絶念めていますよ。それよりは、働くものがよく働いて、夫婦して立派なものに成つてくれるのが、何よりですよ」

「私はネ」と正太は叔父の方を見て、「事業と成ると、どんなにでも働けますが——使えば使うだけ、ますます頭脳あたまが冴えて来るんです——唯、こういう人情のことには、實際閉口だ」

「正太もまた、こんなことに凹んで了うようなことじや不可」とお種は健氣にも、吾兒を励ますように言う。

「ナニ、これしきのことに凹んでたまるもんですか。私の頭脳の中には、今塩瀬の店の運命がある——おまけに明日は晦日という難関を控えている」

こう言つて、正太は鋭い眼付をした。

「さアさ」とお種は浴衣の襟を搔合せながら、家中を見廻して、「出来たことは仕方が有りません。とにかく一時頃まで皆なに休んで貰つて、三吉と正太には氣の毒だが、それからもう一度捜しに行つて貰わづ。三吉、すこし寝たが可いぞや。老婆もそこで横にお成りや——それにかぎる」

寝ると言われても、誰も寝られるものは無かつた。第一、そういうお種が眠らなかつた。すこし横に成つて見た人も、何時の間にか起きて、皆なの話に加わつた。十二時頃、一同夜食した。

時計が一時を打つ頃、三吉、正太の二人は更に仕度して出掛けることに成つた。

「叔父さん、風邪を引くといけませんよ——シャツでも進げましょう」と言つて、正太は豊世の方を見て、「股引も出して進げな」

「じゃあ、拝借する」と三吉が言つた。

三吉は股引に尻端折<sup>しりはしより</sup>。正太もきりりとした服装<sup>なり</sup>をして、夏帽子を冠つて出た。

「姉さん、お仙ちゃんが帰つて來たそうですね——よかつた、よかつた。僕は今そこの交番で聞いて來た」

と言つて、三吉が飛込んで來た。

「お仙、叔父さんに御礼を言わないか」

とお種に言われて、お仙はすこし顔を紅めながら手を突いた。この無邪気な娘は唯マゴマゴしていた。

「叔父さん、もうすこしで危いところ」と豊世は妹の後に居て、「悪い者に附かれたらしいんですが、好い塩梅<sup>あんばい</sup>に刑事に見つかったんだそうです。今まで警察の方に留めて置かれたんですけど」

そこへ正太も妹の無事を喜びながら入つて來た。

「随分心配させられたぜ、もうもうどんなことが有つても、ひとりでなんぞ屋外へ出されな

い」と言つて、正太は溜息を吐いて、「お仙がもし帰らなかつたら、それこそ家のやつを擲殺はりこころしてくれようかと思つた」

「ええ、そこどこじやない」と豊世は後向に涙を拭いて、「お仙ちゃんが帰らなければ、私はもう死ぬつもりでしたよ……」

一同はお仙を取囲いて種々なことを尋ねて見た。お仙は混雜した記憶を辿るという風で、手を振つたり、身体を動つたりして、

「なんでもその男の人が、私の処を聞いたぞなし。私は知らん顔していた。あんまり煩いから、木曾きそだつてそう言つてやつた」

「木曾はよかつた」と三吉が笑う。

「先方さきの人も変に思つたでしようねえ」と豊世は妹の顔を眺めて、「お仙ちゃんは、自分じやそれほど可畏こわいとも思つていなかつたようですね」

お仙はきれぎれに思出すという顔付で、「ハンケチの包を取られては大変だと思つたから——あの中には姉さんに買つて頂いた白粉おしろいが入つていた——私はこうシツカリと持つていた。男の人が、それを袂たもとへ入れる入れると言うじやないかなし。私が入れた。そうすると、この袂つかまを捕えて、どうしても放さなかつた……」

「アア、白粉を取られるとばかり思つたナ」と正太が言つた。

「ええ」とお仙は微笑を浮べて、「それから方々暗い処を歩いて、<sup>しまい</sup>終に木のある明るい処へ出た。草臥くたびれたろうから休めつて、男の人が言うから、私も腰を掛けて休んだ……」

「して見ると、やっぱり公園の内へ入つたんだ。あれほど僕等が探したがナア」と三吉は言つてみた。

お仙は言葉を続けて、「煙草を服のまないかつて、その人が私にくれた。私は一服しか貰つて服まなかつた。夫婦に成れなんて言つたぞなし——ええ、ええ、そんな馬鹿なことを」「よかつた、よかつた——夫婦なぞに成らなくつて、よかつた」

こうお種が言つたので、皆な笑つた。お仙も一緒に成つて笑い転げた。

「皆な二階へ行つて休むことにしましよう。正太も仕事のある人だから、すこし休むが可い——さアさ、皆な行つて寝ましょう」

とお種は先に立つて行つた。

「皆様の御床はもう展べて御座います」と老婆も言葉を添えた。

一同は二階へ上つて寝る仕度をした。三吉は寝られなかつた。彼は一<sup>いつ</sup>旦<sup>たん</sup>入つた臥床から復た這はいだ出して、蚊帳かやの外で煙草を燻し始めた。お仙も眠れないと見えて起きて來た。豊

世も起きて來た。三人は縁側のところへ煙草盆を持出した。しまいには、お種も我慢が仕切れなく成つたと見え、白い寝衣のまま蚊帳の内から出て來た。

「正太さんはよく寝ましたね」と三吉は蚊帳の外から覗いて見る。

「これ、そうつとして置くが可い。明日は大分多忙しい人だそうちだから——」とお種は声を低くして言つた。

その時、豊世は起つて行つて、水に近い雨戸を開けかけた。

「叔父さん、一枚開けましよう。もう夜が明けるかも知れません」

一夜の出来事は、それに遭遇つた人々に取つて忘られなかつた。折角上京したお種も、お仙を連れての町あるきは可恐しく思われて來た。河の見える家に逗留して、皆なで一緒に時を送るということが、何よりお種母子には楽しかつた。

八月に入つて、正太も家のものを相手に暮すような日があつた。兄夫婦や妹の間に起る笑声は、過去つた楽しい日のことをお種に想い起させた。下座敷の玻璃障子の外には、僅かばかりの石垣の上を丹精して、青いものが植えてある。お種は、郷里に居て庭の植木を

愛するように、その草花の手入をしたり、綺麗に掃除したりした。

お種は草<sup>くさ</sup> 笍<sup>ぼうき</sup> を手にして、石段の下へも降りて行つた。余念なく石垣の草むしりをしていると、丁度そこへ三吉が路地の方から廻つて訪ねて來た。お種はそれとも気がつかず、往来に腰を延ばして、自分の草むしりした跡を心地好さそうに眺めていた。三吉は姉の傍まで來た。まだお種は知らなかつた。その時、三吉は両手を延ばして、背後<sup>うしろ</sup>から静かに姉の目を隠した。

この戯は、寧ろお種をビックリさせた。彼女は右の手に草 笍を振りながら、叫んだ。何事かと、正太や豊世は顔を出した。三吉は笑いながら姉の前に立つていた。

「お前さんか——俺は<sup>おれ</sup> 真實<sup>ほんとう</sup>に、誰かと思つたぞや」

とお種も笑つて、「まあ、お入り」と言いながら、弟と一緒に石段を上つた。

「姉さん」と三吉は家へ入つてから言つた。「一寸御使にやつて來たんです。明日は私の家で御待申して いますから、何卒御話に入来しつて下さい」

「それは難有う。<sup>ありがと</sup>私もお前さんの許<sup>とこ</sup>の子供を見に行かずと思つていた。それに、久し振でお雪さんにも御目に掛りたいし……」

こういうお種の顔色には、前の晩に見たより焦心<sup>あせ</sup>つているようなところが少なかつた。

その沈んだ調子が、反つて三吉を安心させた。

正太と二人きりに成つた時、三吉は姉の様子を尋ねて見た。

「母親さんも考えて來たようです」と正太は前の夜の可恐しかつたことを目で言わせた。

「なにしろ、君、出て来る早々ああいう目に遭遇したんだからネ……実際あの晩はエラか  
つたよ……」

「私なぞは、叔父さん、すくなくも十年  
寿命が縮みました」

「ホラ、君と二人で最後に公園の内を探つて、広小路へ出て来ると、あの繁華な場処に人一人通らズサ……あの時、君は下谷の方面を探り給え、僕は浅草橋通りをもう一遍捜してみようツて言つて、二人で帽子を脱つて別れましたろう——あの時は、君、何とも言えな

「そうそう、一つ踏外すと皆な一緒にどうなるかと思うような……」  
「こりやあウカウカしちやあいられない、そう思つて、私は上野の方へひとりで歩いて行きました」

水を打つたような深夜の道路、互に遠ざかりながら聞いた幽かな足音——未だそれは二人の眼にあり耳にあつた。

女達が集つて來た。親類の話が始まつた。遠く満洲の方に居る実のことが出るにつけて

も、お種は夫の達雄を思出すらしかつた。お俊の結婚も何時あるかなどと噂した後で、三吉は辞して行つた。

お仙を残して置いて、お種はひとりで弟の家族に逢いに行つた。

三吉の家では、お雪が子供に着物を着更えさせるやら、茶道具を取り出すやらして、姉を待受けていた。気の置けない男の客と違い、殊に親類中一番年長のお種のことで、何となくお雪は改まつた面持で迎えた。弟の家の顔を見ると、お種は先ず亡くなつたお房やお菊やお繁のことを言出した。

三吉は姉の側に坐つて、「姉さん、御馴染の子供は一人も居なくなりました」

「そうサ——」とお種も考深く。

「種ちゃん、橋本の伯母さんに御辞儀をしないか」とお雪が呼んだ。

「種ちゃんはもう御馴染に成つたねえ。御預りのワンワンも伯母さんが持つて来ましたよ」「姉さん、これが新ちゃんです」と三吉は、漸く匍つて歩く位な、次男の新吉を抱寄せて見せる。

「オオ、新ちゃんですか」とお種は顔を寄せて、「ほんに、この児は壮健じょうぶ そうな顔をしてる。眼のクリクリしたところなぞは、三吉の幼少ちいさ 時に彷彿そつくり だぞや……どれ、皆な好い児だで、伯母さんが御土産おみや を出さずか」

子供は、伯母から貰つた玩具おもちゃ の犬を抱いて、家のものに見せて歩いた。

「お雪、銀ちゃんを抱いて来て御覧」と三吉が言つた。

「これ、温順おとなな しく寝てるものを、そうツとして置くが可い」とお種は壁に寄せて寝かしてある一番幼少ちいさ の銀造の顔のぞ を覗きに行つた。

「どうです、姉さん、これが六人めですよ——随分出来も出来たものでしよう」

「お前さんのところでは、お雪さんも御達者だし、どうして未だ未だこれから出来ますよ」

「こんなことを傍で言われて、お雪はキマリが悪そうに茶戸棚ちゃどだな の方へ行つた。

「眞實ほんと に、子供があると無いじや、家の内が大違たが いだ」と言つて、お種は正太の家のことを思い比べるような眼付をした。

その日、お種は心易く振舞おう振舞おうとしていたが、どうかすると酷く興奮した調子ひど が出て來た。時にはそれが病的に聞えた。すこしも静止していられないような姉の様子が、何となくお雪には気づかいであつた。お種は狭い町中の住居すまい をめずらしく思うという風で、

取散した勝手元まで見て廻ろうとするので、お雪はもう冷々<sup>ひやひや</sup>していた。

姉を案内して、三吉は二階の部屋へ上つた。日<sup>ひるなか</sup>中の三味線の音が、乾燥<sup>はしづや</sup>いだ町の空気を通して、静かに響いて来た。

「姉さん、東京も変りましたらう」

「こういう弟の話を、お種は直に吾兒<sup>わがこ</sup>の方へ持つて行つた。

「今度、出て来てみたら、正太の家には妙なものが掛けてある。何様とかの御護符<sup>おふだ</sup>だげナ。そして、一寸したことにも御幣<sup>かづ</sup>を担ぐ。相場師<sup>さばし</sup>という者は皆なこういうものだなんて……」

「しかし、正太さんはナカナカ面白いところが有りますよ。ウマくやつてくれると宜う御<sup>よ</sup>座んすが<sup>ネ</sup>」

「まあ、彼は、<sup>あれ</sup>阿爺<sup>おじ</sup>さんから見ると、大胆なところが有るで——」

お種は言い淀んで、豊世から聞いた正太と他の女との関係を心配そうに話した。

「アア向島の芸者のことですか」

「それサ」

「へえ、豊世さんは心配してゐんですかネ。そんな話は、疾くにどうか成つたかと思つて

いた

「ところがそうで無いらしいから困るテ……豊世もあれで、森彦叔父さんなら何事でも話せるが、どうも三吉叔父さんは気遣いだなんて言つてる」

「こうお種が言つて笑つたので、三吉の方でも苦笑した。」

お雪は姉の馳走ちそうに取寄せた松の鮓すしなぞを階下はしあから運んで来た。子供が上つて来ては、客も迷惑だらうと、お雪はあまり話の仲間入もしなかつた。

三吉は半ば串談じょうだんのように、「お雪は姉さんをコワがつていますよ」

「そんなことがあらすか」とお種は階梯はしじを下りかけたお雪の方を見て、「ねえ、お雪

さん、貴方とは信州以来の御馴染なじみですものネ」

お種の神経質らしい笑声を聞いて、お雪は泣き騒ぐ子供の方へ下りて行つた。

三吉は思い付いたように、戸棚の方へ起つて行つた。実が満洲へ旅立つ時、預つて置いた父の遺筆を取出した。箱の塵ちりを払つて、姉の前に置いて見せた。その中には、忠寛の歌集、万葉仮名で書いた短冊たんざく、いろいろあるが、殊にお種の目を引いたのは、父の絶筆である。漢文で、「慷慨こうがい憂憤ゆびんの士しを以つて狂人と為す、悲しからずや」としてある。墨の痕あとも淋漓りんりとして、死際に震えた手で書いたとは見えない。

父忠寛が最後の光景は、いつも三吉が聞いて見たく思うことであつた。お鶴が通夜の晩に、皆な集つて、お倉から聞いた時の話ほど、お種は委しく記憶していなかつた。そのかわり、お種はお倉の記憶に無いことを記憶していた。

「大きく『熊』という字を書いて、父親さんが座敷牢から見せたことが有つたぞや」とお種は弟に微笑んで見せて、「皆な、寄つて集つて、俺を熊にするなんて、そう仰つてサ……」

1

「熊はよかつた」と三吉が言つた。

「それは、お前さん、気分が種々に成つたものサ。可笑しく成る時には、アハハ、アハハ、  
独りでもう堪こたえられないほど笑つて、そんなに可笑しがつて被入いらつしやるかと思うと、今  
度は又、急に沈んで来る……私は今でもよく父親さんの声を覚えているが、きりぎりす啼な  
くや霜夜のさむしろに衣かたしき独りかも寝む、そう吟じて置いて、ワアツと大きな声で  
御泣きなさる……」

お種は激しく身体を震せた。父が吟じたという古歌——それはやがて彼女の遺瀬ない心であるかのように、殊に力を入れて吟じて聞かせた。三吉は姉の肉声を通して、暗い座敷牢の格子に取縋つた父の狂姿を想像し得るようと思つた。彼はお種の顔を熟じつと眺めて、

黙つて了つた。

この姉が上京する前、正太から話のあつた達雄との会見——今にそれを姉が言出すか言  
出すかと、三吉は心に思つていた。お種は、弟の方で待受けたようなことを何事も言出さ  
ずじまいに、郷里の方の うつりかわり 変遷などをいろいろと語り聞かせた後で、一緒に階下へ降り  
た。

お雪は眼の覚めた銀造を抱き擁かかえて、

「へえ、伯母ちゃん、銀ちゃんを見て下さい」

「オオ、おとな 温順まいか だそな。白い前掛まいか を掛けて——好い児だ、好い児だ」とお種は孫でもアヤ  
すように言つた。

「この通りの子持で御座いますから、いずれ私は夜分にでも伺います」

「お雪さん、御待ち申していますよ。お仙にも逢つてやつて下さい」

それから一週間ばかり、お種は とうりゆう 逗留とうりゆう した。そそここに帰郷の仕度を始めたと聞いて、  
親戚はかわるがわる正太の家を訪ねた。三吉も別れかたがた出掛けた行つた時は、お俊、

お延なぞの娘達が集つて來ていた。森彦の一番目の娘で、遊学のために上京したお絹も來ていた。

「三吉、御免なさいよ。今髪を結つて了いますから」

とお種は階梯はしきだんの下に近く鏡台を置いて、その前に坐りながら挨拶あいさつした。お種の後には、白い前垂を掛けた女髪結が立つて、しきりと身体を動かしていた。

「叔父さん、私も母親さんの御供をして、一寸郷里くにまで行つて参ります。実は行く前に、御相談したいこともありますし、私の方から今伺おうと思つていたところなんです」

正太は叔父の顔を見て、丁度好いところへ來てくれたという風に言つた。

三吉、正太の二人は連立つて、河の見える二階へ上つた。窓の扉だけ赤く塗つた河蒸汽とが、音波を刻んで眺望の中に入つて來た。やがて川上の方へ通過ぎた。

三吉は薄く濁つた水を眺めて、

「姉さんも、何事も言出さずに帰つて行くものと見えるね……時に、正太さん、相談したいというのは何ですか」

と叔父に言われて、しばらく正太は切出しかねていた。金の話であつた。郷里くにに居る正太の知人で、叔父の請判うけはんがあらば、貸出しそうなものが有る。商法の資本もとでとして、二千

円ばかり借りて来たい。迷惑は掛けないから、判だけ捺してくれ。

「実は——この話は、母親さんからこうこういう人があると、聞出したのが元なんです」と正太は折入つて三吉に頼んだ。

お種は髪が出来て上つて來た。

「三吉——もう俺も親類廻りは済ましたし、是頃の晩のようなことが有ると可恐しいで、サツサと郷里くにの方へ帰るわい」

こう話しているところへ、お仙も来て、名残惜しそうに叔父の方を見たり、二階から見える町々の光景などを眺めたりした。

「なあ、お仙」とお種は娘の方を見て、「三吉叔父さんにも御目に掛つたし、これでお前も気が済んだずら……早く仕度をして帰るまいかや」

「ええ、田舎いなかの方が安氣あんきで好い。兄さんや姉さんの傍に居られるだけは、東京も好いけれど——」とお仙は皆なの顔を見比べながら言つた。

三吉が別れを告げて、この家を出たのは町に燈火あかりの点つき始める頃であつた。薄暗く成つて、復た三吉は引返して來た。つづいて森彦も入つて來た。

「オヤ、三吉叔父さん、森彦叔父さんも御一緒に……」

と豊世は迎えに出た。二人の叔父は用事ありげに下座敷へ通つた。

「叔父さん達は御風呂は如何ですか」と豊世は款待顔に、「今日は、郷里へ帰る人の御馳走に立てましたところですが——」

「それじや、とにかく一ぱい入るとしよう」と森彦が言つた。

皆な出発するという前の晩のことで、何となく家の内は混雑していた。

食事を済ました後、叔父達は二階の縁側に近く居て、風呂から出る正太を待受けた。屋外は最早暗かつた。お仙は煙草盆の火を見に上つて来た。

森彦は胡坐にやりながら、

「お仙、兄さんは未だお風呂かネ」

「いえ、もう上つたずら……これから私達もよばれるところだ」

こう言つて、お仙は一寸縁側へ出た。沈んだ空気は対岸の町々を遠くして見せた。河は湖水のように静かであつた。お仙は欄のところから夜の空を眺めて見て、やがて階下へ引返して行つた。

そのうちに正太が煙草入を手にして上つて来た。チラと彼の眼は光つた。

森彦は肥つた身体を正太の方へ向けたが、顔はむしろ三吉の方へ向けて、「いや、他ほかでも無いがネ——俺は途中で三吉と行き逢つて、あれ彼がお前から相談を受けたと

いう話を聞いた。そいつは考え方だぞ、三吉も一緒に来い、俺が行つて正太によく話して

やる。そう言つて彼を引張つて来たところだ」

「ああ、そのことですか」と正太は苦笑した。

三吉は河の方を見ていた。森彦は正太をさと諭すように、みすみす三吉に迷惑の掛るものを黙つて観てゐる訳には行かぬ、証文に判をつけ——実も達雄も皆な同じ行き方で親類を倒している——こう腕まくりで言出した。

「そういうことなら、叔父さん、この話は断然止めましょう」

と正太はキツパリ答えた。

お種が階下から煙草盆を提げて談話の仲間入に来た頃は、森彦の声は高かつた。ウンと言わなければ氣の済まないのがこの叔父の癖で、お種や正太を前に置きながら、盛んに橋本父子を攻撃し始めた。叔父の目から見ると、正太の相場学などは未だ未だ幼稚なもので、仲買人のナの字にも行つておらぬ。こんなことが森彦の口を衝いて出て來た。

その時、豊世もお仙と一緒に、浴衣でやつて來た。叔父の猛烈な語勢が、階下にいる老婆はおろか、どうかすると隣近所までも聞えそうなので、心の好いお仙は沈着いていられないという風であつた。母の傍へ行つたり、兄の顔を眺めたりして、ハラハラしていた。「森彦——お前の言うことは、よく解つた……よく解つた……正太も、叔父さんの言うことをよく聞いて置いて、橋本の家を興してくれるが可いぞや……ええ、ええ、それを忘れるようなことじや、申訳が無いで……」

こうお種は言いかけたが、興奮のあまり声が咽喉へ乾干び付いたように成つた。豊世も姫の側に考深い眼付をして、女持の煙管で煙草を燻していた。

「今までの家風は、皆なが言うことを言わなさ過ぎたと思ひますわ」と豊世は顔を揚げて、「母親さん、これから皆なでもつと言ふことにしようじや有りませんか」

軽い、無邪気な、お仙の笑声が起つた。

漸く、一同、笑つて話すことが出来るようになつた。森彦も愛嬌のある微笑を見せて、

「なんでも人間は信用が無くちや駄目だ。俺なんかも、十年一日のこととして、志ばかりいたずらに大きいようなものだが、信用を失わないように心掛けているんを持つてゐる……」

「そうサ。お前は酒も飲まず、煙草も服まず——そこは一寸真似まねの出来ないところだ」とお種が言つた。

「これで何だぞい、俺は旅舍生活やどやぐらしを始めてから、唯の二度しか引手茶屋へも遊びに行つたことが無い。それも交際つきあいで止むを得ない時ばかり。一度はMさんの出て來た時、一度は——」

「二度と断つたところはよかつた」と三吉が笑出した。

「いえ、正直な話サ」

森彦は三吉を睨にらむようにして言つたが、終には自分でも可笑しく成つたと見えて、反そりか返えつて笑つた。

「姉さん」と森彦はお種の方を見て、「俺はこういう話を覚えていいるが——貴方達あなたがたが未だ東京に家を持つてる時分、お仙が二階から転がり落ちて、ヒドク頭を打つた——それを貴方達は知らずに寝ていたということだが——」

「そんなことは、虚言うそだ」とお種は腹立たしげに打消した。

「とにかく、今夜のような話は、為る方が可いネ」と三吉が正太に言つた。  
「稀たまにはこういう話も聞かんと不可いがん」正太も元氣づいた。

お種は弟を顧みて、「三吉、お前は私のことを……旦那<sup>だんな</sup>に逢つて見る積りで、今度出で来たんだろうなんて、そう言つたそなネ……」と他事<sup>ひとこと</sup>のように言つた。

「まあそんな話が出たことも有りました」と三吉は微笑んで、「しかし、姉さん、子のことも考へんけりや成りませんからネ」

「ええ、ええ、そこど<sup>こ</sup>じやない」とお種は力を入れた。

しばらく森彦は姉の横顔を眺めたが、やがて、

「この婆サ<sup>ばば</sup>も、これで未だ色氣<sup>いろけい</sup>が有る」

と急所を衝<sup>つ</sup>くように言い放つた。盛んな笑声が起つた。一同の視線はお種の方へ集つた。

「ウン有る——有る、有る」

お種は口を尖<sup>とが</sup>らせて、激した調子で答えた。そして、ブルブル身体を震るわせた。

「風向が变つて来ましたぜ」と三吉は戯れるように。

「今度は俺の方へお櫃<sup>はち</sup>が廻つて來たそな」とお種も笑い碎けた。

お仙は手を振つて笑つた。

「しかし、串談はとにかく」とお種は浴衣の襟を搔合せて、「こ<sup>う</sup>皆な集ることも、めつたに無い。どうだ、豊世、お前も何か言うことがあらば——叔父さん達の前で言えや」

「母親さん、私は……別に言うことも有りません」と答えて、豊世は胸を押えながら、俯向いて了つた。

叔父達が夏羽織を引掛けて、起ち上つた頃は、対岸の灯も幽かに成つた。混雜した心地で、一同は互に別れを告げた。

「いや、危いところ——」

と森彦は正太の家を離れてから、三吉に言つた。

## 七

昼間から花火の音がする。

両国に近い三吉の家では、毎年川開の時の例で、親類の娘達を待受けた。豊世も、その日約束して置いて、誰よりも先にお雪のところへ遊びに来ていた。

「よくそれでも、叔母さん<sup>おば</sup>さんは子供の世話を成さいますねえ」

「私だつて心から子供が好きじや有りません」

叔母のような家庭的な人の口から、意外な答を聞いたという面持で、豊世は母衣蚊屋の

内にスヤスヤ眠つて いる 乳呑児<sup>ちのみご</sup>の方を眺めた。そこへ二番目の新吉を 背負つた 下婢<sup>おんない</sup>に連れられて、種夫が表の方から入つて來た。

「種ちゃんも、新ちゃんも、オベベを着更えましよ。今に姉さん方がいらつしやるよ」とお雪が言つた。

「どれ、種ちゃんは叔母さんの方へいらつしやい」と豊世は種夫に手招きして見せて、「豊世叔母さんが好くして 進<sup>あ</sup>げましよ。」

幼い兄弟は揃<sup>そろ</sup>いの新しい浴衣<sup>ゆかた</sup>に着更えた。丁度、三吉は町まで用<sup>よう</sup>達<sup>たし</sup>に出掛けた時で、子供に金魚を買つて戻つて來た。

「正太さんは?」

三吉は豊世の顔を見て尋ねた。お種を送りながら郷里<sup>くに</sup>の方へ行つた正太も、最早引返して來ていた。

「宅は後から伺いますつて」と豊世は微笑んで、「どうして、宅がこんな日に静止<sup>じっと</sup>していられるもんですか」

「今、豊世さんから伺つたんですが」とお雪は夫に、「塩瀬の御店もイケなく成つたそ う です」

「叔父さんは未だ御聞きに成りませんか」と豊世が言つた。

「いよいよ駄目なんですか。好い店のようでしたががナ。そいつは正太さんも氣の毒だ」「眞実に相場師ばかりは、明日のことがどう成るか解りませんネ。川向に居ます時分——あの頃のことを思うと、百円位のお金は平素紙入の中に入つていたんですがねえ」と言つて、豊世は萎れて、「そう言えば、森彦叔父さんにああ言つて頂いたんで、宜う御座んしたよ。あのお金を借りて持つていようものなら、それこそ——今頃はどう成つてゐるか解りません」

三吉はお雪と顔を見合せた。

「私もツマリませんから、花火でも見て遊びますわ」と豊世は嘆息した。

お雪は着物を着更えた。豊世は叔父から巻煙草を分けて貰つて、眼を細くしながらそれを吸つた。三吉も煙草を燻してゐたが、やがてひとりで二階へ上つて行つた。

黄色い花火の煙が町の空に浮んだ。三吉は二階の縁側に出て、往来へ向いた簾の影から眺めた。

「……人妻などに成るものではないと、よく貴方から言つて寄よこしたから、ひよつとかする」と最早名倉さんの方へ帰つているかとも思うが……試みにこの手紙を進あげる……」

こう三吉は心に繰返して見た。これはお雪ふるが旧い男の友達から、彼女へ宛てて寄した手紙の中の文句で。

言うに言われぬ失望が、ふとこの手紙を読んだ時から、三吉の胸に起つて來た。長く艱か難なんを共にしながら、これ程妻めが自分を知らずにいたか、と彼は心にナサケなく思つた。のみならず、全く心の持方の違つた、氣質も異なれば境遇も別な、こういう他人の手紙の中から、どう妻の心を読んだら可いか、第一それからして思い迷つた。

ポンポン音がする。煙は風に送られて、柳の花のように垂下つた。三吉はションボリ立つて眺めていた。

「叔父さん——」

と声を掛けて、正太がズカズカ階はしじ梯だんを上つて來た。

急に三吉は沈ちん鬱うつな心の底から浮び上つたように笑つた。正太と一緒に坐つて、兜かぶと立たち町まちの方の噂うわさを始めた。

「塩瀬の店も駄目だそうだネ」と彼が言つて見た。

「豊世からでも御聞きでしたか」と正太は叔父の方をキツと見て、「私が兜町へ入る頃から、塩瀬というものは実は駄目だったんです。外部を弥縫していましたから、店に使われる者すら知らなかつた。幹部へ入つてみて、それが解つた。いよいよあの店も致命傷を負いました。銀行からは取付とりつけを食う、得意は責めて来る——そう成つたら、實にミジメなものですよ。多分、あの店は、一旦閉めて、更に広田というものの名義で小さく始めることに成るでしょう。私なぞは、今までの行き掛り上、相談には乗つてやつていますが、殆んど手を引いたようなものです」

すべての劃策かくさくは水泡に帰した、と正太は歎息した。彼は仲買人として、別に立つ方法を講じなければ成らない、とも言つた。

「榊君はどうしたろう」と三吉は思出したように。

「あの人も失敗して、郷里くにへ帰つたきりです。再挙を計る心は無さそうです」

こんな話をしていると、階下したでは娘達の笑声が起つた。二人は一緒に階梯を下りた。お俊、お延、お絹を始め、お雪が末の妹のお幾も集つて來た。娘達の中には、縁先に来て、涼しそうな鳴海絞なるみしづりを着た種夫や新吉に、金魚を見せているものも有つた。

「お雪、皆なで写真を撮ろうじゃないか。お前達は子供を連れて先に写してお出。

俺は正

太さんと二人で写す」

と三吉は妻を呼んで言つた。お雪は嬉しそうに微笑んだ。往来にはゾロゾロ人の通る足音がした。

夕方から、表の木戸を開けはらつて、風通しの好い簾の影で、一同揃つて冷麦を食つた。  
「世が世なら、伝馬の一艘も買切つて押出すのにナア」

と正太は白い扇子をバチバチ言わせながら、叔父と一緒に門の外へ見て見た。

「お俊ちやん達もいらつしやいな」

お雪は娘達を呼んで、豊世と一緒に入口の庭へ下りた。町中のことで、往来の片隅に涼台を持出して、あるものは腰掛け、あるものは立つて通る人々の風俗を眺めた。

「お俊ちやんは島田に結つていらつしやれば可いのに。好く似合いますわ」と豊世はお俊の方を見た。

「此頃もネ、お俊姉さんは催促鬱だなんて、皆なでサンザン冷かしました。ですか  
ら姉さんは結つていらつしやらないんですよ」

「こうお絹が言出したので、娘達は皆な笑つた。

「絹ちゃんは感心に、田舎訛いなかなまりが出ないこと」と豊世は言つて見た。

「郷里くにで稽古けいこして来たんですもの」とお絹はすこし下を向いた。

「延ちゃんは、もうすっかり東京言葉だ」とお雪も娘達の発達に驚くという眼付をした。群集は町を隔てて潮のようすに押寄せて来ている。花火の音と一緒に、狂喜するさけびごえ喚声さけびごえが遠く近く響き渡る。正太と三吉は、河岸を一廻りして戻つて來た。娘達は揃つて出掛けようとした。

「ハイカラねえ」

とお延は、町を通る若い娘を叔父に指してみせて置いて、連れの後を追つた。

お雪は子供を見に家の内へ入つたが、やがて茶を入れて涼台のところへ持つて來た。豊世も煙草盆を運んだ。

「お俊ちゃんから今日話がりましたが」とお雪は夫の傍へ寄つて、「お祝の時には、私の帯を貸して下さいツて」

「帯は自分が有るじやないか」と三吉が言つた。

「御婚礼の時の着物に似合わないんですツて」

「じゃあ、貸して進げるサ」

こんな内輪話をしている叔母を誘つて、豊世は河岸の方へ歩きに出掛けた。涼台のところには、正太と三吉と二人残つた。

三吉は笑いながら「向島もどうしましたかネ」

と小金の噂などをして見た。二人の間には、向島で意味が通じた。

「豊世のやつも、気ばかり揉んで——弱つちまう」と正太は歎息するように。

「いっそ、向島に逢わせてみたらどうです」と三吉は戯れて言つた。

「いえ、叔父さん、既に最早逢わせてみたんです。駄目、駄目、それほど豊世がサバケていないんですからネ。土手のある待合でした。そこへ豊世を連れて行くと、向島も来て変に思つたと見えて、容易に顔を出しませんでした。あそこで、豊世が一つ笑つてくれると可いんでサ……」

「そりや、君、笑えないサ。女同志だもの」

「すると、さすがは商売人だ。人が悪いや。帰りに向島が車を二台あつらえて、わざわざ二人乗の方へ豊世と私を乗せて、自分は一人乗でそこいらまで送つて来ました……後で、豊世の言草が好いじや有りませんか、『もつと私は凄い<sup>すこ</sup>女かなんかと思つていた、貴方は

あんなのが好いんですか』ツて……しかしね、叔父さん、色に持つなら私はああいう温順おとなしいのを選びますよ。そのかわり、取巻にはどんな凄いんでも……』

紅や薄紫の花火の色が、夜の空に映つたり消えたりした。二人が腰掛けている涼台から、その光を望むことが出来た。三吉は、多勢子供を失つてから、気に成るという風で、時々自分の家の内のぞを覗きのぞに行つて、それから復また正太の話を聞きに来た。

どうかすると、三吉の心は空の方へ行つた。半ば独ひとりごと語のよう

「家というものはどうしてこう煩しいもんでしょう。僕のところなぞは、もうすこしウマく行きそうなものだがナア……」

こう正太に話して聞かせた。

そのうちに、豊世やお雪は手を引き合いながら、明るい軒燈ガスの影を歸つて來た。二人とも下町風の髪を結つて、丁度背も同じ程の高さである。お雪は三十を一つ越し、豊世もやがて三十に近かつた。お雪が堅肥りのした肩や、乳の張つた胸のあたりに比べると、豊世の方はやや瘦やせていたが、それでも体格の女らしく発達したことは、二人ともよく似ていた。二人は話し話し涼台の方へ近いちかづいた。

間もなく娘達も手を引いて帰つて來た。私語ささやく声、軽く笑う声が、そこにも、ここにも

起つた。知らない男や女は幾群となく皆なの側を通過ぎた。

仕掛け花火も終つた頃、三吉は正太と連立つて、もう一遍橋の畔まで出て見た。<sup>たもと</sup>提灯<sup>ちとうちん</sup>や万燈<sup>まんどう</sup>を点けて帰つて行く舟を見ると、中には兜町方面の店印をも数えることが出来る。急に正太は意氣の銷沈<sup>しょうちん</sup>を感じた。叔父と一緒に引返した。

遅く成つたので、花火を見に来た娘達は分れて泊ることに成つた。お俊とお絹は正太夫婦に連れられて行つた。三吉の家には、お延、お幾が残つた。

町中の夏の夜。郊外では四月五月<sup>よつつきいつつき</sup>も釣る蚊帳<sup>かや</sup>が、ここでは二十日か、三十日位しか要らない。でも、毎年のように蚊が増ふ<sup>ふ</sup>えた。その晩も皆な蚊帳の内へ入つた。

ふと、三吉が眼を覚ました頃は、家のものは寝静まつていた。蚊の声がウルサく耳について、しばらく彼は眠られなかつた。枕<sup>まくら</sup>頭<sup>もと</sup>の方では、乳臭い子供の香<sup>におい</sup>をたずねると見え、幾羽となく集つて来ていた。蚊帳の内にも飛んでいた。三吉は床を離れた。蠅燭<sup>ろうそく</sup>とマッチを探つて来て、火を点した。<sup>とも</sup>妻子<sup>つまこ</sup>はいずれもよく寝ていた。緑色の麻蚊帳が明るく映つても、目を覚まして声を掛けるものは無かつた。

「種ちゃんはあんなところへ行つて、転がつて——仕様が無いナア、皆な寝相が悪くて」  
 こう三吉は、叱る<sup>しか</sup>ように言つて見て、あちこちと子供の上を<sup>また</sup>跨いで歩いた。

蚊を焼きながら、三吉はお雪の 枕<sup>まくらもと</sup> 許<sup>まくらもと</sup> へ來た。まだお雪は知らずに寝ていた。見ると、何等の記憶に苦むと いうことも無いような顔付をして、乳呑児の頭の方へ無心に母らしい手を延ばしながら、静かに横に成つていた。三吉は 燭<sup>しょくだい</sup> 台<sup>だい</sup> を妻の寝顔に寄せた。そして、お雪の心を読もうとするような眼付をして、猶<sup>なお</sup> よく見た。何物<sup>なんに</sup> も変つたものが蠅燭の光に映らなかつた……深い眠はお雪の身体を支配しているらしかつた。顔面<sup>かお</sup> のどの部分でも、眠つていないとこ<sup>は</sup>は無かつた。白い腕までも夢を見ていた。

蚊帳の外まで燭台を持つて廻つた後、三吉は火を吹き消した。復た自分の床に入つて、枕に就いた。

翌<sup>よく</sup>朝<sup>あさ</sup> は、お延やお幾が種夫を間に入れて、三吉夫婦と一緒に食事した。新吉もその傍<sup>おんな</sup>で、下婢<sup>おんな</sup>に食べさせて貰つた。

「いやです、父さん——人の顔をジロジロ見て」とお雪は食いながら言つた。

「見たつて可いじやないか」と三吉は 串<sup>じょうだん</sup> 談<sup>だん</sup> らしく。

「そんなに見なくたつて宜う御座んす」

とお雪が言つたので、娘達はクスクス笑つた。

「どうだ、昨夜俺は起きて、お前達の知らない時に蚊を焼いたが……皆なよく寝ていた」と言つて、三吉は戯れるような口調で、「叔父さんは延の寝言まで聞いちゃつた」

「嘘、<sup>うそ</sup>叔父さん、私が寝言なんか言うもんですか」とお延が笑う。

「私は、兄さんが蚊を焼きにいらしたのを知つてたけれど……黙つて寝た振をしていた」とお幾も笑つた。

間もなく三吉は独りで自分の部屋へ上つて行つた。

二階——そこは三吉が山から持つて来た机の置いてあるところで。そこから坐りながら町々の屋根や、水に近い空なぞを望むことが出来る。そこから階下に居る人達の声を手に取るよう聞くことも出来る。彼が仕事で夢中に成つてゐる時は、夜遅くまで洋燈<sup>ランプ</sup>が点いて、近所の家々で寝て了<sup>しま</sup>う頃にも、未だそこからは燈火<sup>あかり</sup>が泄れていることもある。

階下から聞える声は、とは言え三吉の心を静かにしては置かなかつた。男と女で争うなぞはクダラナイことだ、こう思いながら、知らず知らず彼はその中へ捲込まれて行つた。何時まで経つたら、夫と妻の心の顔が<sup>ほんとう</sup>真実に合う日が有るだろう。そんなことを考えるさえ、彼は厭<sup>いと</sup>わしそうな眼付をした。

夫としての三吉は、妻の変らない保護者で有つた。しかし好い話相手では無かつた。妙に、彼はお雪の前に長く坐つていられなかつた。すこし長く妻と話をして居ると、もう彼は退屈して了つた……こういう性分の三吉に比べると、もつと心易い人が世の中にはある。そういう人が階下へ来て、皆なを笑わせることがある。それを三吉は二階から聞く度に、たび 侘しい心を起した。どうかすると、彼は 階 梯はしごだん を駆け降りるようにして、そういう人の手から自分の子供を抱取ることも有つた。

「人の細君をつかまえて、雪さんなどと平氣で書いて寄す男もある」

と三吉は思つてみた。そういう人が妻には親切な面白い人のように言われても、その無邪気さを三吉はどうすることも出来なかつた。

すこしの言葉の争いから、お雪は鬱ふさいで了うことが多かつた。すると、三吉は二階から下りて、時には妻の前に手を突いて、「何卒どうか まあ宜敷おたのもう 御頼おのづか 申します」と詫びるよう言つた。

お俊の結婚がある頃は、三吉の家では名倉の母を迎えた。大きな名倉の家族に取つて無

くてならない調和者はこの人であった。「橋本の姉さんと、名倉の母親さんとは、丁度両方の端に居る人だ」と三吉はよくお雪に言つて聞かせるが、この母は多くの養子に対してもばかりでなく、娘を嫁<sup>かたづ</sup>けた先の三吉に対しても細<sup>こまか</sup>いところまで行き届く。<sup>こまか</sup>倦<sup>う</sup>まず立働く人で、お雪の傍に居ても直に眼鏡<sup>めがね</sup>を掛けて、孫の為に継物したり、娘の仕事を手伝つたりした。

丁度、勉も商用で上京していた。勉の旅舎<sup>やどや</sup>はさ程離れてもいなかつたし、それに名倉の母が逗<sup>とうりゆう</sup>留<sup>りゆう</sup>中なので、用達<sup>ようたし</sup>の序<sup>ついいで</sup>に来ては三吉の家へ寄つた。お雪が母親の周囲<sup>まわり</sup>には賑<sup>にぎや</sup>かな話声が絶えなかつた。

こういう中で、とかく三吉は沈み勝ちであつた。賢い名倉の母に隠れるようにして、日の暮れる頃には町の方へ歩きに出た。何處へ行こう。何を見よう。別に彼はそんな目的があるでもなかつた。唯、家から飛出して行つて、路を通る往来<sup>ゆきき</sup>の人の中に交つた。彼の足は電車の通う橋の方へ向<sup>むか</sup>ひ易かつた。そこから、黄昏<sup>たそがれどき</sup>時の空氣、チラチラ点く燈火<sup>あかり</sup>、並木道、ゴチャゴチャした町の建物なぞを眺めては帰つて來た。家の近くには、人の集る寄<sup>よ</sup>せ<sup>せ</sup>席がある。そこへも彼はよく独りで出掛け行つた。芸人が高座<sup>いふも</sup>でする毎時<sup>いつも</sup>きまりきつた色話<sup>こわいろ</sup>とか、仮<sup>こわいろ</sup>白<sup>しら</sup>とかが、それほど彼の耳を慰めるでも無かつた。彼は好きな巻煙草

を燻しながら、後の方の隠れた場所に座蒲団を敷いて、独りで黙つて坐つた。そして、知らない人の中に居て、言い難き悲哀を忘れようとした。

名倉の母は長く逗留していた。その間に、お雪は留守番を母に頼んで置いて、旧の学校友達だの、豊世の家だのを訪問して歩いた。子持で、しかも年寄のない家に居ては、こういう機会がお雪には少なかつたからで。三吉は妻の外出にすら、何とも言ってみようの無い不安な感じを抱くように成つた。

ある晩、お雪は直樹の家を訪ねると言つて出て行つた。十時過ぐる頃まで帰つて来なかつた。妙に三吉は心配に成つて來ます」

「母親さん——お雪はどうしたでしよう。こんなに遅くなつても、未だ帰りません。一寸私はそこいらまで行つて見て來ます」

こう名倉の母に言つて置いて、三吉は直樹の家まで妻を迎えて行つた。

橋の畔たもとで彼はお雪の帰つて来るのに行き逢つた。

「父さん」

と声を掛けられて、三吉はやや安心したように、

「心配したぜ。こんなに遅くまで話し込んでるやつが有るもんか。もうすこしで、俺は直

樹さんの家まで行つちまうところだつた」

お雪は夫に寄添つた。こうして二人ぎりで一緒に歩くということは、夫婦にはめつたに無かつた。三吉は妻を連れて、暗い道を静かに考深く歩いて帰つた。

「——『一体お前はどういう積りで俺の許へ嫁に來た』なんて、よく父さんがそんなことを私に言いますよ」

「へえ、父さんはそういう心でいるのかねえ」

こうお雪と母親とで話しているところへ、勉が商人風の服装なりをして、表から入つて來た。勉は大阪まで行つて來たことから、東京での商用も弁じた、荷積も終つた、明日は帰國の途に就くことなぞを話した。この人とお雪の妹との間には、最早種夫と同年の子供がある。「父さん、※がお別れに参りました。一寸逢つてやつて下さい」

と名倉の母が 階はしこ 梯だん の下から呼んだ。

三吉も談話の仲間に入つた。快活な世慣れた勉の口から、三吉は種々な商人の生活を聞くことを楽んだ。勉もよく話した。

勉とお雪の愛。それを知つて、三吉が二人を許してから、可成長い月日が経つ。三吉は勉に交際つてみて、好くその気心も解つた。以前のことは最早昔話のように思われるまでに成つていた。制え難い不安の念につれて、幾年となく忘れられていた苦痛が復た起つて來た。男同志さしむかいでいれば、三吉の方でも快心く話せる。そこへお雪が入つて來ると、妙に彼は笑えなかつた。

勉は三吉の蒼ざめた顔を眺めて、

「しかし、小泉さんも御多忙しいでしよう」

「ええ、ええ、多忙しい人です」と母は引取つて、やがて三吉の方を見て、「父さん——貴方は御仕事の方を成すつて下さい。何卒お構いなく」

名倉の母は茶を入れかえて、帰国するという養子にすすめ、茶の好きな娘の亭主にも飲ませた。

間もなく勉は旅舎の方へ戻つて行つた。三吉は勉の子供へと思つて、土産にする物を町から買求めて來た。それを持つて妻の前に立つた。

「父さん、何物か——」と種夫は見つけて、父に縋りつく。

「お前のお土産みやげじや無いよ。あつちの叔父さんに進げるんだよ」と三吉は子供に言い聞か

せて、やがてお雪に、「これはお前に頼むぜ——俺のかわりに、後で勉さんの旅舎まで行って来ておくれ」

「そんなことをしなくツても宜う御座んすに」

と母は顔を出して言つた。

夕飯の後、三吉は二階に上つて、机に對むかつて見た。「馬鹿」と彼は自分で自分を叱つた。  
 「どうでも可いじやないか、そんな事は……傍観者で沢山だ」こう復た自分に言つて見た。  
 不思議な本能の力は、しかし彼を唯傍観させては置かなかつた。ついつ何時の間にか、彼はお雪が勉の旅舎に訪ねて行く時のこと想像した。彼女と勉との交換とりかわす言葉を想像した。  
 「どうしたというんだ、一体俺は……」

思い屈したような眼付をして、彼は部屋を見廻した。

その時、「君は嫉ねたんだことがあるか……」こうある仏蘭西フランス人の物語の中にあつた言葉を胸に浮べて、三吉は心に悲しく思つた。男が嫉む——それが自分のことだと感じた時は、彼は自分の性質を恥じずにいられなかつた。許した、許した、とは言つたものの、未だ真ほんとうに勉やお雪を許してはいなかつた、とも思つて來た。

階下はしたでは、三人の子供も寝た。お雪は仕度が出来たと見えて階梯はしきだんのところへ来て声

を掛けた。

「じゃ、父さん、一寸行つて参ります」

表の木戸を開けていそいそと出て行く妻の様子は、二階に居てよく知れた。三吉は熟じつと耳を澄まして、お雪の下駄げたの音を聞いた。

震える自分の身体からだを見ながら、三吉は妻の帰りを待つていた。人が離縁を思うのもこういう時だろう。こんなことを悲しく考えて、終に、今まで起したことも無い思想に落ちて行つた。僧侶ぼうさんのような禁欲の生活——寂しい寂しい生活——しかし、それより外に、養うべき妻子を養いながら、同時にこの苦痛を忘れるような方法は先ず見当らなかつた。このまま家を寺院精舎しようじやと観る。出来ない相談とも思われなかつた。三吉はその道を行こうと考え迷つた。

お雪は、勉が留守だつたと言つて、旅舎やどやの方から戻つて來た。

翌日あくるひ、勉からは、三吉とお雪の両名宛で、葉書が届いた。それには、子供への土産の礼を述べ、折角姉上が訪ねてくれたのに、不在で失礼した、これから郷里へ向う、母上に

も宜しく、としてあつた。

十月は末に成つて、三吉は長い風邪に侵された。名倉の母は未だ逗留していた。熱のある夫の為に、お雪は風薬だの、くいもの 食物だのをこしらえた。それを二階に寝ている夫の枕まくら 許もと へ運んだ。時には、子供が隨ついて上つて来て、母の肩につかまつたり、手を引いたりして戯れた。

「叔父さんは御風邪ですか」

正太が階梯はしこだん を上つて來た。三吉は快よくなりかけた時で、厚いドテラを引掛けたまま、床の上に起直つた。

「正太さん、失礼します」と三吉は坊主枕ひざ を膝の上に乗せて言つた。

「御無沙汰ごぶさた しておりますが、豊世さんも御変りは有りませんか」

こうお雪は正太に尋ねて、元気づいた夫の笑声を聞きながら階下へ降りて行つた。

「どうです、兜町の方は」と三吉は正太が言わぬい先に言出した。「何とか言いましたね、廣田サ……今度の店の方はどうですかネ」

正太は寂しそうに笑つた。「ええ、まあ暖簾のれん が掛けてあるというばかり。それに、叔父さん、店員は大抵去りましたし、あの店も小さいところへ移りました……塩瀬の没落以来、

もう昔日の面影おもかげはありません

「でも、君は出てはいるんでしよう」

「この節は、遊びです。実は此頃こないだ、広田の店の為に、一策を立てて見ました。まあ、乗るか反そるか、一つやツつけると言ふんで。あるところへ一日の中に九度たびも車で駆付けさして、しかも雨のドシヤ降りの日に、この店を活かすなり殺すなりどうなりともしてくれ、そう言つて私が転ころがり込んで行つた……宛然まるでユスリですネ……どうしても先方さきで逢わない。すると、広田の店の方で、どうも橋本は凄すこいことをするなんて、そんな裏切者が出て来る……胆きもツ玉の小さな男ばかり揃そろつてゐるんでサ。あんなことで何が出来るもんですか。私も何卒どうかして、早く新しい立場を作らんけりや成らん……」

正太の眼は物凄く輝いた。同時に、何となく萎しおれた色を見せた。やがて彼は袂たもとを探つて、鉛の入つた繭まゆを取出した。仕事もなく、徒然つれづれなまま、この繭を土台にして、慰みに子供の玩具おもちゃを考案してゐる。こんなことを叔父に語つた。正太は紀文のこが遺おもちゃしたという観具の話を引いて、さすがに風雅な人は面白いところが有る、とも言つた。

日の光は町々の屋根を掠めて、部屋の内へ射込んでいた。臥床とこの上にツクネンとしている叔父の前で、正太はその鉛の入つた繭を転がして見せた。

夫は家を寺院と観念しても、妻はもとより尼では無かつた。

そればかりでは無い、若い時から落魄の苦痛までも嘗めて來た三吉には、薬を飲ませ、物を食わせる人の情を思わずに入れなかつた。彼が臥床を離れる頃には、最早還俗して了つた。彼の精神は激しく動搖した。屈辱をも感じた。

兄妹の愛——そんな風に彼の思想は變つて行つた。彼は自分の妹としてお雪のことを考えようと思つた。

十一月の空氣のすこし暗い日のことであつた。めずらしく三吉はお雪を連れて、町の方へ買物に出た。お雪は紺色のコートをちょっとしたヨソイキの着物の上に着て、手袋をはめながら夫に隨いて行つた。「まあ、父さんには無いことだ——御天氣でも変りやしないか」とお雪は眼で言わせた。

ある町へ出た。途中で三吉は立ち留つて、

「オイ、もうすこしシャンとしてお歩きよ……そんな可恥しいような容子をして歩かないで。是方がキマリが悪いや」

「だつて、私には……」

「お雪はすこし顔を紅めた。

買い物した後、三吉はお雪をある洋食屋の二階へ案内した。他に客も見えなかつた。窓に近い食卓を選んで、三吉は椅子に腰掛けた。お雪も手袋を取つて、よく働いた女らしい手を、白い食卓の布の上に置いた。

「ここですか、貴方の**聰顧**にしてる家は」

とお雪は言つて、花瓶だの、鏡だの、古風な油絵の額だので飾つてある食堂の内を見廻した。彼女は又、玻璃窓の方へも立つて行つて、そこから見える町々の屋根などを眺めた。

白い上衣を着けたボオイが皿を運んで來た。三吉は匙を取上げながら、妻の顔を眺めて、「どうだネ。お前の旧友達で、誰か可羨しいような人が有るかネ。ホラ、黒縮緬の羽織を着て、一度お前の許へ訪ねて來た人が有つたろう。あの人も見違えるほどお婆さんに成つたネ」

「多勢子供が有るんですもの……」とお雪は思出したような眼付をして、スウップを吸つた。「旦那に仕送りするなんて言つて、亜米利加へ稼ぎに行つた人もどうしたかサ。そうかと

思えば、旦那と子供を置いて、独りで某処どつかへ行つてゐる人もある……妙な噂があるぜ、ああいう人がお前には好いのかネ」

「でも、あの人は感心な人です」

「うかナア……」

ボオイが皿を取替えて行つた。しばらく夫婦は黙つて食つた。

「芝に居る人はどうなんかネ」と復た三吉が言つた。『よくお前が遊びに行くじゃないか』「あの人も旦那さんが弱くツて……平常つまらない、つまらないツて、愚痴ばかしコボして……』

「何と言つても、女は長生するよ。直樹さんの家を御覧な、老祖母おばあさんが一人残つてる。強い証拠だ。大きな、肥つた体躯ふとからだをした他の内儀よそおかみさんなぞが、女というものは弱いもんですなんて、そんなことを聞くと俺は可笑うらやましく成つちまう……』

「でも、男の方が可羨うらやましい。二度と女なんかに生れて来るもんじや有りません」夕日が輝いて來た。食堂の玻璃窓は一つ一つ深い絵のよう見えた。屋外の町々は次第に薄暗い空氣の中へ沈んで行つた。やがて夫婦はこの食堂を下りた。物憂い生活に逆うような眼付をしながら、三吉は満腹した「妹」を連れて家の方へ帰つて行つた。

## 八

駒形から川について廻橋の横を通り、あれから狭い裏町を折れ曲つて、更に藏前  
の通りへ出、長い並木路を三吉叔父の家まで、正太は非常に静かに歩いた。

叔父は旅から帰つて来た頃であつた。正太は入口の庭のところに立つて声を掛けた。  
「叔父さん、御暇でしたら、すこし其辺を御歩きに成りませんか」

「御供しましよう——しかし、一寸まあ上り給えナ」

こう答えて、三吉は甥を下座敷へ通した。

家には客もあつた。お雪の父。この老人は遠く国から出掛けて、三吉の家で年越した  
母と一緒に成りに來た。それほど長く母も逗留していた。

「や、毎度いつも——」

と名倉の老人は正太に挨拶した。気象の壮んなこの人でも、寄る年波ばかりは争われ  
なかつた。鬚は余程白かつた。

二階へ上つて、叔父と一緒に茶を飲む頃は、正太は改まつてもいなかつた。旅から日に

焼けて来た叔父の顔を眺めながら、

「時に、叔父さん、吾家の阿爺も……いよいよ満洲の方へ行つたそうです」

こんなことを正太が言出したので、三吉は仕掛けた旅の話を止めた。

「阿爺もネ——」と正太は声を低くして、「ホラ、長らく神戸に居ましたろう。何か神戸でも失敗したらしい。トドのツマリが満洲行と成つたんです……実叔父さんを頼つて行つたものらしいんです……実は私も知らずにおりました。昨夕お倉叔母さんが見えまして——あの叔母さんも、お俊ちゃんはお嫁さんに成るし、寂しいもんですから、吾家で一晩泊りましてね——その時、話が有りました。実叔父さんから手紙で阿爺のことを知らせて寄したそうです……」

橋本の達雄と小泉の実とが満洲で落合つたということは、話す正太にも、聞く三吉にも、言うに言われぬ思を与えた。つくづく二人は二大家族の家長達の運命を思つた。

三吉は旅の話に移つた。一週間ばかり家を離れたことを話した。山間の谿流の音にしばらく浮世を忘れた連の人達も、帰りの温泉宿では家の方の話で持切つて、皆な妻子を案じながら帰つて来たなどと話した。

古い港の町、燈台の見える海、奇異な女の風俗などのついた絵葉書が、そこへ取出され

た。三吉は思いついたように、微笑を浮べながら、

「どうです、向島へ一枚出してやろうじや有りませんか」  
叔父の戯を、正太も興のあることに思つた。彼は自分で小金の宛名を認めて、裏の白い  
燈台の傍には「御存じより」と書いた。この「御存じより」が三吉を笑わせた。彼も何か  
書いた。

三吉は立ちがけに、

「豊世さんが聞いたら苦い顔をすることだろうネ……」

こう言つて復た笑つた。

正太はヒドく元気が無かつた。絵葉書を懷中ふところにしながら階下しだへ降りて、名倉の老人の  
側そばを通つた。三吉も、勝手の方で働いているお雪に言葉を掛けて置いて、甥おいと一緒に歩き  
に出た。

蔵つづきの間にある狭い路地を通り抜けて、二人は白壁の並んだところへ出た。そこは  
三吉がよく散歩に行く河岸かわしである。石垣の下には神田川が流れている。繁華な町中に、こ

んな静かな場処もあるかと思われる位で、薄く曇つた二月末の日が黒ずんだ水に映つていた。

船から河岸へ通う物揚場の石段の上には、切石が袖垣のようく積重ねてある。その端には鉄の鎖が繋いである。二人はこの石に倚凭つた。満洲の方の噂が出た。三吉は思いやるように、

「両雄相会して、酒でも酌むような時には——さぞ感慨に堪えないことだらうナ」

正太も思いやるような眼付をして、足許に遊んでいる鶏を見た。

水に臨んだ柳並木は未だ枯々として、蕭散な感じを与える。三吉はその枝の細く垂下つた下を、あちこちと歩いた。やがて正太の方へ引返して来た。

「正太さん、君の仕事の方はどうなんですか——未だ遊びですか」

こう言つて、石の上に巻煙草を取出して、それを正太にも勧めた。

正太は沮喪したように笑いながら、「折角、好い口があつて、その店へ入るばかりに成

つたところが……広田が裏から行つて私の邪魔をした。その方もオジヤンでサ」

「そんな人の悪いことを為るかねえ。手を携えてやつた味方同志じやないか」

「そりや、叔父さん、相場師の社会と来たら、実に酷いものです。同輩を陥入れること

なぞは、何とも思つてやしません。手の裏を反すようなものです……苟くも自己の利益に成るような事なら、何でも行ります……自分が手柄をした時に、そいつを誇ること、他の功名を嫉むこと、それから他の失敗を冷笑すること——親子の間柄でも容赦はない……相場師の神経質と嫉妬心と来たら、恐らく芸術家以上でしよう」

正太は叔父の心当りの人で、もし兜町に關係のある人が有らば、紹介してくれ、心掛けて置いてくれ、こんなことまで頼んで置いて、叔父と一緒に石段の傍を離れた。

二人は河口の方へ静かに歩るいて行つた。橋の畔へ出ると、神田川の水が落合うところで、歌舞歎樂の区域の一角が水の方へ突出て居る。その辺は正太にとつての交際場裏で、よく客を連れては遊興にやつて來たところだ。「橋本さん」と言えば、可成顔が売れたものだ。「しばらく來ないな——」と正太は呴きながら、いくらか勾配のある道を河口の方へ下りた。

隅田川が見える。白い、可憐な都鳥が飛んでいる。川上方に見える対岸の町々、煙突の煙なぞが、濁つた空氣を通して、ゴチャゴチャ二人の眼に映つた。

「河の香からして變つて來た。往時の隅田川では無いネ」と三吉は眺め入つた。

岸について両国の方へ折れ曲つて行くと、小さな公園の前あたりには、種々な人が往つたり来たりしている。男と女の連が幾組となく二人の前を通る。

「正太さん、君は女を見てこの節どんな風に考えるネ」

「さあねえ——」

「何だか僕は……女を見ると苦しく成つて来る」

こう話し話し、三吉は正太と並んで、青物市場などのあたりから、浜町河岸の方へ歩いて行つた。対岸には大きな煙突が立つた。昔の深川風の町々は埋立地の陰に隠れた。正太は川向に住んだ時のことと思出すという風で、あの家へはよく榎がやつて来て、壮んに氣さかき焰えんを吐いたことなどを言出した。

その時、彼は岸に近く添うて歩きながら、

「榎君と言えば、先生も引ひっこみ込つききりか……あれで、叔父さん、榎君の遊び方と私の遊び方とは全然違うんです……先生の恋には、選択は無い。非常に物慾の壯さかんな人なんですね……」

⋮

電車が両国の方から恐しい響をさせてやつて来たので、しばらく正太の話は途切れた。やがて、彼は微笑んで、

「そこへ行くと、私は選む……一流でないものは、妓おんなでも話せないような気がする……私は交際つきあいで引手茶屋なぞへ行きましても、クダラナいい女なぞを相手にして、騒ぐ気には成れません。隣室となりへ酒を出して置いて、私はひとりで寝転びながら本なぞを読みます。すると茶屋の姉さんが『橋本さん、貴方は妙な方ですネ』なんて……」

二人は電車の音のしないところへ出た。その辺は直樹の家に近かつた。昔時むかし、直樹の父親が、釣竿つりざおを手にしては二町ばかりある家の方からやつて来て、その辺の柳並木の陰で、僅かの閑ひまを自分のものとして楽んだものであつた。その人が腰掛けた石も、河岸の並木も大抵どうか成つて了つた。柳が二三本残つた。三吉と正太は立つて眺めた。潮が沖の方から溢あふれて来る時で、船は多く川上の方へ向つていた。

「大橋の火見櫓ひのみやぐらだけは、それでも変らずに有りますネ」と正太が眺めながら言つた。

青い潮の反射は直に人を疲れさせた。三吉は長く立つて見てもいられないような気がした。正太を誘つて、復た歩き出した。

大橋まで行つて引返して来た頃、三吉は甥の甥しおの萎しおれている様子を見て、「正太さん、向島にはチヨクチヨクお逢あいですか」と言つて見た。

「サツパリ」

「へえ、そんなかかネ」

「威勢の悪いこと夥おびしいんです。向島が私に、茶屋でばかり逢うのも冗費ついえだから、家へ来いなんて……そうなると、先方の母親おつかさんが好い顔をしませんや。それに、芸者屋へ入り込むというやつは、あまり気の利きいたものじや有りませんからネ」

と言いかけて、正太は対岸にある建物を叔父に指して見せて、

「あすこに会社が見えましょう。あの社長とかが向島を覲顧ひいきにしましてネ、箱根あたりへ連れてつたそうです。根引ねびきの相談までするらしい……向島が、どうしましようツて私に聞きますから、そんなことを俺に相談する奴が有るもんか、どうでもお前の勝手にするサ、そういう私が言つてやつた……でも、向島も可哀相です……私の為には借金まで背負つて、よく私に口説くどくんです、どうせ夫婦に成れる訳じやなし……」

正太は黙つて了つた。三吉も沈んだ眼付をして、しばらく物を言わずに歩いた。

「そうそう」と正太は思い付いたように笑い出した。「ホラ、此頃こないだ、雪の降つた日が有

りましたろう——ネ。あの翌日でサ。私が河蒸氣で吾妻橋まで乗つて、あそこで上ると、ヒヨイと向島に遭遇しました。でつくわ半玉を二三人連れて……ちつとも顔を見せないが、どうしたか、この雪にはそれでも来るだろうと思って、どれ程待つたか知れない、今日はもうどんなことがあつても放さない、そう言つて向島が私を捕えてるじや有りませんか。今日は駄目だ、紙入には一文も入つてやしない、と私が言いますとネ、御金のことなんぞ言つてるんじや有りませんよ、私がどうかします、一緒にいらしつて下さい、そう向島が言つて置いて、チヨイト皆さん手を貸して下さいッて、橋の畔たもとにいる半玉を呼んだというものです——到頭、あの日は、皆なで寄つて群つて私を捕虜にして了つた」

愛慾の為に衰すいもう耄もうしたような甥の姿が、ふとその時浮び上るように、三吉の眼に映じた。二人は両国の河蒸氣の出るところまで、一緒に歩いて、そこで正太の方は廻橋行に乗つた。白いペンキ塗の客船が石炭を焚たく船に引かれて出て行くまで、三吉は鉄橋の畔に佇立たたずんでいた。

笑つて正太と話していた三吉も、甥が別れて行つた後で、急に軽い眩暈めまいを覚えた。

頭脳あたま

の後部の方には、压しつけられるような痛みが残っていた。

疲労に抵抗するという眼付をしながら、三吉は元来た道を神田川の川口へと取つた。

潮に乗つて入つて来る船は幾艘となく橋の下の方へ通過ぎた。岸に近く碇泊する船もあつた。しばらく三吉は考えを纏めようとして、逆に流れて行く水を眺めて立つた。

「どうせ一生だ」

と彼は思った。夫は夫、妻は妻、夫が妻をどうすることも出来ないし、妻も夫をどうすることも出来ない。この考えは、絶望に近いようなもので有つた。

「ア——」

長い溜息を吐いて、それから三吉はサッサと家の方へ帰つて行つた。

丁度、名倉の老人が一杯始めた時で、膳を前に据えて、手酌でちびりちびりやつていた。  
「何卒御構いなく、私はこの方が勝手なんで御座いますから」

と老人は三吉に言つて、自分で徳利の酒を注いだ。

お雪は勝手の方から、何か手造りのものを皿に盛つて持つて來た。老人の癖で、醉が廻つて來ると皆なを前に置いて、自分の長い歴史を語り始める。巨万の富を積むに到るまでの経歴、遭遇した多くの艱難、一門の繁栄、隠居して以來時々試みる大旅行の話など、

それに身振手真似まねを加えて、楽しそうに話し聞かせる。服装なりなどはすこしも気に留めない  
ような、質素な風采ふうさいの人であるが、どこかに長者らしいところが具わっていた。

「復た、阿爺おとうさんの十八番おはこが始まつた」と母そばも傍そばへ來た。

「しかし、阿爺さん」と三吉は老人の前に居て、「あの自分で御建築おたてに成つた大きな家が、  
火事で焼けるのを御覽なすつた時は——どんな心地こころもちがしましたか」

「どんな心地もしません」老人は若い者に一步も譲らぬという調子で言つた。「あの家は  
——焼けるだけの運を持つて來たものです——皆な、そういう風に具わつて來るものです」  
往時むかしは大きな漁業を営んで、氷の中にまで寝たというこの老人の豪健な氣魄きはくと、絶念の  
早さとは年を取つても失われなかつた。女達の親しい笑声が起つた。そこへ種夫と新吉が  
何か膳の上の物を狙つて來た。

「御行儀悪くしちや不可いけないよ」とお雪が子供を叱るように言つた。

「種ちやんか。新ちやんも大きく成つた。皆な好い児だネ」と老人は酔つた眼で二人の孫  
の顔を眺めて、やがて酒さかなの肴を子供等の口へ入れてやつた。

「コラ」と母は置ねらを叩く真似たたした。

子供等は頬張りながら逃出して行つた。下婢おんなが洋燈ランプを運んで來た。最早酒も沢山だ、と

老人が言つた。食事を終る毎に、老人は膳に對して合掌した。

その晩、残つた仕事があると言つて、三吉が二階へ上つた頃は、雨の音がして來た。彼は下婢に吩咐いいつけて階下から残つた洋酒を運ばせた。それを飲んで疲勞つかれを忘れようとした。

お雪も幼い銀造を抱いて、一寸上つて來た。

「どうだ——」と三吉はお雪に、「この酒は、歐羅巴ヨーロッパの南で産る葡萄酒ぶどうしゅだというが——非常に口あたりが好いぜ。女でも飲める。お前も一つ御相伴お相伴しないか」

「強いんじや有りませんか」とお雪は子供を膝ひざに乗せて言つた。

雨戸の外では、蕭しどしと々降りそそぐ音が聞える。雨は霧みぞれに変つたらしい、お雪は寒さむそうに震えて左の手で乳吞児ちのみごを抱き擁かかえながら、右の手に小さなコップを取上げた。酒は燈火あかりに映つて、熟した果実よりも美しく見えた。

「オオ、強い」

とお雪は無邪気に言つてみて、幾分か苦味のある酒を甘そうに口に含んだ。

「すこし頂いたら、もう私はこんなに紅く成つちやつた」

と復たお雪が快活な調子で言つて、熱つて來た頬を手で押えた。三吉は静かに妻を見た。

「相談したい。旅舍の方へ来てくれ」 こういう意味の葉書が森彦の許から来た。丁度名倉の老人は、学校の寄宿舎からお幾を呼寄せて、母と一緒に横浜見物をして帰つて来た時で、長火鉢の側に煙管を咬えながら、しきりとその葉書を眺めた。

「とにかく、俺は行つて見て来る」

こう三吉が妻に言つて置いて、午後の三時頃に家を出た。

森彦は旅舎の方で弟を待受けていた。二階には、相変らず熊の毛皮なぞを敷いて、窓に向いた方は書斎、火鉢の置いてあるところは応接間のように、一つの部屋が順序よく取片付けてあつた。三吉が訪ねて行つた時は、茶も入れるばかりに用意してあつた。

「や」

と森彦は弟を迎えた。

何時まで経つても兄弟は同じような気分で向い合つた。兄の頭は余程禿げて来た。弟の鬚には白いやつが眼につくほど光つた。未だそれでも、森彦はどこか子供のように三吉を思つていた。弟の前に菓子なぞを出して勧めて、

「今日お前を呼んだのは他でも無いが……実はエムの一件でネ」

彼は切出した。

森彦が言うには、今度という今度は話の持つて行きどころに困った。日頃金主と頼む同志の友は病んでいる。一時融通の道が絶えた、ここを切開いて行かないことには多年の望を遂げることも叶わぬ……人は誰しも窮する時がある、それを思つて一肌脱いでくれ、親類に迷惑を掛けるというは元より素志に背くが、二百円ばかり欲しい、是非頼む、弟に話した。

三吉は困つたような顔をした。

「お前の収入が不定なことも、俺は知つてゐる。しかしこの際どうにか成らんか。一時のことだ——人は大きく困らないで、小さく困るようなものだよ」と森彦は附添して言つた。しばらく三吉は考えていたが、やがて兄の勧める茶を飲んで、

「貴方のは人を助けて、自分で困つてる……今日までの遣方こんにち やりかたで行けば、こう成つて来るのは自然の勢じや有りませんか。私はよくそう思つんですが、貴方にしろ、私にしろ、吾儕われわれ兄弟の一生……いろいろ人の知らない苦労をして……その骨折が何に成つたかといふに、大抵身内のもののに費されて了つたようなものです」

「今更そんなことを言つても仕方が無いぞ」

「いえ、私はそうじや無いと思ひます。稀<sup>たま</sup>にはこういうことも思つて、心の持ち方を変え  
るが好いと思ひます」

「でも俺は差当り困る」

「いえ、差当つてのことで無く、根本的に——」

森彦は弟の言うことを汲<sup>くみ</sup>取りかねるという風で、自分の部屋の内を見廻して、

「お前はそう言うが……俺は身内を助けるから、こうして他人から助けられている。暮で  
言え、まあ捨石だ。俺が身内を助けるのは、捨石を打つてんのだ」

「どうでしよう、その暮の局面を全然<sup>すっかり</sup>変えて了つたら——」

「どうすれば可いと言ふんだ、一体……」

「ですから、こう新生活を始めてみたらと思うんです——田舎<sup>いなか</sup>へでも御帰りに成つたらどうでしよう——私はその方が好さそうに思ひます。どこまでも貴方は、地方の人で可いじ  
や有りませんが、小泉森彦で……それには、田舎へでも退いて、身の閑<sup>からだひま</sup>な時には耕す、果  
樹でも何でも植える、用のある時だけ東京へ出て来る、それだけでも貴方には好かろうと  
思うんです」

「何かい、お前は俺にこの旅舎を引揚げろと言うのかい」と言つて、森彦は穴の開くほど

弟の顔を眺めて、「そんなことが出来るものかよ。今ここで俺が田舎へでも帰つて御覧……」

「面白いじゃ有りませんか」

「馬鹿言え。そんなことを俺が為ようものなら、今日まで俺の力に成つてくれた人は、必と驚いて死んで了う……」

その時、三吉は久し振だから 鰻飯を奢ると言出して、それを女中に命ずるようになると、兄に頼んだ。

「稀にはこういう話もしないと不可」と三吉が尻を落付けた。「飯でも食つて、それから復た話そうじや有りませんか」

森彦は手を鳴らした。

夕飯の後、三吉は兄が一生に遡つて、今日に到るまでのことを委しく聞こうとした。森彦が事業の主なものと言えば、八年の歳月を故郷の山林の為に費したことで有つた。話がその事に成ると、森彦は感極まるという風で、日頃話好な人が好く語れない位であつた。

巣山、明山の差別、無智な人民の盜伐などは、三吉も聞知つてのことであるが、猶森彦は地方を代表して上京したそもそもから、終には一文の手宛てあてをも受けず、すべて自弁でこの長い困難な交渉に当つたこと、その尽力の結果として、毎年一万円ずつの官金が故郷の町村へ配布されていること、多くの山林には五木ごぼくが植付けられつつあることなどを、弟に語り聞かせた。

「あの時」と森彦は火鉢の上で両手を揉んで、「Mさんが郷里くにの総代で俺の許ところへ来て、小泉、貴様はこの事件の為に何程費いくらうかつた、それを書いて出せ、と言うから、俺は総計で三万三千円に成ると書付を出した。その話は今だにその今まで、先方さきで出すとも言わなければ、俺も出せとも言わない……で、知事が氣の毒に思つて、政府の方から俺の為に金を下げるよう、尽力してくれた。その高が六千円サ。ところがその金が郷里くにの銀行宛で来たといふものだ。ホラお前も知つてゐる通り、正太の父親おとうさんがああいう訳で、あの銀行に証文が入つてゐる、それに俺が判を捺いてる。そこで銀行の連中がこういう時だと思つて、その六千円を差押えて了つた……到頭俺は橋本の家の為に千五百円ばかり取られた——苛酷ひどいことをする……何の為にその金が下つたと思うんだ。一体誰の為に俺が精力を注いだと思うんだ……」

「何故、森彦さん、その時自分を投出して了わなかつたものですか。とにかくこれだけの仕事をした、後は宜しく頼む、と言つてサツサと旅舎を引揚げたら、郷里の方でも黙つては置かれますまい。その後仕末をする為に、今度は困つて來た……何か儲仕事をしなけれどや成らんと成つて來た……」

「まあ、言つてみればそんなものだ。俺は金を取る為に、あの事業を為したんでは無いで——儲ける？ そんなことを念頭に置いて、誰があんな事業に八年も取付いていられるものか。まだ俺は覚えているが、夜遅く独りで二重橋の横を通つて、俺の精神を歌に読んだことがある。あの時、自分でそれを吟じて見ると、涙がボロボロ零れて……」

自分で自分を憐む<sup>あわれ</sup>ような涙が、森彦の頬<sup>ほお</sup>を流れて來た。

「畢竟<sup>つまり</sup>、これは俺の性分から出たことだ」と復た兄は弟の方を見た。「一度始めた仕事は——それを成し遂げずには置かれない。俺の精神が郷里の人々に知られなくとも、可い。俺はもつと大きく考へてる積りだ。どうせ郷里の人達には解らんと思つてるんだ。百年の後に成つたら、あるいは俺に感謝する者が出て来る……」

「森彦さん、そんなら貴方は何處<sup>どこ</sup>までもその精神で通すんですネ。自分の歩いて來た道を、何處までも見失わないようにするんですネ。しかし、後仕末はどうする。私はそれを貴方

の為に心配します」

「だから、今度は儲けるサ。儲ける為に働くサ」

「ところが、それが貴方にはむずかしいと思います。貴方はやっぱり儲ける為に働く人では無いと思います——」

「いや、そんなことは無い。今までは儲けようと思わなかつたから、儲からなかつた。これからは大いに儲けようと思うんだ——ナニ、いかないことは無い」

「どうも私は、今までと同じように成りやしないかと思つて、それで心配してゐんです……何だか、こう、吾儕われわれには死んだ阿爺おやじが附纏つきまとつてゐるような気がする……何処へ行つて、何をしても、必きつと阿爺が出て来るような気がする……森彦さん、貴方はそんなこと思いませんかネ」

兄は黙つて弟の顔を見た。

「私はよくそう思います」と三吉は沈んだ眼付をして、「橋本の姉さんがああしているのと、貴方がこの旅舎やどやに居るのと、私が又、あの二階で考え込んでゐるのと——それが、座敷牢の内に悶いていた小泉忠寛と、どう違いますかサ……吾儕もがは何処へ行つても、皆なふる旧い家を背負つて歩いてるんじや有りませんか」

「そうさナ……」

「そいつを私は**ぶちこわ**したいと思うんです。折があつたら、貴方にも言出してみようみようと思つていたんです……」

「待つてくれ——俺も直き五十だよ。五十に成つてサ、未だそれでも俺の思うように成らなかつたら、その時はお前の意見を容いれる。田舎へでも何でも引込む。それまで待つてくれ」

「いえ、私はそういう意味で言つてるんじゃ無いんです……」

「それはそうと、先刻の金のことはどうしてくれる」

「何とか工面して見ましよう。いずれ御返事します」

「そんなことを言わないので、確かに是処で引受けて帰つてくれ」と言つて、森彦は調子を変えて、「今日は、貴様は、ドエライやつを俺の許へ打込みに来たナ——いや、しかし面白かった」

兄は高い声で笑つた。

晩の八時過に、三吉はこの旅舎を辞した。電車で帰つて行く途中、彼は兄の一生を思つづけた。家へ入ると、お雪は夫から帽子や外套を受取りながら、

「森彦さんのところでは、どんな御話が有りました」と尋ねた。

「ナニ、金の話サ」と三吉は何気なく答える。

「大方そんなことだろうツて、阿爺さんも噂していましたツけ——阿爺さんが貴方のこと

を、『父さんも余程兄弟孝行だ』なんて——」

夜中から降出した温暖な雨は、翌朝に成つて一旦休んで、更に淡い雪と変つた。

午後に、種夫や新吉は一人ずつ下婢に連れられて、町の湯から帰つた。銀造も洗つて貰いに行つて來た。お雪は傘をさして、終に独りで泥濘つた道を帰つて來た。

明るい空からは、軽い綿のようなやつがポタポタ落ちた。お雪は足袋も穿いていなかつた。多くの女のように、薄着でもあつた。それでも湯上りのあたたかさと、燃えるような身体の熱とで、冷々とした空気を楽しそうに吸つた。濡れた町々の屋根は僅かに白い。雪は彼女の足許へも来て溶けた。この快感は、湯気で蒸された眼ばかりでなく、彼女の肌膚の渴をも癒した。

「長い湯だナア」と母は、帰つて來たお雪を見て、叱るように言つた。

「だつて、子供を連れてるんですもの」

こうお雪は答えて置いて、勝手の方へ通り抜けた。

冷い水道の水はお雪を蘇<sup>いきかえ</sup>生るよう<sup>に</sup>させた。彼女は額の汗をも押<sup>おし</sup>拭<sup>ぬぐ</sup>つた。箒<sup>たんす</sup>の上には、家のものがかかるがわる行く姿見がある。彼女はその前に立つた。細い黄楊<sup>つげ</sup>の鬚<sup>ひんか</sup>搔<sup>き</sup>を両方の耳の上に差した。濡れて乱れたような髪が、その鏡に映つた。

「叔母さん、お湯のお帰り？」

こう正太が、お雪の知らないうちに入つて来て、声を掛けた。正太は叔母の後を通過ぎて、楼梯<sup>はしごだん</sup>を上つた。

「正太さん、よくこの道路<sup>みち</sup>の悪いのに、御出掛でしたネ」

と三吉は二階に居て迎えた。

「ええ、叔父さんの許より外に、氣を紛らしに行く処も有りませんから」

こう言つて、正太は、長い紺色の絹を首に巻付けたまま、叔父の前に坐つた。部屋の障子<sup>ガラス</sup>の玻璃<sup>ガラス</sup>を通して、湿つた屋外<sup>そと</sup>の空氣が見られる。何となく正太は向島の方へ心を誘われるような眼付をしていた。

「いかにも春の雪らしい感じがしますネ」と正太は叔父と一緒に屋外<sup>そと</sup>を眺めながら言つた。

「正太さん、昨日僕は森彦さんの宿へ行つてネ。金の話が出ました。その序に、種々なことを話し込んだ。田舎へ行つたらどうです、それまで僕は言つて見た——午後の三時から八時頃まで話した」

「や、そいつはエラかつた。三時から八時に渡つたんじゃ——どうして。森彦叔父さんと貴方の対話が眼に見えるようです」

「しかし、話してみて、互に了解する場合は少いネ。僕の方で思うことは、眞實に森彦さんには通じないような気がした。言い方も悪かつたが。唯、田舎へでも引込め——そういう意味に釈とられて了つた」

「そりや、叔父さん、森彦さんには出来ない相談です。あの叔父さんは、第一等の旅館に泊つて、第一等の宿泊料を払つて行く人です。苦しい場合でも、そうしないでは気の済まない人です。草鞋わらじ穿ぱきで、土いじりでもしながら、片手間に用務を談ずるなんて、そういう氣風の人じや有りません」

「極く平民的な人のようだが、一面は貴族的だネ。どうしても大きな家に生れた人だネ。すこし他ひとが難渋して来ると、なアに俺がどうかしてやるなんて——御先祖の口くちぶりぶりだ」

こう話し合つて見ると、二人は森彦のことと言つていながら、それが自然と自分達のこ

とに成つて来るような気がした。旧家に生れたものでなければ無いような頽廢の氣——それを二人は互に嗅ぎ合う心地もした。

「森彦さんから、僕に二百円ばかり造れと言うんサ」と三吉は以前の話に戻つて、「それがネ。眞實にあの人の為に成ることなら、どんなことをしても僕は造るサ。特にその為に一作するサ。どうも今日の状態じや、復た前と同じことに成りやしないか……それに、僕だつて、君、ヤリキレやしないよ……」

と言いかけて、暫時三吉は聞耳を立てた。階下では老人の咳払が聞える。

「名倉の阿爺さんなぞは、君、今に僕が共潰れに成るか成るかと思つて、あの通りじつと黙つて見てる……決して僕を助けようとはしない。實に、強い人だネ。僕もまた、瘦我慢だ。仕事のことでの阿爺さんに助けられても、暮し向のことや何かで助けてくれと言つたことは無い。ああして、下手に助けないで、熟じつと黙つて見てる——あそこはあの阿爺さんの面白いところさネ」

その時、表の戸を開けて入つて来る客の声がした。階下では皆なの話声が起つた。

「ああ、※さんだ」

と三吉が正太の顔を見ながら言つてはいるところへ、お雪はそれを告げに來た。三吉は正

太に会釈して置いて、一寸階下へ降りた。

老人や母や勉は長火鉢の周囲に集つていた。三吉は友達に話し掛けるような調子で、勉に話し掛けた。

「へえ、今度も商用の方ですか」

「ええ、毎年一度や二度は出て来なけれど成りません」と勉は商人らしい調子で言つた。  
 「時に小泉さん、※の兄さんから御言伝がありました。貴方の御宅でも女中が御入用だそうですから——近いうちに一人連れて御出掛に成るそうです」

「そうですか、そいつは難有い。名倉の兄さんもどうしますかね。相変らず御店の方ですかネ」

「大将も多忙しがつています」

こんな調子で、三吉は打解けて話した。彼はお雪を傍へ呼んで、勉を款待させて、復た正太の居る方へ上つて行つた。

「ええ、福ちゃんの旦那さんです。彼方の方の人達は大阪の商人に近いね。皆な遣方

がハゲしい」

と三吉は正太の前に復つて言つた。

未だ正太は思わしい仕事も無く、ブラブラしていた。骨を折つて口を見つけて飛び歩こうともしていなかつた。彼はいくらか宴やつれても見えた。うたい謡の会の噂、料理の通、それから近く欧洲を漫遊し帰つて来たある画家の展覧会を見たことなど、雪の日らしい雑談をした後で、正太は帰つて行つた。

修業ざかりの娘を二人まで控えた森彦の苦んでいる姿が、三吉の眼にチラついた。彼は兄を助けずにいられないような気がした。名倉の両親に隠すようにして金をつくることを考えた。

※の兄と連立つて、名倉の母が長逗留ながとうりゅうの東京を去る頃は——三吉は黙つて考えてばかりいる人でもなかつた。「随分、父さんはコワい眼付をする」と名倉の母はよく言つたが、そういう眼付で膳に對つて、飯を食えば直に二階へ上つて行つて了うような——最早そんな人でもなかつた。

時には、樓梯はしどらを踏む音をさせて、用もないのに三吉は二階から降りて來た。下座敷の柱に倚よりかかつて、

「お雪、俺とお前と何方が先に死ぬと思う」

「どうせ私の方が後へ残るでしょうから、そうしたら私はどうしよう——何にも未だ子供のことは為して無いし——父さんの書いた物が遺つたつて、それで子供の教育が出来るか、どうか、解らないし（まあ、覚束ないと思わなければなりません、何処の奥さんだつて困つていらっしゃる）と言つて、女の教師なぞは私の柄に無い——そうしたら私は仕方が無いから、女髪結にでも成ろうかしら——」

夫婦は互に言つてみた。

名倉の老人は、母だけ先へ返して、自分一人、娘の家に残つた。若い時から鍛えた身体だけあつて、三吉の家から品川あたりへ歩く位のことは、何とも思つていなかつた。疲れるということを知らなかつた。朝は早く起きて、健脚にまかせて、市中到る処の町々、参りつつある道路、新しい橋、家、水道、普請中の工事なぞを見て廻つた。東京も見尽したと老人は言つていた。

「でも、阿爺さんは、割合に歩かなく成りました——あれだけ年をとつたんですね」

とお雪は言つた。

いよいよ老人も娘や孫に別れを告げて帰国する日が來た。※の兄が連れて來てくれた下お

婢<sup>んな</sup>に、留守居を頼んで置いて、三吉夫婦は老人と一緒に家を出た。子供は、種夫と新吉と二人だけ見送らることにした。

「老爺<sup>おじい</sup>さんが彼方<sup>あつち</sup>へ御帰りなさるんだよ——種ちゃんも、新ちゃんも、サツサと早く歩きましょ<sup>う</sup>う<sup>う</sup>ネ」

とお雪は歩きながら子供に言つて聞かせた。半町ばかり行つたところで、彼女は新吉を背中に乗せた。

老人と三吉は、時々町中に佇立<sup>たたず</sup>んで、子供の歩いて来るのを待つた。幾羽となく空を飛んで来た鳥の群が、急に町の角を目がけて、一斉に舞い降りた。地を摺<sup>す</sup>るかと思うほど低いところへ来て、鳴いて、復た威勢よく舞い揚つた。チリヂリバラバラに成つた鳥は、思いの軒を指して飛んだ。

「最早<sup>つばめ</sup>燕<sup>つばめ</sup>が来る頃に成りましたかネ」

と三吉は立つて眺めた。

電車で上野の停車場<sup>ステーション</sup>まで乗つて、一同は待合室に汽車の出る時を待つた。老人はすこしも静止していなかつた。どうかすると三吉の前に立つて、若い者のような声を出して笑つた。

お雪の側には、二人の子供がキヨロキヨロした眼付をして、集つて来る旅客を見ていた。老人はその方へ行つた。かわるがわる子供の名を呼んで、

「皆な温順おとなしくしてお出——復た老爺おじいさんが御土産おみやを持つて出て来ますぜ」

「名倉の老爺さんが復た御土産を持つて来て下さるトサ」とお雪は子供に言い聞かせた。

「この老爺さんも、未だ出て来られる……」

こう老人はお雪を見て言つて、復た老年らしい沈黙に返つた。

発車の時間が来た。三吉夫婦はプラットフォムへと急いだ。

「種ちゃんも、新ちゃんも、老爺さんに左様ならするんだよ」

と三吉は列車の横に近く子供を連れて行つた。お雪は新吉を抱上げて見せた。

白い鬚ひげの生えた老人の笑顔が二等室の窓から出た。老人は窓際につかまりながら、娘や孫の方をよく見たが、やがて自分の席に戻つて、暗然と首を垂れた。駅夫は列車と見送人の間を馳せ歩いた。重い車の廻転する音が起つた。

「阿爺おじいさんも——ひよつとすると、これが東京の見納めだネ」

と三吉は、妻と一緒に見送つた後で、言つた。

五月に入つても、未だ正太は遊んでいた。森彦の方は、新しい事業に着手すると言つて、  
勇んで名古屋へ發つて行つた。

「正太さんもどうか成らないか。ああして遊ばせて置くのは、可惜いものだ」と三吉は心配  
そうにお雪に話して、甥の様子を見る為に、駒形の方へ出掛けた。

例の石垣の下まで、三吉は歩いた。正太の家には、往来からよく見えるところに、「貸  
二階」とした札が出でてある。何となく家の様子が寂しい。三吉が石段を上つて行くと、  
顔を出した老婆まで張合の無さそうな様子をしていた。

正太夫婦は揃つて町へ買物に出掛けた時であつた。程なく帰るであろう、という老婆を  
相手にして、しばらく三吉は時を送つた。二階は貸すと見えて、種々な道具が下座敷へ來  
ている。玻璃障子のところへ寄せて、正太の机が移してあつて、その上には石菖蒲の鉢  
なぞも見える。水色のカアテンも色の褪せたまま掛つてゐる。

老婆は茶を勧めながら、

「是方へ私が御奉公に上りました時は、まあこんな仲の好い御夫婦もあるものでしようか、  
とそう思いまして御座いますよ。段々御様子を伺つて見ますと……私はすつかり奥様の方

に附いてしまいました。そりや、貴方、女はどう致したつて、女の味方に成りますもの……

この苦勞した人は、夫婦の間に板挟みに成つたという風で、物静かな調子で話した。

主人思いの様子は、奉公する人とも見えなかつた。

「でも、是方の旦那様も、眞實に好い御方で御座いますよ」

と復た老婆が言つた。

三吉は玻璃障子のところへ行つて、眺めた。軒先には、豊世の意匠と見えて、真綿に包んだ玉が釣つてある。その真綿の間から、青々とした稗の芽が出ている。隅田川はその座敷からも見えた。伊豆石を積重ねた物揚場を隔てて、初夏の水が流れっていた。

「そう、三吉叔父さんがいらしつて下すつたの」

と豊世は、夫の後に隨つて、町から戻つて來た。

「奥様、先程も一人御二階を見にいらしつた方が御座いました」

と老婆が豊世に言つたので、正太夫婦は叔父の方を見た。夫婦の眼は笑つていた。

川の見えるところに近く、三吉は正太と相対に坐つた。その時正太は苦しそうな眼付をして、生活を縮める為にここを立退こうかとも思つたが、折角造作に金をかけて、風呂まで造つて置いて、この楽しい住居を見捨てるのも残念である、暫時しばらく二階を貸すこと

にした、と叔父に話した。

「どうしていらっしゃるかと思つて、今日は家から歩いてやつて来ました」と三吉が言つた。「途中に芥子を鉢植にして売つてる家がありました。こんな町中にもあんな花が咲くか、そう思つてネ、めずらしく山の方のことまで思出した。ホラ、僕等が居た山家の近所には芥子畠なぞが有りましたからネ」

「叔父さん、私共ではこういうものを造りました」と豊世は叔父の後へ廻つて、軒先の真綿の玉を指してみせた。「稗時ですよ——往来を通る人が皆な妙な顔をして見て行きます」

正太は何を見ても侘しいという風であつた。豊世に、「彼方へいつてお出いで」と眼で言わせて置いて、

「実は叔父さん、私の方から御宅へ伺おうと思つていたところなんです。未だ御話も致しませんでしたが、近いうちに私も名古屋へ参るつもりです。彼方の方で、来ないか、と言つてくれる人が有りましてネ……まあ二三年、私も稽古のつもりで、彼方の株式仲間へ入つて見ます」

「そいつは何よりだ」と三吉が頬もしそうに言つた。

正太は心窺かに活動を期するという様子をした。自分で作った日露戦争前後の相場表だの、名古屋から取寄せている新聞だのを、叔父に出して見せて、

「叔父さんからも御話がよく有りますから、今度は私もウンと研究して見ます。下手に周章わてない積りです。この通り、彼方の株の高低にも毎日注意を払っています……『どうして、橋本は行<sup>や</sup>るぜ、彼はナカナカの者だぜ』——そう言つて、是方の連中なぞは皆な私に眼を着けてる……」

「それに、君、森彦さんは彼方へ行つてるしサ——何かにつけて相談してみるサ」「そうです。森彦叔父さんと私とは、全く別方面ですから、仕事は違いますけれど……あの叔父さんも、いよいよ今度が最後の奮闘でしよう——私はそう思います——まあ、彼方へ出掛けて、あの叔父さんの働き振も見るんですね」

「でも、あの兄貴も……変つた道を歩いて行く人さネ。何を<sup>し</sup>為てるんだか家のものにまで解らない……それを平氣でやつてる……あそこは面白いナ」

「何かこう大きな事業をしそうな人だなんて、豊世なぞもよくそう言つています」

「あの兄貴は一生夢の破れない人だネ——あれで通す人だネ——しかし、ナカナカ感心なところが有るよ。お俊ちゃんの家なぞに対しては、よくあれまでに尽したよ。大抵の者な

ライヤに成つちまう……」

豊世が貴い物だと言つて、款待顔もてなし顔に羊羹ようかんなぞを切つて來たので、二人は他の話に移つた。

「ここまで來て、眺望ながめの好い二階を見ないのも残念だ」という叔父を案内して、一寸豊世は樓梯はしだんを上つた。何となく二階はガランとしていた。額だけ掛けてあつた。三吉は川に向いた縁側の欄てすりのところへ出てみた。

「豊世さん、顔色が悪いじや有りませんか。どうかしましたかネ」

「すこし……でも、この節は宅もよく家に居てくれますよ……何事も為ませんでも、家で御飯を食べてくれるのが私は何よりです……」

叔父と豊世とはこんな言葉を替しながら、薄く緑色に濁つた水の流れて行くのを望んだ。豊世は愁うれわしげに立つていた。

「どうかしますと、私は……こう胸がキリキリと傷んで来まして……」

こう訴えるような豊世の顔をよく見て、間もなく三吉は正太の方へ引返した。

玄関の隅すみには、正太が意匠した覗具おもちゃの空箱が沢山積重ねてあつた。郷里くにから取寄せた橋本の薬の看板も立掛けてあつた。復た逢う約束をして、三吉は甥に別れた。

「正太さんを褒めるのは貴方ばかりだ」

お雪が自分の家の二階で、夫に話しているところへ、勝手を知った豊世が階下から声を掛けた。上つて来た。

「叔母さん、御免なさいよ。御断りも無しで入つて来て——」

と豊世は親しげな調子で挨拶した。

正太が名古屋へ発つてから、こうして豊世はよく訪ねて来るようになつた。長いことお雪は豊世に対して、好嫌の多い女の眼で見ていた。「豊世さんも好いけれど……」とかなんとか言つていたものであつた。正太と小金の関係を知つてから、急にお雪は豊世の味方をするようになつた。豊世の方でも、「叔母さん、叔母さん」と言つて、旅にある夫の噂うわさだの、留守居の侘しさだの、二階を貸した女の謡の師匠の内幕だのを話しに来る。正太が発はつ、一月あまり経つと、最早町では青梅壳の声がする。ジメジメとした、人の氣を腐らせるような陽気は、余計に豊世を静止させて置かなかつた。

「豊世さん——正太さんの許から便りが有りましたぜ」

と三吉に言われて、豊世は叔父の方へ向いた。風呂敷包の中から小説なぞを取出して、それを傍に居る叔母へ返した。

三吉は笑いながら、「何か貴方は心細いようなことを名古屋へ書いて遣りましたネ」「何とか叔父さんの許へ言つて参りましたか」

「正太さんの手紙に、『私は未だ若輩の積りで、これから大に遣ろうと思つてゐるのに、妻は最早老<sup>おい</sup>に入りつつあるか……そう思うと、何だか感傷の情に堪<sup>え</sup>ない』——なんて」それを聞いて、豊世はお雪と微笑<sup>えみ</sup>を換<sup>かわ</sup>した。名古屋から送るべき筈<sup>はず</sup>の金も届かないことを、心細そうに叔父叔母の前で話した。

二階から見える町家の屋根、窓なぞで、湿つていないものは無かつた。空には見えない雨が降つていた。三人は、水底<sup>みなそこ</sup>を望んでいるような、忍耐<sup>こらえじよう</sup>力の無い眼付をして、時々話を止めては、一緒に空の方を見た。どうかすると、遠く濡れた鳥が通る。それが泳いで行く魚の影のように見える。

「豊世さん——一體貴方は向島のことをどう思つてゐんですか」三吉が切出した。

「向島ですか……」と豊世は切ないという眼付をして、「何だか私は……宅に捨てられるような気がして成りませんわ……」

「馬鹿な——」

「でも、叔父さんなどは御存ないでしようが、宅でまだ川向に居ました時分——丁度私は一時郷里へ帰りました時——向島が私の留守へ訪ねて来て、遅いから泊めてくれと言つたそうです。後で私はそのことを先の老婆から聞きました。よく図々しくも、私の蒲団などに眠られたものだと思いましたよ。そればかりじやありません、宅で向島親子を芝居に連れてく約束をして、のッぴきならぬ交際だから金を作れと言うじや有りませんか。私はそんな金を作るのはイヤですツて、そう断りました。すると、宅が癪癪を起して、いきなり私を……叔父さん、私は擲られた揚句に、自分の着物まで質に入れて……」

豊世はもう語れなかつた。瀟洒な襦袢の袖を出して、思わず流れて来る涙を拭つた。  
「叔父さん——眞実に教えて下さいませんか——どうしたら男の方の気に入るんでしょうねえ」

と復た豊世は力を入れて、眞実男性の要求を聞こうとするように、キツと叔父を見た。  
「どうしたら気に入るなんて、私にはそんなことは言えません」と三吉は頭を垂れた。  
「でも、ねえ、叔母さん——」と豊世はお雪に。

「亭主を離れて観るより外に仕方が無いでしよう」と三吉はどうすることも出来ないよう

な語氣で言つた。

「そんなら、叔父さんなんか、どういう氣分の女でしたら面白いと御思ひなさるんですか」「そうですネ」と三吉は笑つて、「正直言うと、これはと思うような人は無いものですね……昔の女の書いたものを見ると、でも面白そうな人もある。八月のさかりに風通しの好いところへ花<sup>はな</sup>筵<sup>むしろ</sup>を敷いて、薄化粧でもして、サツパリとした物を着ながらひとりで寝転<sup>ねころ</sup>んで見たなんて——私はそういう人が面白いと存ります」

豊世とお雪は顔を見合せた。

子供の喧嘩<sup>けんか</sup>する声が起つた。それを聞きつけて、お雪は豊世と一緒に階下<sup>した</sup>へ降りた。茶の用意が出来たと言わされて、三吉も下座敷へ飲みに来た。

「馬鹿野郎！」

いきなり種夫はそいつを父へ浴せ掛けた。

「種ちゃんは誰をつかまえても『馬鹿野郎』だ」と三吉は子供を見て笑つた。「でも、お

前の『馬鹿野郎』は可愛らしい『馬鹿野郎』だよ」

「種ちゃんの口癖に成つて了いました」とお雪は豊世に言つて聞かせた。「御客のある時なぞは、<sup>ほんと</sup>眞實に困りますよ」

「豊世さん、煙草はいかが」

と三吉は巻煙草を取出して、女の客や妻の前でウマそうに<sup>ふか</sup>燻した。

「一本頂きましようか」と豊世は手を出した。「自分じやそう吸いたいとも思いませんが、<sup>ひとさま</sup>他様が燻していらっしゃると、つい頂きたく成る」

お雪も夫の巻煙草を分けて貰つて、左の人差指と中指との間に挿んで吸つた。

「あれで宅はどういうものでしよう」と豊世は叔父に、「名古屋へ参ります前なぞは、毎日寝てばかりおりましたよ。叔父さんが寝てるが可いッて仰<sup>おつしや</sup>つたから、俺は寝てるなんて、そんなことを申しまして……」

「正太さんも一時は弱つてましたネ」と三吉は心配らしく、「僕の家なぞへ来てもヒドく元気の無いことがあつた」

「宅がよく申しましたよ、<sup>こちら</sup>是方へ上つて御話をすると、自分の<sup>ふさ</sup>塞がつた心が開けて来るなんて、そう言つちやあ吾家を出掛けました……どうかすると、宅が私に、『三吉叔父さんは僕の恋人だ』なんて……」

三吉は噴飯ふきだして了つた。お雪は巻煙草の灰を落しながら、二人の話を聞いていた。

「もうすこし宅も仕事を為しそうなものですが」と豊世は考えるように。

「畢竟つまり、樂むように生れて来た人なんですね。橋本のような旧い家に、ああいう人が出来たんですね」

「……」

「吾儕われわれの親類の中で、絵とか、音楽とか、芝居とかに、あの人ぐらい興味を持つ人は有りません。そのかわりああいう人に仕事をさせると——どうかすると、非常に器用な素人しろうではあっても、無器用な専門家には成れないことが有ります」

「そういうものでしようかねえ……」

「一体、正太さんは人懷ひとなつこい——だからあんなに女から騒がれるんでしょう」

豊世は苦いような、嬉しいような笑い方をした。

入口の庭の隅には、僅かばかりの木が植えてある。中でも、八手やつだけは勢が好い。明るい新緑は雨に濡れて透き徹とおる葉が障子の玻璃ガラスに映つて、何となく部屋の内を静かにして見せた。その静かさは、あだかも蛇が住む穴の内のような静かさであった。

お雪は起つて行つて、お俊夫婦の写真を取出して來た。新郎は羽織袴、新婦も裙の長い着物で、並んで撮れていた。

「お俊ちゃんの旦那さんは大層好い方だそうですネ」とお雪は豊世と一緒に写真を見ながら、「お俊ちゃんは眞實に可羨しい」と

「私も可羨しいと思いますわ」と豊世が言つた。

「何故、そんなに可羨しいネ」と三吉は二人の顔を見比べた。

「でも仲の好いのが何よりですわ。笑つて暮すのが——」とお雪は豊世の方を見て。

「今にお俊ちゃん達も笑つてばかりいられなく成るよ」

こう言つて三吉が笑つたので、二人の女も一緒に成つて笑つた。

三吉は家の内部を見廻した。彼とお雪の間に起つた激しい感動や忿怒は通過ぎた。愛欲はそれほど彼の精神を動搖させなく成つた。彼はお雪の身体ばかりでなく、自分で自分の身体をも眺めて、それを彫刻のように樂むことが出来るようになつた——一度、杯の酒を余つた瀝まで静かに飲尽せるような心地で。二人は最早離れることもどうすることも出来ないものと成つていた。お雪は彼の奴隸で、彼はお雪の奴隸であつた。

新郎は羽織袴、新婦も裙  
はなむこ はおりはかま、はなよめ すそ

## 九

「叔母さん——私も郷里くにへ行つて参りますわ。宅から手紙が参りましてね、どうも田舎いなかの家いえが円まるくいかないようだから、暫時しばらくお前は母親おつかさんの傍へ行つてお出なんて。まあ、どうしたというんでしよう。お嫁さんを貰うまでは、母親さんの眼の中へ入つても痛くない幸作さんでしたがねえ……私もイヤに成つて了しまりますわ……彼方あつちへ行き、是方こっちへ行き、一つ處に落着いていた例は無いんですものね。叔父さんも、何ほんとでしたら、一度郷里へいらしつて下さいまし。母親さんによく話してやつて下さい。眞實ほんとに、叔父さんにでも行つて頂くと難あらがたいんですけれど……」

こう言つて、豊世が三吉の家へ寄つたのは、八月の下旬であつた。それに附添つけたして、「名古屋へ私が手紙を出しました序ついでに、『駒形の家は月が好う御座んすが、そつちではどんな月を見てますか』」ツて、そう申して遣りましたら、『俺は物干へ出て月を見てる』なんて、そんな返事を寄しましたよ——彼方あちらも御暑いと見えますね」と夫のことを案じ顔に言つた。彼女は留守宅を老婆ばあさんに托して行くこと、名古屋廻りの道筋を取つて帰国するごとなどを、叔父や叔母に話して置いて、心忙しそうに別れて行つた。

三吉は父母の墓を造ろうと思い立つていた。山村に眠る両親の墳は未だそのままにしてあつたので、幸作へ宛てて手紙を送つて、墓石のことを頼んで遣つた。返事が来た。石の寸法だの、直段書ねだんがきだのを細く書いて寄した。九月の下旬には、三吉は豊世からも絵葉書を受取つた。

「其後、叔父様、叔母様には御変りもなく候や。國へ帰りて早や一月にも相成り候。こちらも思うように参らず、留守宅のことも案じられ、一日も早く東京へ参りたく候——」と細い筆で書いてある。

秋も末に成つて、幸作からは彫刻の出来上つたことを報知しらして來た。そこそこに三吉は旅の仕度したくを始めた。姉の様子も心に掛るので、諏訪すわの方から廻つて、先ず橋本の家へ寄り、それから自分の生れ故郷へ向うこととした。森彦や正太は名古屋に集つてゐる。序に、帰りの旅は二人を驚かそうとも思つた。お雪も夫の手伝いでいそがしかつた。お種のことや、幸作夫婦のことや、未だ郷里くにに留まつてゐる豊世のことなぞが、取とりちらか散した中で夫婦の噂うわさに上つた。

「橋本の姉さんも、親で苦勞し、子で苦勞し——まだその上に——最早沢山だらうにナア」と夫の嘆息する言葉を聞いて、お雪も姉の一生を思いやつた。

家を出て、三吉は飯田町の停車場<sup>ステーション</sup>へ向つた。中央線は鉄道工事の最中で、姉の許まで行くには途中一晩泊つて、峠を一つ越さなければ成らなかつた。それから先には峠の麓<sup>ふもと</sup>から馬車があつた。

この旅に、三吉は十二年目で橋本の家を見に行く人であつた。故郷の山村へは十四年目で帰る。

三吉を乗せた馬車が、お種の住む町へ近づいたのは、日の暮れる頃であつた。深い樹木の間には、ところどころに電燈の光が望まれた。あそこにも、ここにも、と三吉は馬車の上から、町の灯を数えて行つた。

馬車は街道に添うて、町の入口で停つた。馬<sup>べつとう</sup>丁<sup>とう</sup>の吹く喇叭<sup>ラッパ</sup>は山の空気に響き渡つた。それを聞きつけて、橋本の家のものは高い石垣を降りて來た。幸作も来て迎えた。三吉はこの人達と一緒に、覚えのある石段を幾曲りかして上つて行つた。古風な門、薬の看板などは元のままにある。家へ入ると、高い屋根の下で焚く炉<sup>ろばた</sup>辺の火が、先ず三吉の眼に映つた。そこで彼は幸作の妻のお島や下婢<sup>おんなあ</sup>に逢つた。お仙も奥の方から出て來た。

「姉さんは？」と三吉が聞いた。

「一寸町まで行きました、姉様も一緒に。今小僧を迎えて遣りましたで、直ぐ帰つて参りましょう」

こう幸作が相變らず世辞も飾りも無いような調子で答えた。幸作は豊世のことを「御新造」と言わぬいで、「姉様」と呼ぶように成つていた。

「母親さんもどんなにか御待兼でしたよ」

とお島は客を款待顔に言つた。この若い細君は森彦の周旋で嫁いて來た人で、言葉遣いは都會の女と變らなかつた。

「もう、それでも、皆な帰るぞなし」とお仙は叔父の方を見た。

遅く着いた客の前には、夕飯の膳が置かれた。三吉が旅の話をしながら馳走に成つてゐるが、そこへお種と豊世が急いで歸つて來た。お種は提灯の火を吹消して上つた。三吉と相対に、炉辺の正面へドッカと坐つたぎり、姉は物が言えなかつた。

「叔父さん、眞実によく被入しつて下さいましたねえ」と豊世は叔父に挨拶して、やがてお仙の方を見て、「お仙ちゃん、母親さんに御湯でも進げたら好いでしよう。今夜は叔父さんが御着きに成るまいと思つていらしたところへ、急に御見えに成つたものですか

ら、母親さんは嬉しいのと——

お種はいくらか蒼ざめて見えた。お仙のすすめる素湯を一口飲んで、両手を膝の上に置きながら、頭を垂れた。

ややしばらく経った後で、

「三吉、俺は何事も言いません——これが御挨拶です」

とお種は大黒柱を後にして言つた。

古めかしい奥座敷に取付けられた白い電燈の蓋の下で、三吉は眼が覚めた。そこは達雄の居間に成っていたところで、大きな床、黒光りのする床柱なぞが変らずにある。庭に向いた明るい障子のところには、達雄の用いた机が、位置まで、旧の形を崩さないようにして置いてある。黄色い模様の附いた毛氈の机掛は、色の古くなつたままで、未だ同じようにはついている。

年をとつたお種は、旅に来て寝られない弟よりも、早く起きた。三吉が庭に出て見る頃は、お種は簞<sup>ほうき</sup>を手にして、苔蒸<sup>こけむ</sup>した石の間をセツセと掃いていた。

「こんな山の中にも電燈が点くように成りましたかネ」と三吉が言つた。

「それどこじや無いぞや。まあ、俺と一緒に来て見よや」

こうお種は寂しそうに笑つて、庭伝いに横手の勝手口の方へ弟を連れて行つた。以前土蔵の方へ通つた石段を上ると、三吉は窪く掘下げられた崖を眼下にして立つた。

削り取つた傾斜、生々した赤土、新設の線路、庭の中央を横断した鉄道の工事なぞが、三吉の眼にあつた。以前姉に連れられて見て廻つた味噌倉も、土蔵の白壁も、達雄の日記を読んだ二階の窓も、無かつた。梨畑、葡萄棚、お春がよく水汲みに来た大きな石の井戸、そんな物は皆などうか成つて了つた。お種は手に持つた箒で、破壊された庭の跡を弟に指して見せた。向うの傾斜の方に僅かに木小屋が一軒残つた。朝のことと、ツルハシを担いだ工夫の群は崖の下を通る。

お種は可恐しいものを見るような眼付して、弟と一緒に奥座敷へ引返した。幸作は表座敷から来て、三吉の注文して置いた墓石が可成に出来上つたこと、既に三吉の故郷へ積み送つたことなどを話した。お種は妙に改まつた。

朝飯には、橋本の家例で、一同炉辺に集つた。高い天井の下に、拭き込んだ戸棚を後にして、主人から奉公人まで順に膳を並べて坐ることも、下婢が炉辺に居て汁を替えること

も、食事をしたものは各<sup>めいめい</sup>自膳<sup>じょさん</sup>の仕末<sup>しあわせ</sup>をして、茶<sup>ちゃ</sup>椀<sup>わん</sup>から箸<sup>はし</sup>まで自分々々の布巾<sup>ふきん</sup>で綺麗<sup>はいれい</sup>に拭くことも——すべて、この炉辺<sup>ろべん</sup>の光景<sup>さま</sup>は達雄<sup>たつゆう</sup>の正座<sup>せいざ</sup>に着いた頃<sup>頃</sup>と変らなかつた。しかし、席の末にかしこまつて食う薬方<sup>やくほう</sup>の番頭<sup>ばんとう</sup>も、手代<sup>てしろ</sup>も、最早昔<sup>さま</sup>のような主従<sup>しゅしゆう</sup>の関係<sup>かんけい</sup>では無かつた。皆<sup>みな</sup>月給<sup>げき</sup>を取る為<sup>め</sup>に通つて來た。

### 「御馳走」

と以前の大番頭嘉助<sup>かすけ</sup>の悴<sup>せがれ</sup>が面白くないような顔をして膳を離れた。この人は幸作<sup>こうさく</sup>と同じに年季<sup>ねんき</sup>を勤めた番頭である。幸作は自分の席から、不平らしい番頭の後姿を見送つて、「為<sup>す</sup>るだけのことを為れば、それで可いぢやないか」という眼付<sup>にぎや</sup>をした。

賑<sup>にぎや</sup>かな笑声も起らなかつた。お種<sup>くわ</sup>は見るもの聞くもの気に入らない風で、嘆息<sup>ためな</sup>するように家の内を見廻した。その朝、彼女は箸も執らなかつた。三吉<sup>みよし</sup>を款待<sup>もてな</sup>すばかりに坐つていた。豊世<sup>とよよ</sup>やお仙<sup>おせん</sup>は言葉少く食つた。二人は飯の茶椀<sup>ちゃわん</sup>で茶を飲みながらも、皆<sup>みな</sup>の顔を見比べた。

「母親さん、召上りませんか」

とお島<sup>しゆうとうめ</sup>は姑<sup>おば</sup>の方を見て、オズオズとした調子で言つた。

「俺<sup>わたくし</sup>は牛乳<sup>うりゅう</sup>を飲んだばかりだで……また後で食べる」

とお種は答えたが、ぶいと席を立つて、奥座敷の方へ行つて了つた。

食後に、三吉は久し振の炉辺に居て、幸作を相手に沢田という潔癖な老人のあつたことなぞを尋ねた。あの忠寛のふるい友達で、よくこの家へやつて來た老人は、とうに亡くなつていた。

ふと、三吉は耳を澄ました。玄関の方へ寄つた薬の看板のかげでは、お島の忍び泣するけはいがした。

「そうかナア」という眼付をしながら、三吉は炉辺からお仙のボンヤリ立つてゐる小部屋を通つて、姉の居る方へ來た。

奥座敷の中<sup>まんなか</sup>には、正太が若い時に手ずから張つて漆を<sup>は</sup>抹いたという大きな一閑張<sup>いつかんぱり</sup>の机が置いてある。その前に、お種は留守を預つたという顔付で、先代から伝つた古い掛物を後にして、達雄の坐るところに自分で坐つていた。豊世は茶道具を出して、それを机の上に運んだ。

三吉はこの座敷ばかりでなく、納戸<sup>なんど</sup>の方だの、新座敷の方だのを見廻した。改革以来、

沢山な道具も減つた。たださえ広い家が余計に広く見えた。

「でも、思いの外種々な道具が残つてるじや有りませんか」と彼は言つて見た。

「皆なの丹精で、これまでに為たわい。旦那が出て了つた後で、私がお前さんの家から帰つて来た時などは……眼も當てられすか」とお種は肩を動ゆすつた。

「そう言えば、達雄さんも満洲の方へ行つたそうですね」

「そうだゲナ——」

「姉さん、貴方は達雄さんに置おきざり去にされたような気はしませんか」

「神戸に居る間は、未だそうは思わなかつたよ……どうも帰つて来てくれそうな気がして……満洲へ行つて了つた……それを聞いた時は、最早私も駄目かと思つた……」

「仕方が有りません。思い切るサ」

「三吉——お前はそんなことを言うが、どうしても私は思い切れんよ」

お種は心細そうに笑つた。

「ゴー」という音が庭先の崖下の方で起つた。工夫が石を積んで通る「トロツク」の音だ。

お種は頭脳あたまへでも響けるように、その重い音の遠く成るまで聞いた。やがて、名古屋に居る正太の噂を始めた。彼女は幾度も首を振つて、「どうかして彼あれがウマクやつてくれる

可いが」を熱心に繰返した。

茶が入つたので、隣の新座敷に菓の紙を折つていたお仙が母の傍へ來た。豊世は幸作夫婦を呼びに行つた。

養子夫婦が入つて來ると、急にお種は改まつて了つた。幸作は橋本の菓を偽造したものから、詫わびを入れに來た話などをして、その男が置いて行つた菓子折を取出した。

「どれ、皆なで偽にせべすり菓」の菓子をやらまいか

と幸作は笑つて、それを客にもすすめ、自分でも食つた。

お種は若い嫁の方を鋭く見て、

「お島は甘いものが好きだに、沢山たんと食べろや——」

「頂いております」とお島は夫の傍に居て。

「オオ、あの嬉しそうな顔をして食べることは——」

姑は無理に笑おうとしていた。

長くも若夫婦は茶を飲んでいなかつた。二人が店の方へ行つた後で、三吉は姉に向つて、「姉さんの顔は、どうしてそんなにコワく成りましたかネ」

「そうか——俺の顔はコワいか」とお種は自分の眉まゆを和やわらかせるように撫なでながら、「年をと

ると、女でも顔がコワく成るで……どうかして俺は平靜な心を持つように、持つように、と思つて……こうして毎日自分の眉を撫でるわい」

「どうも貴方の調子は皮肉だ。あんまり種々な目に遭遇であつて、苦しんだものだから、自然と姉さんはそう成つたんでしょう。目下のものはヤリキれませんぜ」

「そんなに俺は皮肉に聞えるか」

「聞えるかツて——『オオ、あの嬉しそうな顔をして食べる』ことは——あんなことを言われちゃ、どんな嫁さんだつて食べられやしません」

豊世やお仙は笑つた。お種も苦笑して、

「三吉、そうまあ俺を責めずに、一つこの身体を見てくれよ。俺はこういうものに成つたよ——」

と言つて、着物の襟えりをひろげて、苦み衰えた胸のあたりを弟に出して見せた。骨と皮ばかりと言つても可かつた。萎しなひた乳房は両方にブラリと垂下つていた。三吉は、そこに姉の一生を見た。

「エライもんじやないか」

とお種は自分で自分の身体あわれを憐るように見て、復また急に押隠した。満洲の実から彼女へ

宛てて來た手紙が文机の上にあつた。彼女はそれを弟に見せようとして、起つて行つた。

「ア、ア、ア、ア——」

思わずお種は旧い家の内へ響けるような大欠伸おおあくびをした。

幸作は表座敷に帳簿を調べていた。優雅な、鷹揚な、どことなく貴公子らしい大旦那のかわりに、進取の氣象に富んだ若い事務家が店に坐つた。達雄の失敗に懲りて、幸作はすべて今までの行き方を改めようとしていた。暮しも詰めた。人も減らした。炉辺に賑やかな話声が聞えようが、聞えまいが、彼はそんなことに頓着とんじやくしていなかつた。ドシドシ薬を売弘めることを考えた。「大旦那の時分には、あんなに多勢の人を使つて、今の半分も薬が売れていない——あの時分の人達は何を為ていたものだろう——母親さん達は皆なの食う物をこしらえる為にいそがしかつた」こう思つていた。お種に取つて思出の部屋々々も彼には無用の長物であつた。

こういう実際的な幸作のところへ、旧家の空氣も知らないお島かたづが嫁いて來た。達雄やお種から見ると、二人は全く別世界の人であつた。若い夫婦はどうお種を慰めて可いか解ら

なかつた。

三吉はこの人達の居る方へ来て見た。そこは以前彼が直樹と一緒に一夏を送つた座敷で、庭の光景は変らずにある。谷底を流れる木曾川の音もよく聞える。壁の上には、正太から送つて来た水彩画の額が掛つている。こういうものを見て樂む若旦那の心は幸作にもあつた。

「姉様あねさまを呼んでお出いで」

と幸作は妻に吩咐いいつけた。

豊世は困つたような顔付をして、奥座敷の方から來た。「こんな折にでも話さなければ話す折が無い」と言つて、幸作はどんなに正太の成功を祈つてゐるかということを話した。苦心して蓄積したものは正太の事業を助ける為に送つてゐるということを話した。お仙を連れて空しく東京を引揚げてからのお種は、實に、譬たとえようの無い失望の人であつた——こんなことを話した。

「兄様あにさまさえよくやつてくれたら、私は何事なんにも言つことは無い——私は今、兄様の為に全力を擧げてる——一切の事はそれで解決がつく」と幸作は力を入れて言つた。

姑と若夫婦と両方から話を聞かされて、三吉は碌に休むことも出来なかつた。その晩も、彼は奥座敷の方へ行つて、復たお種の歎きを聞いた。姉は遅くなるまで三吉を寝かさなかつた。

夜が更ければ更るほどお種の眼は冴えて來た。

「姉さん、若いものに任せて置いたら可いでしよう」

と三吉が言うと、姉はそれを受け、

「いえ、だから俺は何事も言わん積りサ——彼等あれらが好いように為て貰つてるサ——」

こういう調子が、どうかすると非常に激して行つた。幸作夫婦が始まようとする新しい生活、ドシドシやつて来る鉄道、どれもこれもお種の懊惱なやましい神経を刺戟しげきしないものは無かつた。この破壊の中に——彼女はジツとして坐つていられないという風であつた。

お種は肩を怒らせて、襲つて来る敵を待受けるかのように、表座敷の方を見た。

「なんでも彼等は旦那や俺の遣やりかた方が悪いようなことを言つて——無暗に金を遣つかうようなことを言つて——俺ばかり責める。若い者なぞに負けてはいないで。さあ——責めるなら責めて來い——」

橋本の炉辺では盛んに火が燃えた。三吉が着いて三日目——翌日は彼も姉の家を発つと言つたので——豊世やお島やお仙が台所に集つて、木曾名物の御幣餅ごへいもちを焼いた。お種は台所を若いものに任せて置いて弟の方へ来た。

三吉は庭に出て、奥座敷の前をあちこちと見廻つていた。以前この庭の中で、家内中揃つて写真を撮つたことがある。それを三吉が姉に言つて、達雄が立つて写した満天星どうだんの木の前へ行きながら、そこは正太が腰掛けたところ、ここは大番頭の嘉助が禿はげ頭あたまを気にしたところ、と指して見せた。彼は自分で倚凭よりかかつて写した大きな石の間へ行つて見た。その石の上へも昇つた。

お種は、どうかすると三吉がずっと昔の鼻垂はなたらしこぞう小僧こうそうのように思われる風で、  
「三吉、お前がそんなことをしてゐるところは、正太に酷く似てるぞや」

こう言つて、彼女も座敷から庭へ下りた。姉は自分が培養していいる種々な草木の前へ弟を連れて行つて見せた。山にあつた三吉の家から根分をして持つて来た谷の百合には赤い珊瑚珠さんごじゅのような実が下つていた。こうして、花なぞを植えて、旧い家を夢みながら、未だお種は帰らない夫を待つてゐるのであつた。

新座敷は奥座敷とつづいてこの庭に向いている。その縁側のところへ来て、お仙が父の達雄に彷彿な、額の広い、眉の秀でた、面長な顔を出した。彼女は何を見るともなく庭の方を見て、復た台所の方へ引込んで了つた。

木曾路の紅葉を思わせるような深い色の日は、石を載せた板葺の屋根の上にもあつた。お種は自分が生れた山村の方まで思いやるように、

「三吉が行くなら、俺も一緒に御墓参をしたいが——まあ、俺は御留守居するだ」  
独語のようになつて、姉は炉辺の方へ弟を誘つた。

午後に、お雪から出した手紙が三吉の許へ着いた。奥座敷の縁側に近いところで、三吉はその手紙を姉と一緒に読んだ。その時、お種は幸作に吩咐けて、家に残つた陶器なぞを取出させて、弟に見せた。薬の客に出す為に特に焼かせたという昔の茶呑茶碗から、達雄が食つた古雅な模様のある大きな茶碗まで、大切に保存してあつた。

「叔父さん、こんなものが有りましたが、お目に掛けましようか

と豊世は煤けた桐の箱を搜出して來た。先祖が死際に子供へ遺した手紙、先代が写したものらしい武器、馬具の図、出兵の用意を細く書いた書類、その他種々な古い残つた物が出て來た。

三吉はその中に「黒船」の図を見つけた。めずらしそうに、何度も何度も取上げて見た。半紙程の大きさの紙に、昔の人の眼に映つた幻影が極く粗い木版で刷つてある。

「宛然——この船は幽靈だ」

と三吉は何か思い付いたように、その和蘭陀船の絵を見ながら言つた。

「僕等の阿爺おやじが狂きちがいに成つたのも、この幽靈の御蔭まほろしですネ……」と復た彼は姉の方を見て言つた。

お種は妙な眼付をして弟の顔おもてを眺ながめていた。

「や、こいつは僕が貰つて行こう」

と三吉はその図だけ分けて貰つて、お雪の手紙と一緒に手荷物の中へ入れた。

叔父の出発は豊世に取つて好い口実を与えた。こういう機会でも無ければ、彼女は容易に母を置いて行くことも出来ないような人であつた。

「叔父さん、お願ひですから私も連れてつて下さいませんか。私も仕度しますわしますわ」

と豊世は無理やりに叔父に頼んで、自分でも旅の仕度を始めた。

三吉はすこし煩うるさそうに、「実は、僕はひとりで行きたい。それに他の細君ひとなぞを連れて行くのも心配だ」

「心配だと思うなら止すが可いぞや」とお種が言つた。

「何でも私は隨<sup>つ</sup>いてく」と豊世は新座敷の方から。

「じゃ、汽車に乗るところまで送つて進<sup>あ</sup>げよう」と三吉も引受けた。

いよいよ別れると成れば、余計にお種は眠られない風であつた。その晩、姉は奥座敷に休んで弟と一緒に遅くまで話した。姉の様子も気がかりなので、一旦枕に就いた三吉は復た巻煙草を取出した。彼は先ずお仙の話をした。あれまでに養育したは姉が一生の大きな仕事であつたと言つた。薬の紙を折らせることも静かな手細工を与えたようなもので、自然と好い道を取つて來たなどと言つた。

「彼女<sup>あれ</sup>が有るんで、俺も今まで持続<sup>もちこた</sup>えて來たようなものだわい」とお種も寝ながら煙草盆を引寄せた。

新座敷の方に休んだ豊世やお仙は寝沈まつていた。三吉は橋本の家の話に移つて、幸作の骨折も思わねば成らぬ、正太には生命<sup>いのち</sup>がくれてある、何物も幸作にはそんなものがくれて無い、そう神經質な眼で養子や嫁を見るべきものでもあるまい、欠点を言えば正太の方にも有るではないか、などと姉を沈着<sup>おちつ</sup>かせたいばかりに種々並べ始めた。一体、何の為に達雄が家出をしたと思う、そんなことを言出した。

「三吉、貴様は……何か俺の遣方が悪くて、それで、家がこう成ったと言うのか……何か

……」

お種は尖つた神経に触られたような様子して、むつくと身を起した。電燈の光を浴びながら激しく震えた。これ程女の節みさおを立て通した自分に、何處どこに非難がある、と彼女の鋭い眼付が言つた。どうかすると、弟まで彼女の敵に見えるかのようだ。

「姉さん、姉さん、そう貴方のよう——ひと他の言うことをよく聞きもしないうちから——何故なぜそんなに思い詰めて了うんです。もつと静かな心で考えられませんか」

こんな風に、三吉の方でも半ば身を起して、言つて見た。お種は直に話を別の方へ持つて行つた。興奮のあまり、彼女はよく語れなかつた。

「でも、何でしよう。達雄さんだつても、まかり間違えば赤い着物を着なくちや成らなかつたんでしょう」

「それサ……むむ、それサ……赤い着物を着せたくないばつかりに……」

「でしよう。その為に皆な苦心して、漸く今日まで漕付けた。正太さんのことなぞを考えて御覧なさい。ウツカリしていられるような時じやありませんぜ」

「むむ、解つた、解つた。若いものを相手にするようなことじや、是方こつちが小さいで……」

「小さいも、大きいも無いサ」

「いや、解つた」

「話が次第に紛糾つた。終には、一体何を話しているのか、両方で解らないようになつた。

「畢竟——姉さんはどうすれば可いと言うんですか」

「俺は正太の傍へでも行つて、どんな苦労をしても可いから、親子一緒に暮したいよ」

こう話の結末をつけてみたが、何だか二人ともボンヤリした。

「拝暁まで、お種は碌に眠られなかつた。

夜が白々する頃には、豊世も床を離れて、何かゴトゴト言わせていた。お種は雪洞を持つて新座敷の方へ行つた。

「豊世、お前も行つて了うかい」

「母親さん達は昨夜遅くまで話していらっしゃいましたね」

「碌に寝すか」

「何だかぼそぼそぼそ声がしてましたが、そのうちに私は寝て了いました」

「豊世——俺はツマランよ」

お仙は未だ眼を覚さなかつた。思わずお種は娘の 枕まくらもと 許ゆきで泣いた。

三吉と一緒に朝茶を飲む頃のお種は、前の晩とは別の人のようであつた。

「折角来てくれたのに」とお種はサッパリした調子で、「今度はイヤな話ばかり聞かせましたネ」

「三晩とも話し続けだ」

「いや、どうしてオオヤカマシ」

姉弟は顔を見合せて笑つた。

豊世も仕度が出来た。やがて出発の時が来た。炉辺には、お種をはじめ、お仙、幸作夫婦、薬方の衆まで集つて、一緒に別離わかれの茶を飲んだ。

三吉達を見送ろうとして、お島とお仙の二人は町はずれまで隨いて來た。

こういう道中をあまりしたことの無い豊世は、三吉と一緒に余儀なく歩かせられた。旧い木曾路は破壊される最中であつた。時々、岩石の爆裂する音が起つた。大きな石の塊がふるおぞろ可恐おそろしい響がけをさせて、高い崖ころの上から紅葉した谷底の方へゴロゴロ転がり落ちて行つた。

「女が、独りでなんぞ、とても通られる時じや有りませんネ」と豊世は叔父に隨いて歩きながら言つた。

都会風な豊世の風俗は、途中に仕事をしている労働者の眼を引き易かつた。どうかする  
と、十人も二十人も「ツルハシ」を手にした工夫の群が集つて、石や土を運ぶことを休め  
て、道を塞いでいた。

大きな森林は三吉の眼前にひらけた。路傍には自然と足を留めさせるような休茶  
屋がある。樹木の間から、木曾川の流れて行くのが見える。そういうところへ寄つて、三  
吉が豊世を休ませようとすると、かみさんが茶を運んで来て、「奥さんは、今日は何処か  
ら?」などと聞く。豊世はハニカンでもいなかつた。自分のことは言わずに、三吉の方を  
指して、

「あれは、私の叔父さんですよ」

こう笑いながら答える。この笑いが反つて休茶屋のかみさんを戯れるように思わせた。  
復た二人は笑つて出掛けた。

停車場の新設された駅へ着いたは、日暮に近かつた。豊世は汽車の時間を問合せた。叔  
父と一緒に一晩そこで泊らせて貰つて、一番で名古屋へ発ちたいと言つた。こう頼む人を

翌朝停車場へ送り届けた時は、三吉も漸く気楽な一人に成ることが出来た。

深い秋雨に濡れながら、三吉は森彦が家のある村へ入つた。そこまで行けば、木曾川を離れて、山林の多い傾斜を上るように成る。三吉が生れ故郷の隣村である。森彦の養家は小泉兄弟の母親の里で、姓は同じ小泉であつた。養父は疾に亡くなつていた。留守居する養母、妻、子供は、三吉の周囲に集つた。その日は、名古屋の方に居る森彦、東京に修業中のお延、お絹の噂で持切つた。

旧の街道は木曾風の屋造の前にあつた。従順な森彦の妻は夫を待侘顔に見えた。

大きな木曾谷は次第に尽きて來た。兄の村を離れて、更に三吉は山林の間の坂道を上つた。二里ばかり歩いた。峠の一部落から一緒になつた男と連立つて進んで行くと、子供の時に見馴れた山々が谷の向にあらわれて來た。

「三吉様。その外套も私が持たず」

と連の男が往時と同じ調子で言つて、辞退する三吉の外套を無理やりに引取つた。この男は、「カルサン」を穿いて、三吉の荷物まで自分の肩に掛けていた。

「構つて下さらない方が、私は難有いんです。今度は唯墓参りに来たんです」

こう話し話し行く三吉は、高い山の上の日のあたつた道を歩いていた。旧い馴染の人達に見つからないうちに、彼は独りで、自分の生れた家の跡を見て廻ろうとした。途中で、寺の方へ向う連の男に別れた。

洋服に草鞋穿で、寂しい旅人のように、三吉は村へ入つた。ずっと以前大火があつて駅路の面影もあまり残つていなかつた。そこは美濃路の方へ下りようとする山の頂につた。傾斜に成つた道の両側には、新規に建つた家だの、焼残つた家だのが、樹木の間に出来たり引込んだりして並んでいた。畠に成つているところもあつた。

石垣の上には十一二ばかりに成る女の児が遊んでいた。猿羽織というものを着て、何処の人が通るかと三吉の方を見ていた。三吉は勝手が違つたように、心覚えの場所を探した。  
「こちらに小泉という家があつた筈ですが——知りませんか」

とその女の児に一寸尋ねた。小娘は妙な顔をして、

「そこだに」

と直ぐ眼前にある桑畠を指して見せた。

連の男は迎えに来た。村を横に切れて、田畠の間の細い道を小山の方へ登ると、小泉の

先祖が建<sup>こんりゆう</sup>立<sup>た</sup>したという古い寺がある。復た三吉は独りで山腹の墓地へ廻つて見た。寺の名と同じ戒<sup>かいみょう</sup>名<sup>な</sup>を刻んだ先祖の墓の前を通り過ぎて、墓地の出はずれまで行つた。その眺望の好い、静かな一区域は、父母の眠つてゐる場所だ。幸作に頼んで作つた新しい墓石は墳<sup>つか</sup>の前に建ててあつた。

幼い記憶が浮んで來た。以前から見ると明るく成つた樹木の間から、三吉は村の家々を望んだ。「旦那衆」の住居は多くは焼けて小さく成つた。昔は頭の挙らなかつた百姓の部落の方に沢山新らしい家が建込んでいた。

旧い馴染<sup>なじみ</sup>の人達は、何時までも三吉を独りにしては置かなかつた。その翌日は、彼は寺の広間で、墓参の為に集つて來た遠い近い親戚とか、出入の百姓とか、その他小泉の昔を忘れずにする男や女の多勢ゴチャゴチャ集つた中に居た。

三日目に三吉は以前の隣家へ移つた。大きな酒屋を営んでいた家で、小泉の屋敷跡も今ではその所有に成つてゐる。二階の客間は、丁度以前の小泉の奥座敷と同じ向にあつて、遠い美濃<sup>みの</sup>の平野を一段高く望まれるような位置にある。そこへ主人は三吉を誘つた。桑畠は直ぐ石垣の下にあつた。忠寛の書院、母やお倉のよく縫物をした仲の間、実の居た「くつろぎ」の間、上段、離れ、会所などと名のつけてあつた広い部屋々々の跡は、眼下に

見ることが出来る。温厚な長者らしい主人は、自分も往時を思出したという風で、三吉と一緒に縁側に立つて、あそこに井戸があつた、ここに倉があつた、と指して見せた。忠寛の座敷牢のあつたという木小屋の辺は未だ残つていた。三吉が祖母の隠居していた二階建の離れには、今は主人の老母が住むとのことであつた。

「や、小泉さんに進げるものが有る」

と主人は、手を鳴らして酒を呼んだ後で、桑畠の中から掘出されたという忠寛の石印を三つばかり三吉の前に置いた。

古い鏡も掘出されたことを、主人は語つた。忠寛の書院の前にあつた牡丹は、焼跡から芽を吹いて、今でも大きな白い花が咲く。こんな話もした。

この明るい二階へも、村の人や三吉の学校友達が押掛けて來た。以前は、「オイ、三公」などと忸々なれなれ々しく呼んだ旦那衆が、改まってやつて來て、「小泉君」とか「三吉君」とか言葉を掛けた。主人を始め、集つて來る人達は大抵忠寛の以前の弟子であつた。

「でも、忠寛先生の時分には——いくら無いと言つても——六七十俵の米は蔵に積んであつた。皆な兄さんが亡くしたようなものだわい」

こう笑い話のようにして、高い醉つた声で旧むかしを語るものもあつた。

人を避けて、復た三吉は縁側の障子の外へ出てみた。家は破れても、山々の眺望は変らずにある。傾斜の下の方には、石を載せた板屋根、樹木の梢などが見える。秋は深い。最早霜が来たらしい桑畠の中には、色づいた柿の葉が今にも落ちそうに残っている。何となく時雨しぐれれて来た。

荒廃した街道について、三吉は故郷の村から美濃の方へ下りた。二里ばかり送つて隨いて来るものも有つた。ある町へ出た。そこで名古屋行の汽車に間に合つた。

正太が泊つているのはやはり株式に關係した人の自宅であつた。三吉は名古屋へ入つて、清潔な「閑所」の多い、格子窓の続いたある町の中に、その宿を見つけた。

「誰方どなた？」

茶色な暖簾を分けて、五十近い年恰かつこう好の婦人が顔を出した。

「小泉です。橋本の叔父です」

叔父と聞いて、婦人は三吉を静かな奥深い客間へ案内した。正太も豊世も出て居なかつた。その時、三吉は、この婦人の口から、正太が既に名古屋の相場で失敗したことを聞い

た。この婦人の若い養子も、正太と手を組んで、大きな穴を開けたと聞いた。

午後の四時頃に正太夫婦は散歩から戻つて来た。表二階が正太の借りている部屋であつた。

「豊世、何かお前は叔父さんに見て来て進げたら可かろう」

と正太は買物を命じて置いて、表から裏口へ通り抜けられる土間の板を渡つた。三吉もその後から、この家の母親が坐つている部屋を横に見て、高い壁に添うて、箱梯子を上つた。

二階は薄暗かつた。三吉は正太と窓に近く坐つて、互に顔を見合せた。正太が相場の失敗を語り出す前に、その意味は叔父の方へ通じていた。

「や、種々な話が有る」

と三吉は正太の並べる言葉を遮つた。何となく正太は悄然としていた。それを見て、叔父は自分の旅を語り始めた。

「どうも叔父さん、種々御世話様で御座いました」と豊世が上つて来て言つた。「なんですか、私も是方へ来てから、また母親さんが一人加えたような気がしますわ」  
階下に住む婦人がナカナカのエラ者で、商売の道にも明るく、養子の失敗を憂えてい

ることなぞが、かわるがわる正太夫婦の口から出た。そのうちに、正太は、「お前はそつちへ行つてお出」と豊世に眼で言わせて、默然と叔父の前に頭を垂れた。

「叔父さん、私もいよいよ洗礼を受けました」

こんなことを言出した。三吉は不思議そうに甥の顔を見た。

「実は——」と正太は沈痛な語気で、「熱田あつたへ遊びに参りましたら、その帰り道で洗礼を受けました——二度、喀血かっけつしました」

「叔父さん」と正太は男らしい響のある調子に返つた。「私もこれから大に遣ります。医者に診て貰いましたところが、『お前の病気は自分で作つた病気だ、精神の過労から出た病気だ、下手へたにクヨクヨするな、そのかわり三年や四年でマイつて了うようなものじや無い、十年の生命いのちは引受けた』と言つてくれましたんです。『仕事を為ても構わんか』と聞いたら、『差支さしつかえは無い』ツて言いますからネ。『よし』と、『それじゃ俺はこれからウンと遣つて見せる、この病気に罹つてから事を成した者は——いくらもある』こういう覚悟を抱いたんです」

「どうだネ、どんな心地こころもちがするネ」と三吉は病人扱いにしたくなく尋ねた。

「何となく、こう厳肅な心地が起つて来ました……」

「そいつは面白いナ。何だねえ、正太さん、今日までのことは忘れて行るんだネ。是非とも親譲りの重荷をどうしなけりや成らんとか、なんとか、そんなことは先ず側わきに置くんだね。自分は自分の為るだけのことを為る——それで可いじやないか」

「私もその積りです。それにネ、叔父さん、銀行側の人ですら、『もう達雄さんも好い加減にして帰つて来たら好かろう』——なんて言つてくれた人もあるんです」

「今度の旅は、君の家でも大分ヤカマシかつた。僕は君、三晩とも碌に寝ずサ。姉さんに向つて種々なことを言つて、終しまいには、赤い着物の話まで出た。そこまで僕は姉さんには言わなかつたが、何故達雄さんが家を出る時に、自分の為たことは自分で責任を負います……赤い着物でも何でも着ます……そのかわり妻子に迷惑を掛けてくれるな、と言わなかつたろう。家を出る位の思をしても……その苦痛くるしみが何の役にも立たない……」

「いえ、叔父さん、そう阿爺おやじの方から出てくれれば、まさかに赤い着物を着せるとも、誰も言ひはしなかつたろうと思ひます。ところが阿爺はそうじやなかつた。『俺にそれを着せてくれるな』と言出した……その時、もうこれは駄目だ、と私も思いました」

こう二人は達雄のことを言つて見たが、でも何となく頭が下つた。目下のものが旧家の家長に対する尊敬の心は、是方に道理があると思う場合でも、不思議に二人に附いて廻つた。

豊世が膳を運んで來た。正太は力の無い咳をして、叔父と一緒に笑いながら食つた。三吉は姉の生涯をあわれに思うという話なぞをした後で、

「僕は、今度は、姉さんにも言つた……莫ばかに怒られちやつた……」

「なにしろ、母親さんは、神聖にして犯す可らず——吾家じやそう成つていましたからネ。しかし、叔父さん、小泉忠寛翁の風貌を伝えたものは——貴方の姉弟中で、吾家の母親さんが一番ですよ」

正太はすべて可懐しいという眼付をした。母も、幸作夫婦も、家を捨てて行つた父も——

「森彦叔父さんを訪ねて見ようじや有りませんか。私の病気のことは未だ誰にも言わずに有ります。あの叔父さんにも知らせて有りません。母親さんは無論のこと。唯、貴方に御あなた

話するだけです。豊世は……これはまあ看護をしてくれる人ですから……」

こんなことを言つて、翌日正太は三吉を誘つた。彼は胸に病のある人とも見えないほど爽快な声で話す時もあつた。活気のある甥の様子に、三吉もやや安心して、一緒に森彦の宿を訪ねることにした。

「森彦叔父さんも奮闘していますぜ」

と正太は箱梯子を降りかけた時に言つた。

午後に成つて、正太は名古屋女の觀察、音曲、家屋の構造などの話を叔父に聞かせながら帰つて来た。暖簾を潜ると、茶室のように静かな家の内には読経する若主人の声が聞える。それを聞きながら、二人は表二階の方へ上つて行つた。

豊世は行末のことまでも思うという風で、二人の傍へ來た。

「豊世さん、貴方はどうする人ですか」と三吉が尋ねた。「未だここに居る人ですか」

「私も困つて了りますわ。こうして置いても行かれませんし、そうかと言つて、東京の家を置むのも惜しいなんて言いますし——」

「ああ、意氣地の無いものは駄目です」と正太は妻の方を見て、アテコスるような調子で歎息した。「どういうものか、豊世は、イヤに突掛つて来るようなことばかり言う……」

う俺に……しかし、無理も無いサ。この年に成つて、碌に妻も養えないような人間だからナア』

『これを聞くと、豊世はもう何事も言えなかつた。

『まあ、森彦さんにも相談するサ』と云つて、三吉は調子を変えて、『駒形の家に居る老婆さんネ、あの人も一生懸命で君の留守居をしてるよ。稀に僕が留守見舞に寄ると、これは旦那から預つた植木だから、どうしてもこいつを枯らしちや成らんなんて……余程主人思いだネ』

正太も笑つた。『叔父さん、ホラ、私がこの夏、岐阜の方へ行つて、鵜飼の絵葉書を差上げましたろう。あの時、下すつた御返事は、大事に取つといてあります』

『どんな返事を進げたつけネ』

『ホラ、私も長良川に隨いて六七里下りましたと申上げました時に……あの暑い盛りに……こう夏草の香のする……』

『そうそう、木曾路を行くがごとしなんて、君から書いて寄したツケネ——是方の暑さが思いやられたツけ』

正太は深い、深い溜息を吐いた。

暮方に、三吉は東京へ向けて、夜汽車で発つことにした。叔父を見送ろうとして、正太は一緒にこの宿を出た。電車で名古屋の停車場まで乗つた。時間はまだすこし早かつた。正太は燈火のあかりつゝ点き始めた停車場の前をあちこちと静かに歩いて、ふと思いついたように叔父に向つて、

「貴方のとこ許の叔母さんにしろ、吾家のやつにしろ、今が一番身体の盛んな時でしょう——」見ても圧迫を感じるという調子に、彼は言つた。

間もなく三吉は新橋行の列車の中に入つた。窓の外には、見送の切符を握つた正太が立つて、何もかも慘酷むごいほど身に浸るという様子をしていた。車掌は飛んで来て相図の笛を鳴らした。正太は前の方へ曲み氣味に、叔父をよく見ようとするような眼付をした。三吉も窓のところに、濡れぬ雨よに成つた鶏のようになき立つて、

「叔母さんにも宜しく……」

と正太が言う頃は、汽車は動き出していた。

停車場の灯、薄暗い人の顔は窓の玻璃ガラスに映つたり消えたりした。宿の方へ戻つて行く正太の姿を、三吉は想つて見た。「郷里くにへでも帰つて静養やどやけなげしたらどうです」と森彦の旅舎か

ことなぞが、三吉の胸にあつた。正太の失敗も知らず、まして病氣も知らず、彼一人に希望を繋いでいるような橋本の家の家人達のことも浮んで來た。

「可哀想な男だ」

こう口の中で言つて見て、長いこと三吉は窓のところに立つていた。

## 十

春が來た。正太の留守宅では、豊世と老婆ばあさんと二人ぎりで、四月あまりも名古屋の方の噂うわさをして暮した。豊世は十一月末に東京へ引返したので、駒形こまがたの家の方で女ばかりの淋さびしい年越うわきをした。河の方へ向いた玻璃障子ガラスの外へは幾度となく雪が來た。石垣の下に見える物揚場の伊豆石、家々の屋根、対岸の道路などは、その度に白く掩おおわれた。弟という人と一緒に二階を借りて夫婦同様に暮している女の謡曲の師匠が他へ移るとか移らないとか、家主が無理に立退たちのきを迫るとか、煩いことの多い中に、最早家の周囲には草の芽を見るようになつた。

やがて豊世はこの惜しい世帯を畠まなければ成らない人であつた。正太が放うつやらかして

置いて行つた諸方（ほうほう）の遊び場所からは、あそこの茶屋の女中、この待合の内儀（おかげい）、と言つて、しばしば豊世を苦めに來た。彼女はそういう借金の言訳ばかりにも、疲れた。そればかりではない、月々の生活を支える名古屋からの送金は殆（ほと）んど絶えて了つた……家賃も多く滞つた……老婆に払うべき給料さえも借に成つた……

家具を売払つて、一旦仕末を付けよう、こう考えながら豊世は家の内を歩いて見た。二度とこうした世帯が持てるであろうか、自ら問い合わせて、幾度（いくたび）か彼女は家の形崩すことを躊躇（ちゆうちょ）した。

勝手の流許（ながしもと）には、老婆（しやが）が蹲踞（しゃが）んで、ユツクリユツクリ働いていた。豊世は板の間に立つて眺めた。ゴチャゴチャした勝手道具はこの奉公人に与えようと考へていた。

「眞實にねえ、これまでに丹精するのは容易じやなかつた」と豊世は独語（ひとりごと）のように言った。

「奥様、何卒まあ、一日も早く旦那様の方へ御一緒に御成遊ばすように……」と老婆は腰を延ばして、「私も、何か頂きたくて、これまで御世話を致したのじや御座いません。奥様がこうして御一人でいらつしやるのが、私は心配（たま）で堪りません……御留守居は最早沢山で御座いますよ……」

この奉公人は、リヨウマチ氣けのある手を揉もみ揉もみ言つていた。

豊世は水に近い空の見える方へ行つた。川蒸氣や荷舟は相變らず隅田川すみだがわを往復しつつあつた。玻璃障子の直ぐ外にある植込には、萩や薔薇などを石垣の外までも這はわせて、正太がよく眼を悦よろこばした場所である。豊世は、その玻璃障子も他の造作と一緒に売ろうと考えた。

長く手入もせずに置いた草木は、そこに柔かな芽を吹いていた。それを見ると、幾年か前の春が彼女の胸に浮んだ。橋本しゅうとの姑おばあが寝物語に、男の機嫌きげんの取りようなどを聞かされて、それにまた初心らしく耳傾けたことは、夢のようになつた。相場師の妻らしく粧おうとして、自然と彼女は風俗みなりをもつくつた。女に出来ることで、放縱な夫の心を悦よろこばすようなどは、何でもした。それほど夫の心まかせに成つたのも、何卒して夫の愛を一身に集めたいと思つたからで……夫の胸に巣くう可恐おそろしい病毒、それが果して夫の言うように、精神の過労から発したのか、それとも夫が遊蕩ゆうとうの報酬むくいか、殆んど彼女には差別のつかないものに思われた。

二月の末頃、正太は一度名古屋から上京したこともあつた。その時は顔色も悪く、唯瘠やせがまん慢で押通していいるような人であつた。「旦那様は御自分じや、十年も生きるようなこ

とを仰つて被入っしゃいますが……どうして私の御見受申したところでは、二三年もむずかしゆう御座いますよ」と老婆は蔭で豊世に言つた。二三日逗留した正太の身体からは、毎晩のように、激しい、冷い寝汗が流れた。まるで生命の油が尽きて行くかのように。それを豊世は海綿で拭き取つてやつたことも有つた。

その時の夫の言葉を、彼女は思出した。

「看護婦さん、足でも撫つておくれ……」

と夫は言つたが、それを玻璃障子のところで繰返してみた。彼女はまだ女の盛りであることを考えて、そこに立つていられないほど悲しく成つた。

「老婆や、一寸御留守居を頼みますよ。三吉叔父さんの御宅まで行つて来ますから」と豊世が声を掛けたので、老婆は勝手の方から送りに出た。

「まあ、奥様の御服装は……意気なことは意氣で御座いますが……おめかけさんか何ぞのようじや御座いませんか」

こう上り端のところに膝を突いている老婆の眼が言つた。意気な細君らしく成つた豊世

の風俗は、昔氣質<sup>むかしかた</sup>の老婆には気に入らなかつた。この年をとつた奉公人は、何処までも旦那から留守を預つたという顔付でいた。

豊世は石段を下りた。

途<sup>みち</sup>次<sup>みち</sup>彼女は種々なことを考えて行つた。どうかすると彼女は、自分の結婚の生涯を無意味に考えた。絶対の服従を女の生命とするお種のような、そういう考えは豊世には無かつた。名古屋へ行こうか、それともこの際……いつそ自分の生家の方へ帰つて了おうか、と彼女は叔父の家の門へ行くまでも思い迷つた。

三吉はお雪と一緒に自分の家の方で、折<sup>おり</sup>柄<sup>から</sup>訪ねて來たお愛を送り出したところであつた。このお雪が二番目の妹は、若々しい細君として、旦那という人と共に一寸上京したのである。下座敷の障子も明けひろげてあるところへ、丁度豊世が入つて來た。

「豊世さんはお愛ちゃんを御存じでしたらう。好い細君に成つて來ましたよ」

こう言いながら、三吉は長火鉢の前に豊世を迎えた。お雪もその側に居て、お愛夫婦の噂をした。

叔父叔母の顔を眺め、若い人達の噂を聞くにつけとも、豊世は気が變つて、途<sup>みち</sup>次<sup>みち</sup>考えて來たようなことは言出さなかつた。いよいよ駒形の家を仕舞うに就いては、何か家具の

中に望みの品はないか、どうせ古道具屋に見せて売払うのだから、とお雪に話した。「眞んと實に惜しいと思いますわ……でも、どうすることも出来ません」とも言つた。

「なんでしょうか、橋本の姉さんは正太さんの病氣を知つたでしようか——實際の病氣を」と三吉が尋ねた。

「さあ……」と豊世も考深く、「手紙には何とも書いてありません……最早知つたでしょうよ……幸作さんが名古屋へ出て、宅に逢つていますから。森彦叔父さんだつて、漸くこの頃御知んなすつた位ですわ」

「あの兄貴へは、私の方から話しました」

豊世は切ないという眼付をして、「橋本の母親さんからは、早く名古屋の方へ行つて、看病してやつておくれ、と言つて来ますし……生家の母からは、また……是非是方へ帰つて来いなんて……眞實に、親達は、先ず自分の子の方のことを考えてますよ。でも、生家の母も、私が可哀想だと思うんでしょう……」

「正太さんも可哀想ですし、貴方も可哀想です」

と叔父に言われて、豊世は自分で自分を憐むように、

「私も、行つて看病してやりますわ……今までだつて、叔父さん、私の方で居てやつたよ

うなものですもの……」

「豊世さん——貴方がたは結婚なすつてから、今年で何年に成りますネ」と三吉は巻煙草の灰を落しながら言出した。

「丁度十一年——」と豊世も過去つたことを思出したように。

「して見ると僕等よりは一年後でしたかねえ」

「たしか、橋本の番頭さんが薬を負つて吾家へ被入つて、あの時豊世さんのお嫁さんに被い入つたことを伺いましたつけ」とお雪も言葉を添える。

「そうでしたねえ、あの時叔母さんからも御手紙なぞを頂きましたつけねえ」と豊世が言った。「ほんと真実に楽しいと思つたのは、結婚して一年ばかりの間でしたよ……それからもう家の内がゴタゴタゴタゴタし出して……母親さんは臥たり起きたりするように御成んなさる……そのうちにあの騒ぎでしよう

お雪も微かな溜息かすためいきを吐いた。

「何しろ、正太さんと私とは縁故の深い訳ですネ——」と三吉は話を引取つた。

「私達二

人は小学校時代から一緒でしたからね。尤も級は違いましたが。私が八つばかりの時に東京へ修業に出される……あの頃は土耳其古形の トルコがた ような帽子が はや 流行つて、正太さんも房の垂下つたのを冠つたものでサ……あんな時分から一緒なんですかね

「旧い、旧い御馴染」と豊世は受けて、「叔父さんが仙台に被入しつた時分、宅のことで書いて寄して下すつた手紙が、昨年でしたか出て参りましたつけ。あれなぞを見ましても、余程宅は皆さんに心配して頂いた人なんですね」

「へえ、そんな手紙を進げましたかナア」

「なんでも宅の方針のことで、叔父さんの意見を聞きに上げたんでしょう……あんなに皆さんから心配された位ですから、もうすこし宅も何か為し そうなものでしたが……」

こういう話から引出されて、豊世は橋本の舅じゅう が家出の当時のことや、生家から電報が来て、帰つて行つてみると、それぎり引留められて了うところであつたことや、実に恋人の方へ行く女の心で彼女は正太の方へ逃げて來たものであることなどを言出した。

豊世はまだ聞いて貰いたいという風で、ある時自分の一生をトうらな つて貰つたことがあつた。「貴女は優しい人ですが、何處かどこ ひととこ 一箇處おとこ、男性の おとこ ようなところが有る——そこを気を着けなければ不可いけない」とそのトえきしや 者が言つたとか。そんなことまで言出した。

「叔父さんの言葉で言えば、まあ親が出て来るんでしようよ」

こう言つて、豊世は寂しそうに笑つた。

遊び盛りのお雪の子供等は表の入口を出たり入つたりしつつあつた。三番目の男の児も、最早どうにかこうにか歩ける頃で、母親の方へ来たり、女中の方へ往つたりしていた。

「オヤ、可笑しい、母さんのお乳を搜したりなぞして」

と豊世に言われて、子供は母親の懷に入れた手を引込ました。

「ナイナイしましよう」とお雪は懐を搔<sup>かき</sup>させながら子供に言つた。

「そう言えど、叔母さんは復<sup>ま</sup>たお出来なさいましたんでしよう……どうも此頃<sup>こないだ</sup>から、そうじやないか<sup>ツ</sup>て、老婆<sup>ばあや</sup>とも御噂をしていましたよ」

豊世はお雪の方を見た。お雪はすこし顔を紅めて、微笑<sup>ほほえ</sup>んだ。

「お雪」と三吉は妻に、「何か豊世さんの許<sup>とこ</sup>の道具で、お前の方に頂きたいものがあるかい」

お雪は氣の毒そうに、「そうですねえ……じや、豊世さんの裁物板<sup>たちものいた</sup>と、それから張板でも譲つて頂きましようか」

「あの張板なぞは、宅でまだ川向に居ました時分、わざわざ檜木<sup>ひのき</sup>で造らせたんですよ。長

く住む積りでしたからねえ。とにかく、道具屋に一度見せまして、直段ねだんを付けさした上で、また申上げましょう」

豊世は心細そうに震えた。とかく話は途切れ勝であつた。

豊世が帰つて行く頃、三吉はひとり二階の部屋へ上つて、北側の窓のところに立つた。屋根、物干などの重なり合つてゐる間には、春らしく濁つた都会の空氣や煙を通して、ゴチャヤゴチャ煙筒えんとうの立つ向うの町つづきに、駒形の方の空を望むことも出来た。そこで三吉は正太のことを思つた。

お雪も樓梯はしげだんを上つて来て、豊世が置いて行つたという話を夫にした。正太が一つ場所に一週間居ると、必ともうそこには何か持上つてゐる——正太はお俊にまで掛つた——こんなことまで豊世はお雪に話して行つたとかで。

「『眞實ほんとに、叔母さんは可羨うらやましい』なんて、豊世さんはそんなことを言つて帰りましたつけ」

「でも、お前は不平だつて言うじやないか」と三吉は聞き咎める。

「何にも不平なことは有りません」

こうお雪が力を入れて答えたので、しばらく三吉は妻の顔を眺めていた。

「吾儕われわれが豊世うらやさんから羨うらやまれるようなことは何にも無いサ——唯、身体じょうぶが壮健じょうけんだということだけのことサ」

そう言つて置いて、三吉は自分の仕事の方へ行つた。

その晩、三吉夫婦は遅くまで正太や豊世の噂をした。子供等が寝沈まつた頃、お雪は何か思出したという風で、平素いつもにない調子で、

「父さん、私を信じて下さい……ね……私を信じて下さるでしよう……」

と夫の腕に顔を埋めて、終しまいには忍び泣に泣出した。「何を言出すんだ——今更信じるも信じないもないじゃないか」と三吉は言おうとしたが、それを口には出さなかつた。彼は黙つて、嬉しく悲しく妻の啜泣すすりなきを受けた。

いよいよ豊世うらやが名古屋へ発つという前日、駒形の方からは、夏火鉢、額、その他勝手道具の類なぞを三吉の許へ運んで來た。その中には正太の意匠で、お俊の絵筆をかりて、

小さな二枚戸に落葉を模様のように画かせた置床もあつた。

豊世も別れに来た。彼女は自分の使い慣れた道具が、叔父の家の方へ来ているのを眺めて、楽しい河畔の生活もいよいよ終を告げるかと思つた。

「今も、一軒お別れに寄つて参りましたら、その家の人おが、橋本さんはいつでもお別れにばかり寄るじやありませんか、なんて……」

こう豊世は叔父叔母に話して、落着いていたことも少い自分の生涯を聞いて貰いたいと  
いう風であつた。

「豊世さん、こういう説がありますぜ」とその時、三吉は直樹の老祖母おばあさんの話だと言つて、正太の生命いのちが三年持つものなら、豊世が傍に居ては一年しか持つまい、とあの七十の余までも生き延びた老祖母が言つたことをそこへ持出した。豊世は首を振つて、夫の衰え方は世間の人の思うようなものでは無い、と萎しおれながら打消した。

お雪も別れを惜んで、一晩豊世に泊るように、自分の家から名古屋へ発つように、と勧めた。「どうです。そうなすつたら」と彼女が言つた。豊世は、方角の好い旅舎やどやえらを揃んで、老婆おあさんと二人宿賃を出し合つて、名残なきりに一夜泊ることを約束して置いて来たから、折角ではあるが、成るならその旅舎から送られて発ちたいと言つた。多くの家具を腹の立つほど

廉やすく売払つても、老婆の給料まで悉すかり皆払つて行くことは覚おぼつかない、いづれ名古屋から送る積りだ、とも言つた。

「御勝手の道具で、売つて幾何いくらにも成らないようなものは、皆なあの老婆やに遣りましたよ」と豊世は附添えた。

お雪は別れの茶を汲んで来た。豊世は直樹の家へも暇いとまごいに寄つたことを話した。種々な人の噂が出た。三吉は、正太がまだ若くて懇意にした人の中に、お春という娘のあつたことなどをめずらしく言出した。

「叔父さんはよくあんな人のことまで覚えていらつしやいましたね。私がまだお嫁に來ない前のことでしょう。あの人も嫁いて、最早子供が幾いくたり人もあります」と豊世が言つた。  
 「それはそうと」と三吉は笑いながら、「豊世さんを一つ嫌いやがらせることが有る。ホラ、名古屋で正太さんが泊つてる家の主婦さんおがみ……シッカリ者だなんて、よく貴方がたの褒めた……あの人があの人が丹前などを造つて、正太さんに着せてるといいますぜ——森彦さんが出来た時、その話でした」

「あんな年寄なら、私は焼きません」

と豊世も串じょう談だんのように言つて笑つたが、やがて立ちがけに、

「叔父さん、今のお電話を……行つて宅に仕ても可う御座んすか」

と聞いた。お雪も笑わずにいられなかつた。豊世は、いづれ名古屋へ着いたら、日あたりの好い貸間でも見つけて移る積りだと話して、いそいそと別れを告げて行つた。

五月の末に、三吉は正太が名古屋の病院に入つたという報知しらせを受取つた。間もなく、彼は病院からの電報を手にした。

「ゼヒアイタイ、スグキテクレ」

としてあつた。

それほど正太の病が急に重く成つたとは、三吉には思えなかつた。手放しかねる仕事もあり、様子も分りかねたので、名古屋に居る森彦へ宛てて、病人のことを電報で問合せた。都合して来いという返事が来た。何を措いても、彼は名古屋の方へ行こうと思い立つた。それをお雪にも話した。

正太を見舞いに行く前の晩、三吉は種々なことで多忙しい思をした。甥おいが病んでいることを、せめて向島の女にも知らせて遣りたいと思つた。言伝ことづけでもあらばと思つて、人を通

して、電話で伝えさせた。小金も、その母親も、共に病床にあるということが、その時解つた。

こうして三吉は復<sup>ま</sup>た名古屋行の汽車に揺られて行くように成つたのである。彼が森彦の旅舎へ着いたのは、日暮に近い頃であつた。

東京から見ると暑い空氣の通う二階の窓のところで、兄弟は正太の病状を語り合つた。病院の方へはお種も来ているとのことであつた。森彦は片端から用務を処理するような口調で、橋本の姉が近年にない静肅な調子の人であることや、幸作からも便りがあつて、もし彼の行商中に万一事でもあつたら、死体は名古屋で焼くように、そして遺骨として郷里の方へ送るように、と頼んで來たことなどを話した。

「いかに言つても、これは早手廻しだ——しかし、好く書いてある」

と森彦は幸作からの書面を弟に見せて、高い調子で笑つた。

翌朝、三吉は兄に伴われて病院の方へ行つた。玻璃戸<sup>ガラスど</sup>のはまつた長い廊下に添うた二階の一室に、橋本正太とした札が掲げてあつた。二間つづきに成つて、一方に窓のある明るい室が患者の寝台の置いてあるところ、その手前が看護するものの部屋であつた。そこで三吉は、お種や豊世とも一緒に成つた。

正太は、叔父達の來たことも知らずに、暗く黒ずんだ顔を敷布に埋めながら眠っていた。そのうちに大きな眼を開いて、驚いたように三吉の方を見た。

「オオ、眼が覚めたそうな。いくらかでも寝られて反かえつて可かつた。三吉叔父さんも被いら入いりしつて下すつたよ」

とお種は正太の枕まくらもと許ゆきへ行つて、母らしい調子で言つた。正太は半ば身を起して、叔父達に一礼したが、復た寝台の上に倒れた。瘦せ細つた手で豊世を招いて、自分の口を指して見せる。やがて豊世が勧める水薬で乾き粘つた口を露あらわして、

「是非一度叔父さんに御目に掛つて置きたいと思いまして……電報はすこし大袈裟おおげさかとも思いましたが、わざわざ御出を願つたような訳です……」

こう正太は三吉に言つた。彼は又、豊世を顧みて、「叔父さん達に倚子いすでも上げたら可かるう」と注意した。

豊世は倚子を寝台の側へ持つて來た。森彦、三吉の二人はそれに腰掛けて話した。お種はなるべく正太を休ませたいという風で、三吉に向つて、

「お前さんが來るか來るかと言つて、彼は昨日から待つていた……この名古屋に、彼の御友達で油絵を描く人がある、その人の描いた画をこの部屋で眺められて、三吉叔父さんに

御目に掛れれば、もう他に彼は思い残すことが無いのだそな……で、そのことを御友達に御話したら、それは造作もないことだ、同じ絵ばかりでも倦きるだろうによつて、時々別なのを持つて来て取替えて進げる、そう言つてあんなのを掛けて下すつた……」

彼女は、寝ながら病人が眺められるようにしてある小さな風景画の額を弟に指してみせた。

森彦はお種や豊世に看護の注意を与えて置いて、一步先に旅舎の方へ帰つて行つた。午後まで三吉は正太の傍に居た。時とすると、正太はウトウトした眼に陥入つた。その度に三吉は病室の外へ出て、夏めいた空の見える玻璃戸のところで巻煙草をふかした。白衣制服を着けた看護婦は長い廊下を往来していた。

森彦は旅舎の方で、看護する人達のことを心配していた。共進会も終つた頃で、二階には泊り客も少かつた。部屋々々は風通しよく明けひろげてあつた。そこへ三吉はお種と一緒に、病院から戻つて來た。

「御風呂を御馳走してくれるそだで、一寸呼ばれに來ました」とお種は森彦に言つた。

「ええ、貴方がたは看病にばかり夢中に成つてゐるが、各自注意しないと不可。湯にでも入つて、すこし休んでお出。今日は一つ——三吉も來たし——夕飯を奢ろう」

と言つて、森彦は女中を呼んだ。

「三吉は何が好い。鳥肉とりでも食うか」と復た彼は弟を顧みて言つた。

一風呂浴びた後、姉弟三人は一緒に集つて茶を飲んだ。「今度は、姉さんも非常に成績が好い——その点は感心した」と森彦が面と向つて姉に言う位で、橋本の家で三吉が一緒に成つた時のお種とは別の人のように見えた。狂人きちがいにでも成るかと思われたお種の晩年に、こうした静かさが来ようとは、實に三吉には思いもよらないことで有つた。

他の兄弟の話が引出された。お種は、満洲から來た実の便りに、漸く彼も信用のある身に成つて、東京に留守居するお倉へ月々の生活費を送るまでに漕付けたことを話し出した。「三吉にその手紙を見せずと思つて……つい郷里くにを出る時に忘れて來た」ともお種が言つた。

宗蔵の噂も出た。「ああ捨身に成れば、人間は生きて行かれるものだ——彼は彼で食え  
る」と森彦は森彦らしいことを言つて、笑つた。

やがて、女中は逃あつらえて置いた鳥の肉を大きな皿に入れて運んで來た。紅くおこつた火、

熱した鉄鍋てつなべ、沸き立つ脂あぶらなどを中央まんなかにして、まだ明るいうちに姉弟は夕飯はなしの箸はしを取つた。

「熱い御馳走ごちそうだが、さあ、やつとくれ」

と森彦は腕まくりして始めた。

肉は焼けてジユウジユウ音がした。見る間に葱ねぎも柔く成つた。お種も、三吉も、口をホウホウ言わせながら、甘うまそうに汗を流して食つた。

「豊世にも食わせてやると好かつた」と森彦は懐をひろげて、胸のあたりに流れる汗を押おしぬぐ拭ぬぐつた。

「彼女あれは病人を引受けで……俺がまた入替りに成つて、彼女よこをも寄すわい……御風呂にでも入れてやつて御くれ」

こうお種は物静かな調子で答えた。

病院の方へ心が引かれて、お種はそこここに別れて行つたが、燈火あかりの点く頃には、豊世が入替つてやつて來た。豊世は行末のことまでも考へるという風で、沈み勝ちに見えた。その晩は遅く成つて、豊世の兄、幸作の二人が郷里きやはんの方からこの旅舎へ着いた。

翌日の午前は、小泉兄弟を始め、ここへ来て脚絆きやはんを解いた人達が一つ部屋に集つて、

正太が亡く成った後のことまでも話し合つた。

「や、名古屋へ来て、ここ家の娘の踊を見ないということは無い」

と森彦もとなしがおが款待もてなし顔がおに言出した。彼は宿の小娘を呼んで、御客様に踊を御目に掛けよ、老お婆ばあさんにも来て、三味線しゃみせんを引くように、と笑い興おきじながら勧めた。

こういう中で、正太は病みつつあつた。午後に一同が病院を訪ねた時は、正太は興奮した氣味で、皆なの見ている前で手足なぞを拭かせたが、股もものあたりの肉はすつかり落ちいた。嘔氣はきけがあるとかで、滋養物も咽喉のどを通らなかつた。正太は、豊世の兄と三吉の二人を特に寝台の側へ呼んで、母や妻の聞いているところで、種々と後事を托した。おそらく彼亡き後には、彼が家の為に尽したことに就いて、同情を寄せる人もあるであろう、と話した。豊世には、長く家に居て、母や幸作を助けるように——何一つ幸福な思もさせなかつたことを氣の毒に思う、とも話した。どうかすると彼の調子は制おさえることの出来ないほど激げつ昂こうしたものと成つて行つた。それが戯曲的にすら聞えた。両手で顔を押えながら聞いていた豊世は、夫の口唇くちびるを霑うるおしてやつた。

「正太さん、どんな心地こころもちがしてるものかネ」

三吉は甥おいの寝台の側へ寄つて尋ねた。名古屋へ着いて三日目の午前のことである。  
 「私は今、何事なんにも思おもいません」と正太は両手を白い掛け蒲團かけふとんの上へ力なげに載せて、大きく成つた眼で三吉の方を見た。「唯……どうかするところ、脆弱もろく行つて了うようなものじやないか……そんなような気はしていります……」

幾干いくばくもない自己の生命を、正太は自覺するもののように見えた。その日は沈着おちついて、言つことも平常いつもと変らなかつた。

乾燥した空氣は病室の壁に掛けたある額の油絵まで明るく見せた。微かすかな心地の好い風も通つて來た。玻璃窓の外には、遠く白い夏雲を望んだ。三吉は窓の方へ行つて、静かな病院の庭を眺めて、復た甥の枕許へ來た。

「正太さん、君の一生を書いて見ようかネ——何だか書いて置きたいような気もするネ」「何卒どうぞ、叔父さん、御書きなすつて下さい——是非御書きなすつて下さい——好かれ、悪あしかれ——」

正太は微かな笑えみを口元に浮べながら、力を入れて答えた。

こうして正太と二人ぎりで居ることは、病院に来ては得難い機会おりであった。豊世は濯すすぎ

物が何かに出て居なかつた。幸作も見えなかつた。その時、三吉は向島の言伝ことづてを齎もたらそうとして、電話で聞かせたことを話しかけた。お種が廊下の方から入つて來た。

「姉さん、一寸彼方あつちへ行つて下さい。すこし私は正太さんに話したいことが有る」と三吉に言われて、姉は笑いながら出て行つた。

「しばらく私の方へは便りが有りません……」と正太は向島親子が病んでいることを叔父から聞いた後で、言つた。「この春あたりまでは文通もしましたが、それからはサツパリ手紙も来なく成りました……」

「駒形にあつた額が三枚僕の家へ來てる。いずれ僕が東京へ帰つたら、あの中をどれか一枚、君の記念として送りましょう」

「何卒、宜しく……」

正太は意外な音おとずれ信おとずれを聞いたという顔付で話した。

何気なく三吉は廊下の方へ出て見た。そこで豊世と幸作とに逢つた。三吉は姉の様子が好さそうなのよろこを悦んで、それを二人に話した。「母親さんも氣を張つて被入いいらつしやるからでしようよ。私の方が反かえつて励しんまされる位です」と豊世は言つた。「どうして、心はあれで弱つてゐるんです」と彼女は附添えた。

幸作に伴われて、三吉は二階の昇降口のぼりぐちの人の居ないところへも行つた。

「満洲の父親さんおとうの方へは知らせたものでしようか……」

「さあねえ……もし万一小のことでも有つたら、その時は知らせるサ」

「私も、まあ、それに賛成だ……」

二人は欄てすりに倚りながらこんな立話をした。その時幸作は、豊世の一身に就いて、行末の方針に苦むということを話した。正太の看護はしても、再び橋本の家へ帰る心は、豊世には無いらしいとのことで有つた。

三吉も、そう長く名古屋に逗留とうりゆうすることは出来なかつた。午後まで、皆なと一緒に正太の側に居た。甥の病勢もまだ旦夕たんせきに迫つたという程では無いらしいので、看護を人々に頼んで置いて、東京の方へ帰ることにした。

別れる時が來た。つと三吉は正太の枕許へ行つた。

「正太さん。僕はこれで失敬します」

と言いながら、熱い汗ばんだ手を差出して、握手を求めた。

長いこと叔父甥は手を握り合つていた。やがて三吉が別れを告げて行こうとすると、正太は周章あわてて叔父の解ほどいた手に取とり繩すがるようにして、

「僕も勇気を奮<sup>ふる</sup>い起して、是非もう一度叔父さんに御目に掛ります……」  
と言いながら、堅く堅く叔父の手を握り〆《しめ》た。一度に込上げて来るような涙が正太の暗い顔を流れた。

「オオ、そうだとも……」

側に居たお種は吾兒<sup>わがこ</sup>を励ますように言つて、思わず両手で顔を掩<sup>おお</sup>うた。次の部屋には、幸作が坐つて、頭を垂れていた。

長い廊下の突当りには消毒する場所があつた。三吉はそこで自分の手をよく洗つて、それから姉にも別れを告げた。正太は寝ながら、よく見て置こうとするような眼付をして、叔父を見送つた。その時は豊世は室に居なかつた。幸作は病院の出口まで隨<sup>つ</sup>いて送つて來た。門を離れて、三吉は激しく泣いた。

「どうして、十日や二十日で死ぬようなものでは無いぞ。でも、正太も、下手に遺言なぞをしないところは、一寸彼も考えてる」こう森彦の旅舎<sup>やどや</sup>で人々が言い合うのを聞き捨てて、その晩三吉は名古屋を発つた。夜行汽車の窓は暗かつた。遠い空には稻妻<sup>いなづま</sup>が光つて、そ

れが窓の玻璃に映つたり消えたりした。

「叔父さん——叔父さん——」

と呼ぶような別際（ぎわ）の正太のことを胸に浮べながら、三吉は自分の妻子の方へ帰つて行つた。それは最早六月の初であつた。家では、お雪や親戚の娘達が名古屋の方の話を聞こうとして、彼の周囲（まわり）に集つた。

六月九日の夕、三吉は甥の死去したという電報に接した。その夜、火葬に附するともして有つた。それを彼はお雪に見せて、互に顔を見合せた。

「今年は私も三十三の厄年です……ひよつとすると今度の御産では、正太さんの後を追うかも知れない……」

心細そうに言つて、お雪は二階の戸棚（とだな）にある写真箱の中から、正太の兜（かぶと）町（まち）時代に撮つた半身で横向のを探し出して來た。それを亡くなつた三人の娘の位牌（いはい）の前に置いて、燈明（あ）も進げた。

「なんだか急にそこいらが寂しく成つた」

と三吉も、今更のように家の内を眺め廻した。正太や豊世がかわるがわるやつて来て、長火鉢の側でよく話したことは、何となく急に過去（うしろ）に成つた。三吉夫婦の周囲（まわり）には、お俊

夫婦、お愛夫婦などの若い一対が幾組も出来たばかりでなく、お福まで、勉と一緒に子供を連れて出て来て、東京に世帯を持つようになつた。

その晩は暑苦しい上に、風も無かつた。七度目の懷妊した身でいるお雪に取つては、この遽かにやつて来た暑気が殊に堪え難かつた。蒸されるような身体の熱で、三吉も眠ろうとして眠られなかつた。夫婦は子供等のごろごろ寝てゐる側で、話しつづけた。正太のことを語り合つた。勉やお福の噂もした。終には、自分等の過去つたことの話までも、それからそれと引出された。

お雪は横に成りながら、

「……私は、自分のことを考えますと、なんですかこう三人別のものがそこへ出て来るような気がします——極く幼少い時分と、学校に居た娘の頃と、それからお嫁に来てからと——三つずつ別々の自分じゃないかと思うような、まるでその間が切れちやつてるようなものです……私は子供の時分には、眞實に泣いてばかりいるような児でしたからねえ……」真に心の底から出て来たような調子で、彼女は話した。

すこしトロトロしたかと思うと、復た二人とも眼が覚めた。

「お雪、何時だろう——そろそろ夜が明けやしないか——今頃は、正太さんの死体が壮

に燃えているかも知れない」

こう言いながら、三吉は雨戸を一枚ばかり開けて見た。正太の死体が名古屋の病院から火葬場の方へ送られるのも、その夜のうちと想像された。

屋外はまだ暗かつた。そと

## 青空文庫情報

底本：「家（下）」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年5月10日発行

1968（昭和43）年4月30日第18刷改版

1998（平成10）年9月5日50刷

入力：（株）モモ

校正：藤田禎宏

2000年12月5日公開

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 家 (下)

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 島崎藤村

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>